

# 戦国乙女現代ロマン記

紫電月華

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この物語は戦国の乙女達が現代に逆トリップする話です。  
後、ハーレムなので見る方は気を付けて下さい。

最近パチンコの花が出たので書くことにしました。

初めてなのでキャラ崩壊もありますが、何とぞ温かい目で見てください。

目次

異世界の戦国武将〜乙女達の秋〜

第1話	1
第2話	16
第3話	35
第4話	49
第5話	59
6話	67
7話	79
8話	96
9話	108
10話	117
11話	127
12話	141
第13話	164
14話	177
15話	192
16話	206
17話	224
18話	238
19話	267
20話	298

# 異世界の戦国武将〜乙女達の秋〜

## 第1話

皆さん初めまして、俺はこの物語の主人公の沢井和樹です。しがな  
い大学2年生だ。

実は：俺は今最高に気分がいいんだ？何故なら先ほどパチンコで  
見事勝利を納めてきたのだ。

和樹「いやー？まさか乙女の新台幣で勝てるなんて、ラッキーだった  
な。」

和樹「でも…最後のあたりは少し違和感があったな…？何だったん  
だろ…？」

それは、最後の確変中に榛名という勾玉が虹色に光ったのだ。一瞬  
の事だったので分からなかったが、あれは確かに光ったのだ。

でもおかしいのは、榛名が光ることは大当たりが濃厚なのだか、何  
故かその時は違う場面で当たりになったのだ。

だがあの時に見た榛名は確かに光ったのだけど、スペックを何度見  
返しても、確変中に榛名が出てくることは無いと書いてあった。

和樹「まあ気にしてもしょうがないか、帰ろ？」

なんやかんやしてるうちに家に着いた。うちの家は一戸建てで中々広い1人ではかなり余る家だ。両親は既に他界しており、生活を1人でしている。

和樹「暗いな…(汗) まあ電気点けてないし、仕方無いけどやっぱり男の1人暮らしは寂しいよなー(涙)」

そして、鍵を開けてリビングのドアを開けたその時！

??? 「曲者??」

と言う声がかし、棒立ちしている俺の横にある壁に何かが刺さった。

和樹「は?。」

俺は暫く動けずにいた。

??? 「止めなさい?ミツヒデ?いきなり攻撃してはいけません?。」

??? 「しかし？ヨシテル様？この者が我らをさらったかもしれないんですよ？」

??? 「まあまあ？落ち着いて下さい？今はこの人から事情を聞かないと？ねえドウセツ？」

??? 「ソウリン様は落ち着きすぎです。」

複数の女性の声が聴こえる、いったい何人いるんだ？

取り敢えず暗くて状況が、分からないので部屋の電気をつけた。

和樹「え!!」

ミツヒデ？「くっ？何かの術か？」

ヨシテル様？「うっ!!眩しい…。」

ソウリン様？「凄いですよ!!ドウセツ？明るくなりました？」

ドウセツ？「見れば分かりますソウリン様。」

俺は言葉を失った。それは目の前にパチンコで有名な戦国乙女のキャラが居たのだから!!

ミツヒデ? 「貴様? 何をした答えろ?」

和樹 「俺は電気を点けただけ何だが?」

ミツヒデ? 「何?…電気とは何だ? それに我らをこんな場所に幽閉してなんのつもりだ? ヨシテル様に何かしてみろ貴様を殺す?」

懐からクナイを取り出すミツヒデ、それを制したのは足利ヨシテルだった。

ヨシテル 「武器を納めなさい…ミツヒデ。」

ミツヒデ 「しかし? ヨシテル様?」

ヨシテル 「話を聞くだけです。」

ミツヒデ 「……………分かりました。」

ヨシテル「ありがとうございます…すみません私の家臣の者が、まずは謝らせてください。」

突然に頭を下げて来たので俺は慌てて言葉を言った。

和樹「頭を上げて下さい？俺はケガもしてないので、大丈夫です？お気遣いありがとうございます。」

自分の言葉とは裏腹に、俺の頭の中は絶賛混乱中だった。

和樹（どう言う事だ??何で戦国乙女のキャラが居るのかは謎だけど、この人たちは多分本物だろう。コスプレと言う事もあり得るがその可能性は低いと思うし、そもそもコスプレしてまで俺の家に居る理由がない…と言う事はやはりこの人たちは戦国乙女の世界の人でまづ間違いないな…しっかし、逆トリップかくどうしたもんかな…。）

ヨシテル「……丈夫ですか？大丈夫ですか？」

ここで声が掛けられてた事に気づく。

和樹「すみません？…考え事をしてました。」

ヨシテル「そうですか…良かった。」

ソウリン「あのー？まずは自己紹介しませんか？」

ヨシテル「そうですね？そうしましょうか？私は將軍の足利ヨシテルと言います。宜しく願いますね。私の後ろに居るメガネをかけるのは、家臣の明智ミツヒデです。」

ミツヒデ「……………明智だ。」

ソウリン「私は豊後の大名大友ソウリンです。宜しく願います??」

ドウセツ「私は、ソウリン様に仕えているカラクリ人形の立花ドウセツと言います。」

和樹「お初にお目にかかります。俺は沢井和樹と言います。」

お互いに自己紹介が終わり、ヨシテルが本題に入った。

ヨシテル「まずここは何処ですか？見慣れないものが沢山ありますけど日本の何処かですか？」

和樹「はい？足利様の推測どうりここは日本です。但し皆さんの居た戦国時代から400年先の未来平成の時代です。」

四人「ヨシテル／ミツヒデ／ソウリン／ドウセツ」「えっ／何だと／うそ／っ!!」

ヨシテル「そうですか…それで和樹さんに一つだけ聞きたい事があります。」

震える声でヨシテルが自分に問う

和樹「何でしょうか？」

ヨシテル 「い…戦は無くなったのですか？」

和樹 「はい？世界はいまだに戦争をしている国もありますが、日本は比較的平和な国ですよ？」

ヨシテル 「そっそうですか…良かった…本当に良かった。」

ミツヒデ 「ヨシテル様…。」

ソウリン 「本当に良かったですね？ヨシテル様？」

ヨシテル 「はい？」

その時、ヨシテルは綺麗な笑顔で笑った。

ドウセツ 「しかし…400年先の未来と言われましてもまだ判断材料が些かなすぎますね…。」

ソウリン「そうですね…和樹さんを疑っているわけでは無いのですが、帰れるかどうか分からないですし…少し心配ですね…。」

和樹「取り敢えず、こつちに来たのは四人だけ何ですか？」

ミツヒデ「いや、我々四人だけではない…隣の和式部屋にまだ武将がいる。」

和樹「ええー？何人居るんですか？」

ドウセツ「確認した所…ノブナガ様、ヒデヨシ様、トシイエ様の尾張国そしてヨシモト様、イエヤス様、リキユウ様の駿河国後はマサムネ様、モトナリ様、ヒデアキ様、モトチカ様…が居ますね。」

和樹「起きてるんですか？」

ドウセツ「いえ…皆様まだ寝ています。起こしますか？」

和樹「そうですね、説明しないといけませんからね。他の皆様を起こしてもらっても良いですか？」

四人「ヨシテル／ミツヒデ／ソウリン／ドウセツ」「分かりました。」

さてと…物を移動させなければ、14人も入るスペースはあるけど何が起こるか分からないし、一方隣の部屋ではヨシテル達が残りの武将を起こしていた。

・  
・  
・

暫くして全員が出てきた。

ヨシテル「和樹さんお待ちせしました？皆さん自己紹介してください。」

ノブナガ？「お主に指図されるまでもない、ワシは第六天魔王織田ノブナガじゃ？」

ヒデヨシ? 「私は豊臣ヒデヨシだよ? 宜しくねかっちゃん?」

トシイエ? 「オイラは前田トシイエだ宜しくな?」

ヨシモト? 「オーホホホホ? 次は私の番ですわね? 初めまして、私  
…今川ヨシモトと言います? 宜しくお願いしますわー?」

イエヤス? 「えつと…徳川イエヤス…です。」

リキユウ? 「私は千リキユウと言います。茶人ですので宜しくお願  
いします。」

マサムネ? 「私は独眼竜伊達マサムネだ。」

モトナリ? 「初めてね私は毛利モトナリよ。」

ヒデアキ? 「わっ私は小早川ヒデアキですうー? 宜しくお願いしま  
すうー? 」

モトチカ? 「私は長曾我部モトチカよ? 宜しくね? 」

俺は今、物凄く感動してる? 何せ…戦国乙女がほぼ勢揃いしてるん  
だから? 疑問なのは…武田シンゲンと上杉ケンシンが居ないことだ  
けど、増えると困るから言わないでおく。

和樹「皆さん改めまして、私はこの家の者で…名前は沢井和樹と言  
います。」

ノブナガ「しかし、ここは日本なのじゃろう? ヨシテルから一応聞  
いておるが…。」

和樹「はい…そのとうりです。皆さんの事を説明しますので各自椅  
子に座って貰っても良いですか? 」

皆「ああ／分かった／分かりました」

ヨシテル「あのく和樹さん？何処に行くのですか？」

和樹「ああ…すみません（苦笑）勝手に動いてしまい、あの足利様すみませんが、明智様と立花様を呼んで頂けませんか？」

ヨシテル「えっ？ミツヒデとドウセツをですか？」

和樹「はい？お願いします。」

ヨシテル「分かりました？直ぐ呼んで来ますね？」

そして二人は直ぐに来た。

ミツヒデ「貴様？ヨシテル様を使うとは何事だ？」

ドウセツ 「私は構いませんが…呼ばれた理由が分かりませんが？」

和樹 「あーすみません…皆さんにお茶を出そうと思ひまして、けど自分の身の潔白が晴れていないので…お一人に見といて欲しいのです。」

ミツヒデ 「なるほど…毒味…と言う事だな。」

ドウセツ 「そう言う事であれば手伝います。」

和樹 「えくと…お茶請けあつたかな？」

ドウセツ 「気を使わなくても構いませんよ？」

和樹 「いやでも、豊臣様とか徳川様とか大友様辺りは甘味が欲しいと思いますけど？」

ミツヒデ「そんな事も分かるのか？」

和樹「まあ、その辺も説明しますので行きましよう？」

そうして皆が居るリビングに入った。

## 第2話

そこには既に各武将達がそれぞれ椅子に座って居た。

和樹「すみません…皆さんお待ちせしました。」

ノブナガ「何をしていた？お主が説明すると言うたんじゃろが？」

ミツヒデ「待って下さい？ノブナガ殿？沢井はお茶を用意していました。」

ヨシテル「そうですよ？ノブナガ殿そんなに言っでは和樹さんが可哀想ですよ？」

ヨシモト「全くもってそのとうりですわ？これだから野蛮人は困りますわ？」

ノブナガ「ほう？…ならばワシとやるかお嬢？」

ヨシモト「良いですわ？受けて立ちますわ？」

ヒデヨシ／＼イエヤス「お館様？／＼お姉様…。」

ノブナガ／＼ヨシモト「いくぞ？／＼いきますわ？」

二人が武器を構え攻撃するその時!!

ガツ？

二人を止めたのは何と!!先程まで優しい雰囲気だったのがガラリと変わり険しい表情した和樹がいた。

和樹「そこまでにしてもらおうか…お二方がこれ以上暴れるのですら、俺が相手になりますか？」

二人を威圧する。

その光景に周りは驚いているヨシテル達がいた。戦国時代は女性の地位が高く男性の地位が低かったので、ヨシテル達は男性が強いという意識が余りなかったが、中には例外がいた。

榛名の力を得た毛利輝基…そして、將軍家に謀反を起こした松永弾正久秀がいたが、自分達の力で解決してきた。だからこそ戦国乙女である自分の攻撃が止められるとは思っていなかった。

そして止められた事に、二人は驚いたが直ぐにヨシモトは冷静になったようで、謝ってきた。

ヨシモト「急に暴れてしまい申し訳ないですわ…すみません。」

和樹「大丈夫ですか？怪我が無くて本当に良かったですよ？」

先程と変わり、和やかな雰囲気になっていた。しかし俺はこの時あることを忘れていた…そうもう一人の戦国乙女がこの程度で治まる

はずがないと。

ノブナガ「くくっ? わっはっはっは? やるではないか和樹? ワシとさしで勝負じゃ?」

ヨシテル「ノブナガ殿?」

ヨシモト「ちよつと? ノブナガさん!! せっかく和樹さんが止めて下さったのに何でケンカ腰なんですか?」

和樹（あー忘れてた…（苦笑）ノブナガはこういう人だったんだ。ゲームで分かっていたんだけどなく仕方ないか? もうなるようになってだ?）」

ノブナガ「何を言うか? ワシとお嬢の攻撃を止めたんじやただの男がな…それだけでワシの興味をそそられたんじや? だから何が何でも勝負してもらおうぞ?」

和樹「はあー…分かりました？その勝負受けてたちます？」

そうして俺がいつも使っている離れの道場に向かうことに……その道中、織田様の家臣の二人が俺に詰め寄る。

ヒデヨシ「かつちゃん駄目だよ？お館様と勝負なんて怪我するよ？」

トシイエ「そうだぜ止めときなつて？オイラやヒデヨシが二人係でも齒が立たないんだからな？」

二人が俺の側で闘うなど言っているが、他の武将は単に俺の心配してくれていたたり、興味本意で見たいと言っている。

此処で離れの道場に到着。先ず自分とノブナガが先に道場に入り、その後他の武将達が道場に入った。

ノブナガ「中々良い道場じゃ？」

和樹「ありがとうございます。」

ノブナガ「因みにお主…武器は使わんのか？」

和樹「ええ…自分が使うのは武術ですから」

ノブナガ「なるほどのうゝそれでは少しは期待が持てそうじゃの？」

和樹「余り過渡な期待をして欲しくは無いのですが（苦笑）」

ノブナガ「まあそう言うではない。ワシは木刀で構わんじやろ？」

和樹「構いませんよ……。」

和樹（でも確かに…あんまりこの武を人相手にやるのは好ましくないが、だが一方で何処まで今の自分が戦国乙女の1人のノブナガに食らい付いていけるか試してみたい？まさか…まだ自分の中にこんな感情があるなんてな…。）

ふと自称気味に笑ってみる。

ノブナガ「なんじゃ？いきなり笑いよって気味悪いの…まあ、よい？それでは始めるとするかの？全力でこい？」

和樹「行きます？」

この時…：俺は師から受け継いだ流派を使うその名は【月影流】日本の伝統の武【合気道】と【中国拳法】を混ぜたオリジナルの流派だ。

ノブナガは何時も使っている天下不武が彫られている大剣を使わず、木刀で向かってくる。

ノブナガ「はあ？やあ？」

和樹「てい？うらあ？」

ノブナガが仕掛けてくるが、それを俺は手でいなす、そして…直ぐ様パンチや蹴りを繰り出すが、それを意図も簡単にノブナガに防がれてしまう。

ノブナガ「ほう…中々やりよるのう。ワシの攻撃をここまで防いだのは、男の中ではお主が初めてじゃ？」

和樹「お褒めに預かり光荣ですね？」

ノブナガ「ふん？滅多な事を言うで無いわ？」

和樹「はは…これは失礼？では次で決めます？」

ノブナガ「ワシもじゃ？これで終いじゃあ？」

そして二人同時に走り出す、ガキン??と双方刃を交えた………倒れたのはノブナガだった。

ノブナガ「ちっ？ワシの負けか……」

和樹（危なかった??とつさに弐ノ型・陽炎から参ノ型・木枯らしに切り替えて良かった、もし替えて無かったら倒れてたのは俺だったかもしれないな。）

和樹「ハア……ハア……ありがとうございます。後でちゃんと説明受けてくださいね。」

ノブナガ「ああ…分かった？分かった？」

ノブナガと話していると、急に思い出したように他の武将達が俺の周りに集まってきた。

和樹「ちよ?!ちよつと?!皆さんどうかしましたか?!」

ヒデヨシ「どうしたじゃないよ?凄いや?お館様に勝っちゃうなんて?!」

トシイエ「やるじゃんお前?!見直したぜ?」

ヨシモト「ええ…本当に凄いですわ///(殿方がこんなに格好いいとは思いませんでしたわー///)」

イエヤス「確かに凄い…。」

リキユウ「ほー？これは中々ですね。」

ミツヒデ「まさか？勝つとは…な。」

ヨシテル「ふふ…？本当に凄い方だ。」

ソウリン「ひゃー!! 本当に勝っちゃうなんて／＼／＼／＼(初めて見た時から胸がドキドキしてます?これは恋?うふふ／＼/??)」

ドウセツ「ソウリン様…顔がニヤけてます。」

マサムネ 「意外とやるな？一度是非手合わせを願いたい物だ？」

モトナリ 「確かに凄いいけど…私はあんまり興味無いわ…。」

ヒデアキ 「ええー!!そつそうなんですか？モトナリ様？あんなに凄  
い闘いだっただのに!!」

モトチカ 「くうー？やるわね？私もウズウズしちゃうじゃない？」

皆がそれぞれ色んな声を掛けてくれた。その事に少し安心してい  
る自分がいた。

和樹 「取り敢えず、皆さんにこれから事を説明するのでリビング…  
じゃない居間のほうに行きましょうか。」

全員「ああ／分かった／分かりました」

さてと…皆が居間に戻り、冷えたお茶を温かいのに入れ替えてから、俺は自分の部屋で服を着替えると…!!??

和樹「嘘だろ!!これって?」

それは…良く和樹が戦国乙女のゲームをしている、携帯ゲーム機の画面が勝手に映り、その画面には和樹が目を疑う物が映っていた。

和樹「早く、これを皆に見せないと?」

俺は直ぐ様、着替えてゲーム機を持ち…皆が待っているリビングに急いで下りた。

ダダダッ？パンツ？

和樹「皆さん？」

ヨシモト「かつ和樹さん!!」

ヨシテル「どうしたのですか!! そんなに慌てて？」

和樹「すすすみません？おっ脅かす積もりは無くも…じゃなくて？  
とにかくこれを皆さんに見て欲しくて？」

全員「これは？」

和樹「これはゲームと言うこの時代の娯楽です。ここにカセットと呼ばれる物をゲーム機に入れて電源を入れれば画面に映ります。」

そして、ゲーム画面が写し出された…しかし？そこには皆の姿が白く塗り潰されていた。

全員「!!!」

これには驚きを隠せないようだ。それもそうだ…いきなり400年先の未来に逆トリップし、其処で自分達が娯楽になっていて、更には自分達の姿が映ってなかったのだから。

ヨシテル「和樹さん!!これはどういうことですか?」

和樹「俺もさつき自分の部屋で服を着替えてる時に気づいたんです。多分：俺の憶測に過ぎませんが、何等かの理由で、この時代に逆トリップしてきたと思います。皆さんが来る前に何か共通の出来事みたいな事が起こりませんでしたか？」

全員「うーん??？」

ノブナガ「ワシはサルとイヌとの修行に付き合っていたからのう？」

ヨシモト「私達は三人でお茶をしておりましたわ？」

ヨシテル「私はミツヒデと義昭とソウリンとドウセツと共に話をしていました。」

マサムネ「私達は旅の途中でモトチカ殿に会い、近くの村まで歩いている時だった。」

和樹「皆さん…ものの見事にバラバラですね。」

モトチカ「ねえ？もしかして帰りかたとかわかちやつたりする？」

期待を込めた眼差しをした皆さんが一斉に見てきたが、生憎解るわけがなく…俺は力なく首を横にふった。

和樹「すみません力になれず。」

ヨシテル「大丈夫です？そんなに気を落とさないでください？」

ミツヒデ「しかどうしますか？いくら戦がないと言っても、まだ確認もしてない状況で、この大所帯で動くのは得策ではないと…。」

ソウリン「弱りましたね。」

俺はここである提案をする。

和樹「皆さんがもし、よろしければ俺の家に住みませんか？」

ヨシモト「よろしいんですの？こんな大所帯ですけど迷惑じゃありませんこと？」

和樹「大丈夫ですよ？生憎家は広いんで、でも皆さんこそいいんですか？見ず知らずの男の家に住むのは結構しんどいと思いますけど

「？」

ヨシテル「いえいえ？・こちらこそ有り難い申し出です。では…お世話になります？・宜しくお願いしますね？。」

和樹「はい？・分かりました？」

こうして……………

戦国乙女達とのハチャメチャな生活が始まろうとしていた。

### 第3話

和樹「では…皆さんに1つだけお願いがあります。」

ヨシテル「はい?何でしょう?」

和樹「この平成の時代は、武器を持つことが禁止…というか帯刀してはいけないと法律で定められています。ですのでお願いと言うのは…皆さんの武器を預らせて欲しいのです。」

ミツヒデ「やはり?貴様はそれが狙いか?」と武器を取り出しおれの首筋に当てる。

ヨシテル「ミツヒデ?止めてください??」

ミツヒデ「申し訳ありませんが、例えヨシテル様の命でも退けません??」

ヨシテル「何故ですか?」

ミツヒデ「無礼を承知で述べさせて頂きます？ 沢井はあのノブナガ殿に匹敵もしくは越える力を有しています…だから我々を押さえ込めるそう、判断しました。」

ヨシテル「それは……………っ？」

重くなる空気の中、リキユウが話し出す

リキユウ「それは少し、早計ではありませんか？ ミツヒデ殿？」

ミツヒデ「どういう意味だ？」

リキユウ「言葉通りの意味ですよ。」

ミツヒデ「私が早とちりをしているとでも？」

リキユウ「残念ながら…そうです。」

ミツヒデ「なんだと？」

激昂したミツヒデが声を荒げるが、それは直ぐにかき消された。

ノブナガ「止めぬか？ミツヒデ？」

ミツヒデ「どうして止めるのですか？ノブナガ殿？」

ノブナガ「ふん？別にお主が和樹を疑ってるは構わんが、ワシの邪魔をされては溜まったものでは無いからかう？」

ミツヒデ「別に？ノブナガ殿の邪魔をしようとは思っていません？私は、私のやり方でヨシテル様を御守りしていきますので？」

ノブナガ「ふう…やはりお主はヨシテルの事になると、どうも周りを見失うようじゃの…。」

ミツヒデ「いくらノブナガ殿でも、これ以上の侮辱は許さない？それによいような者に負けた貴女に言われる筋合いはない？」

ヨシテル「ミツヒデ？」

ヨシテルがミツヒデの名前を呼び静止を促すが、効果は余り無い。そしてノブナガに言われて怒り浸透で頭に血がのぼっているのか、ノブナガを非難する言葉が止まない。

一方ノブナガは何喰わぬ顔で、非難の言葉を聞き流しているが、それを良しとしない織田軍屈指の二人の武将が言い返す。

トシイエ「おいコラ？黙って聴いてりゃあ好き勝手言いやがって？許さねえぞ？」

ヒデヨシ「それに酷いよ…。何時ものミツチーならこんなこと言わないよ？」

ミツヒデ「……くっ？」まだ納得できない感じのミツヒデにヨシテルが言葉をかける。

ヨシテル「ミツヒデ……。私の為にここまで想ってくれてありがとうございます。主君としてこんなに嬉しいことはありません。ですが、そう想っている貴女が……ノブナガ殿を非難してヒデヨシ殿やトシイ工殿に不快な思いをさせてはいけないと思います。」

ミツヒデ「??」

ミツヒデ（そうだ……。いままで私はヨシテル様や義昭様に忠誠を誓ってきたではないか？それをこのような形でリキュウ殿やノブナガ殿……ヒデヨシ殿やトシイ工殿にもそして……沢井にまで迷惑をかけてしまった……。ましてや沢井の考えや思いを聴かず……自分の我をとうしてしまった。我ながら情けない……沢井は自分達を住まわせてくれる上に説明する間も武器を持たせたままだった。普通に考えれば解ることだったのに……。私は……。）

ミツヒデ「ヨシテル様……申し訳ありませんでした？」

ヨシテル「ミツヒデ??分かってくれたのですね?」

ミツヒデ「はい?それと…リキユウ殿?声を荒げてしまい申し訳ない?」

リキユウ「分かって頂けたのなら、私からは言うことはありませんよ。」

ミツヒデ「そしてノブナガ殿数々の無礼申し訳ない…それとヒデヨシ殿にトシイエ殿もすまなかつた?主君を馬鹿にされて腹が立たない家臣はいない…。」

ノブナガ「全く…仕方無い奴じやのう…次は無いから気を付けるよ  
うにのう。」

トシイエ「うーん?オイラは納得できない部分もあるけど、お館様が気にしないならいいや?でも次お館様の悪口を言ったら將軍の家臣でも叩き潰すからな?」

ヒデヨシ「お館様が気にしないなら、私も気にしないから？それとミツチーが分かってくれたから私は嬉しいな？」

ミツヒデ「寛大なお心ありがとうございます。」

そして端から見ていた俺の所にミツヒデがやって来て。その場で俺に向かって謝った。

ミツヒデ「沢井…すまなかつた？貴殿の言葉を聴かなかつた…何か考えがあつての物言いだつたのだろうか？」

和樹「ええ…まあでも断られる事も考えていました。」

俺が言った言葉が意外だったのか、驚いた顔をしていた。

ミツヒデ「どうしてなんだ？」

和樹「そりやだつて皆さんの命が宿っている大切な物なんですから、簡単には承諾してはくれないと踏んでいました。まあ…武器を外に持ち出さなければ大丈夫ですよ剣の手入れや鍛練もしたいでしょうからね。」

笑顔で答えたすると……ボン??とミツヒデの顔が真っ赤に??

和樹「どうしました?大丈夫ですか?明智様?」

ミツヒデ「／／／つ?」

いきなり走って、ヨシテルの後ろに隠れた。

ヨシテル「ミツヒデ…クスクス?」

ミツヒデ「／／／笑わないで下さい?」

ヨシモト／＼ソウリン「もう？／＼むう〜？」

和樹「何だ??？」

俺には何故ミツヒデが顔を赤くしたのか？どうしてヨシテルがそれを見て笑っているのか？何故ヨシモトとソウリンが機嫌を悪くしているのが全く検討が付かないのだが？

ヨシテル「では、貴方に武器を預けます。皆さんも預けて下さい。」

全員「分かった？」

和樹「確かに預かりました？しっかり保管させて頂きます？」

そして、それぞれの武器を庭にある倉庫に保管しに行った。

和樹「では？これから外に行きたいと思えます？」

全員「おおー？」

和樹「ですが、皆さんの今の格好では目立ち過ぎます。」

ソウリン「そうなんですか？」

和樹「ええ…皆さんの格好は外では認知されているので、知っている方がいると一斉に囲まれますね。」

ドウセツ「どうすればよろしいでしょう？」

和樹「それには一応考えがあります。それは買い物に、今川様に一緒に付いてきて貰います。」

ヨシモト「わっ私ですの!？」と驚いていた。

だが全員から不評が上がる

ノブナガ「何故お嬢だけなのじゃ？ワシも連れていけ??」

ヨシテル「私も？今の世がどうなっているのか見てみたいですか？」

ソウリン「私も南蛮の物を…ドウセツ「駄目ですか？」はう？Σ何故ですかドウセツ？」

ドウセツ「ソウリン様は南蛮の物が絡むと本来の目的を忘れるので…  
（呆）」

ソウリン「そんなあー？」

マサムネ「私も外が気になるな…。」

ヒデアキ「マツマサムネ様!!危ないですよ?もしもの事があつたら、たつ大変ですう〜?」

モトナリ「ハア…何を言っているの?あの子が言っていたでしょ?戦は無いつて心配し過ぎよ…それにマサムネはその辺の奴等に簡単には負けないわ…。」

モトチカ「私もいつきたいなー?未来のお酒とか気になるしね?」

ここで武将達が自分達も連れていけど、要望を言ってきたが車は一応7人乗りだが当然倍の人数の14人は乗らないし、しかも服が母親の物なのだが多分身長的にヨシモトにちょうど良いのだ。それとヨシモトを選んだもうひとつの理由が戦国乙女の世界でもヨシモトは自称ファッションリーダーを自負してやっているのです、他の乙女達より服のセンスはあると願いたい。

和樹「取り敢えず…皆さんの服を買ってきますので、それから順番に買い物に行きましょう?」

全員「分かった?／分かりました?」

和樹「では、今川様これに着替えて貰っても良いですか？」

ヨシモト「分かりましたわ？」

和樹「えーと…まずは青色の布がジーンズと呼ばれ下に履くものです。次にシャツを着て貰いますこれはタグと呼ばれるヒラヒラしたものを後ろにして着て下さい。では玄関の方で待っているので着替えたら来て下さいね。」

ヨシモト「任せてください。」

そうして俺は部屋から出た。すると数分後着替えを終えたヨシモトがやって来る。

和樹「良く似合ってますよ。」

ヨシモト「ありがとうございますわ／＼／＼／＼でもこの服に使われ

ている生地は軽いんですね?!驚きましたわ?!」

和樹「そうですか?では行きましようか?」

ヨシモト「はい」と車に乗り込み、

こうしてヨシモトと、二人で最初の買い物に出掛けるのだった。

## 第4話

車に乗り込んでから、ヨシモトは落ち着かないのか辺りをキョロキョロしている。

和樹「大丈夫ですか？今川様、落ち着きませんか？」

ヨシモト「えっ…ああ！すみません…ただこのような乗り物に乗ったのは初めてなので、ちよつと怖いですわ…馬より速いなんて…」

それはそうだろう戦国時代に車など存在していないし、主な移動手段は馬だったのだから車に乗れば当然不安に思うだろうそこで俺は少しでもヨシモトの不安を取り除けるようにこんな事を提案する。

和樹「今川様もし怖いのでしたら、手を繋ぎませんか？」

ヨシモト「えっでも／＼／＼」

顔を赤くしうつ向いてしまった。

和樹（あー俺の馬鹿？…気を使わせたつもりが恥めてどうするんだー  
（汗）

和樹「すみません…少し出過ぎたまねをしてしまいましたね」

反射的に罪悪感のほうが強くなり謝ってしまうするとヨシモトは俺が謝った事に気付き慌てて言葉を放つ。

ヨシモト「違いますわ！別に和樹さんがお嫌だとは言っていないせん、ただ殿方とこんな風に二人になったことが無いので驚いただけですわ！和樹さんは私の不安を取り除いてくれようとしてくださいましたのね。ありがとうございますわ？もし宜しければ到着するまで

の間手を握って頂けませんこと?」

和樹「勿論!俺の手で宜しいなら」ヨシモト「ええ和樹さんの手がいいんですの〃〃〃〃」

ヨシモトは少しぎこちない感じで俺の手を握ったその時ヨシモトは小さく微笑んでいた。

暫くしてこの町で一番大きなショッピングモールにやって来たこのショッピングモールはかなり大きく食材は勿論服や生活用品が揃いそして来た客を退屈させないために、ゲームセンターや映画館や書店などと言ったアミューズメントが盛り沢山な場所だ。

1日でまわるとしてもとてもじゃないが時間が足りずまわりきれない。

ヨシモト「すっ凄いですわ!!人がこんなに沢山いるんですの!」

和樹「俺からしたら見慣れた光景ですけどね、さあ!行きましようか」

ヨシモト「待って下さい!」

二人で人の波を掻き分けて何とか目的の服屋に着いた。

ヨシモト「こっこっこんなにありますのー!」

和樹「ええ今川様には無理を承知で頼むんですが他の皆さんの服も見繕って頂けませんか?勿論今川様もご自身の服を選んで頂いて構いません後服は1人に付き7着から10着位選んで貰っても良いですか?着まわしが出来るように」

ヨシモト「分かりましたわ！ファッションリーダーとしての腕がな  
りますわー」

凄いテンション…いやこの場合は士気が上がっているように見える。さて俺も行くかなヨシモトだけを行かせたら大変だ…と笑みをこぼしヨシモトのいる方に向かう。

・  
・  
・  
・

2時間後……俺達はやっとの思いで店から出てきた。

ヨシモト「ふうーいい買い物をしましたわー？」

和樹「ゼイ…ハア…ゼイ…ハア…（大変だった）」

俺は荷物を両手に持ち肩で息を整えていた。

ヨシモト「大丈夫ですか？すみません珍しいお召し物が沢山あったのでつい…」

和樹「大丈夫ですよ！取り敢えずちよつと休憩をいれましょうかそこにカフェ…じゃない茶屋があるのでそこにしましょう」

ヨシモト「分かりましたわ」

二人で近くのカフェに入った。

和樹「今川様は何か決まりましたか？」

ヨシモト「えーと余り南蛮のお茶を飲みませんのでどれにしているか分かりませんわ」

和樹「分かりました俺と一緒に物を頼みましょうか！」

ヨシモト「いつ一緒にですの／＼／＼／＼（これは好機ですわ！ふふふ）」

和樹「はい！（あー顔がニヤけてるなこれはさつき買った服をイエヤスにさせて妄想してるな）」

二人して全く検討違いな事を考えていたそうしているうちに紅茶が運ばれて来た。

ヨシモト「（なんですのもう！せっかく和樹さんと一緒に物を飲めると思いましたが…）和樹さんこれはなんですの？」

和樹「これは南蛮のもので紅茶と言います、今川様が何時も飲んでいる緑茶とはまた違った味ですので気に入って頂けたら嬉しいです」

ヨシモト「そうなんですの！それは楽しみですでは頂きますわ」

ズズ…と飲んでヨシモトの顔が驚きに満ちていた。

ヨシモト「とても美味しいですわ！これはソウリンさんがハマってしまうのも頷けますわ！」

和樹「それは良かった！」

ヨシモトと話しているとふとヨシモトが疑問に思っていたのか話し出した。

ヨシモト「今気付いたんですけど、お金は大丈夫ですの？服も買ってお茶も頂いたので少し気になってしま…」

和樹「ああ！その事でするか大丈夫ですよじゃないと皆さんと一緒に住もうなんて言えませんからね」

ヨシモト「そうですか色々してもらいありがとうございますわ！あつ！それともうひとつ気になっていたことがありますわ！」

和樹「なんですか？今川様？（何だろう？凄い不本意な事になりそうなのがする）」

ヨシモト「それですわ！それ！」

和樹「そつそれ？」

ヨシモト「その言葉使いと名前ですわ！」

いきなりそんな事を言われたので一瞬思考が止まる。

和樹「はっ？」

ヨシモト「どうして私や他の皆さんに敬語や名字で呼ぶんですの？普通ならば住まわしてもらう私達が敬語を使う筈なのです！」

和樹「いや、どうしてと言われてもだつて皆さん名のある武将でその上將軍や各国の大名までいるんだからそりゃ敬語になりますよ」

ヨシモト「私は気にしませんので」

和樹「いや俺が気に…ヨシモト」「い・い・で・す・わ・ね」

和樹「はい…」

余りの勢いに押され思わず頷いてしまった。

ヨシモト「では行きましょう和樹さん」

和樹「分かりま…分かった」

店を出て暫く歩いていると次に買う店が見えてくる。

ヨシモト「次は何を買うんですの？」

実は次に買う店はいかんせん男には入りにくい店なのだ、それに横で聞いてくるヨシモトに言いたくない…理由は恥ずかしいから。

ふとヨシモトは周りを見渡すと1つの店に目がつくそして俺のほうに身を寄せる

ヨシモト「ふふっ！そうゆうことですの）和樹さん…女性の下着を見るだけで赤くなるなんて可愛いですわよ」

和樹「うつつうるさい！別に赤くなつてない！」

ヨシモト「オホホホ！嘘は行けませんわ」

バレてしまった…実は俺は彼女居ない歴11年なので余り女性に耐性がない普通に喋るのは大丈夫なのだがこういった場所では本当に駄目になってしまうのだ。

ヨシモト「和樹さんここでも服と同じ位に買えば宜しいんですの？」

和樹「あっはい！その枚数でお願いします／＼／＼」

すると横でヨシモトが呪文のように言葉をブツブツ言っていた、何を言っているのかと気になった俺は耳をすます………とそれは！

ヨシモト「あの野蛮人と私とヨシテルさんはFカップ、マサムネさんにドウセツさんにミツヒデさんはEカップ、モトナリさんとヒデアキさんはDカップ、イエヤスさんとリキユウさんとモトチカさんはCカップ、ソウリンさんがBカップそしてヒデヨシさんとトシイエさんはAカップですね……ふふ」

和樹（ひいー怖！ヤバイ何時皆のカップ数を調べたんだこのヨシモトは）

俺が密かにヨシモトに恐怖を感じている間に、ヨシモトは会計を済ませて戻ってきていた。

ヨシモト「はい！終わりましたわ」

和樹「あっ戻ったんだじゃあ帰ろうか！皆に服を来てもらって、買い物にいきや行けないしね」

ヨシモト「分かりましたわ」

こうして何とか1回目の買い物が無事終了した、そして家に着くと皆が出迎えてくれた。

和樹／ヨシモト「ただいま／戻りましたわ」

全員「お帰りなさい」

和樹「えーでは服を買ってきたので各自着て下さいね分かなければ、今川様に聞いてください俺は部屋の外にいます」

ヨシモト「こちらに下着と服がありますのでそれぞれお取りになってくださいな！それとイエヤスさんは私が手取り足取り腰取り教えますわ」

イエヤス「いえ…大丈夫です…自分で…着れますから」

ヨシモト「いえいえ！そんな遠慮なさらずに」

ノブナガ「おい！お嬢なんでワシの胸の周囲を知っているんじゃない！」

ヨシテル「確かに…びつたりです」

マサムネ「何だかここまであつていと不気味だな」

ワーキヤーワーキヤー…とドアの向こうでは様々な声が聞こえる、果たしてちゃんと着れたのだろうかするとドアの向こうから声がした。

そしてドアを開けるとそこには何時もの戦装束ではなく現代の服を来た乙女達がいた。

ヨシモト「どうですか？和樹さん似合ってますか？」

和樹「ああ！とても似合ってるよヨシモト」

しかし本当に似合っているやはり美人や美少女が何を着ても似合うもんだなーと

ヨシモトは緑のワンピースに白のカーディガンをきて清楚なお嬢様って感じだ

ソウリンはゴスロリ系の白のワンピースだ

マサムネはボーイッシュユでパーカーと下にジーパンを履いている

ノブナガはバギーパンツにジャケットとカッコいい系だ

ヨシテルは白のワンピースに花柄のスカートだ

ミツヒデは黒いパーカーとグレーのブルゾン型カーディガンにモコモコベレー帽に黒スカートだ

ドウセツは黒のスウェットにボーイフレンドデニム足元はショートブーツで決めている

イエヤスはピンクのミニニットトップスにフロントボタンのデニムスカートでコンパクトにしている

リキュウは長めの白ニットにチェック柄のミモレ丈のスカートを合わせたゆるふわコーデ足元は白靴下に茶系のモカシンが似合う

ヒデヨシ&トシイエは双子コーデだ。パステルカラーのパーカーウオッシュデニムスカートでカジュアルにちなみに二人の色はヒデヨシが主に黄色で統一されていてトシイエは茶と白がバランスよく映えている

モトナリは黒MAー1ジャケットに黒スカート？黒タイツを合わせたモノトーンファッションだ

ヒデアキはネイビーのニット黒のチエックのスカートだ

モトチカは白のTシャツに迷彩のアウトターに黒パンツでバックルは派手な鬼の形を彩った物だ。

これで全員が着替え終えたので俺はまた買い物に行くために次のメンバーを呼ぶ。

## 第5話

和樹「では、皆さん服を着たので順番に行きますまずは織田様、豊臣様、前田様の三人で次に足利様、明智様、大友様、立花様、の四人ですその次に伊達様、毛利様、小早川様、の三人で最後に徳川様、長曾我部様、の順で行きますので宜しく願います。後ヨシモトには悪いんだけど、皆さんの買い物が終わるまで待つといて欲しいなその棚にある本や道場を好きに使っても構わないから。」

ヨシモト「はい！分かりましたわ！」

と先程の買い物で敬語無しで名前を呼ぶことをヨシモトに言われたばかりで俺はごく自然に名前を呼んだしかし…それがいけなかった。

ノブナガ「おい！和樹何故今お嬢を名前で呼んだのじゃ！しかも敬語も無しで、それならワシも名前で呼べ敬語もいらん！」

とノブナガが言い出したそれをきっかけに他の武将が一気に自分も名前で呼べ敬語もいらんと言い出した。

俺からしたら凄く困るのだ…何故なら先程のヨシモトの件でも自分では納得出来てない部分もある。

いくら戦国武将でも彼女達は歴とした乙女なのだしかも自分より年端もいかない異性ばかりだ。

いきなり馴れ馴れしく名を呼べる訳でも崩した話し方も出来る訳がない。

和樹「ハア…(ヨシモトの時はつい勢いで了承してしまったが出来

れば元に戻したいあの頃みたいな後悔はもう二度としたくない)まず織田様の質問に答えます…俺は基本的に異性とは関わりたくないと思っっています。」

ヨシテル「ならば何故?ヨシモト殿を名で呼び話し方を崩しているのです?」

ミツヒデ「そうだ…それに貴殿は我々を住まわすと言っていた異性と関わりたくないと言うならば我々を追い出すはずだ」

和樹「明智様の言う通りです、でもそれをしなかったのは間接的に皆さんを知っていたからなんだと思います」

ソウリン「間接的になってどうゆう事ですか?」

和樹「ちよつと前にゲームと言う物を見せましたね他にもパチンコと言う遊戯や色々な物で皆さんの事を知っていました。」

ドウセツ「だから私達にここに居ていいと言ったのですね」

和樹「結局は自分の自己満足なんです…呆れてしまおうでしょう?」

ヨシモト「そんなことありませんわ!!私は和樹さんに名で呼ばれ話してくれたことがとても嬉しかったんですよ」

和樹「嬉しかった?どうして!」

ヨシモト「知つての通り私は今川家の長女として駿河の国を民を護るため日々戦に明け暮れていましたわでも誰も私をヨシモトとしては見てくれなかったのです唯一私を見てくれたのはイエヤスさんや他の皆さんですけど…」

イエヤス「お姉様…」

ヨシモト「だから男性の中で私と対等に話してくれたり優しくしてくれたりしたことが私は一番嬉しく思います」

俺はなんて馬鹿だったんだろうか…ヨシモトが皆さんが俺と仲良くしてくれようとしていたのに俺は自分で壁を作っていたんだ異性がどうこうとかじゃないんだ。

和樹「ヨシモト…ありがとう！それに皆!!こんな俺で良ければ仲良くして欲しい」

ノブナガ「何を言っているんじゃない？元からワシらはそのつもりなのだからのう」

和樹「そつか！それじゃノブナガ、ヒデヨシ、トシイエ、買い物に行こうか！」

三人「ああ／分かった」

そしてまたシヨツピングモールに着いた。

和樹「それじゃあこれから皆の布団を買うよ！」

ノブナガ「布団か…ワシに合う布団があればよいのう」

ヒデヨシ「あは…はあ…お館様…」

トシイエ「うわ！人いすぎだろ！」

和樹「では、三人で各自気に入った布団があれば取ってきて下さい  
俺は他の皆の分を選んでくるので」

三人「ああ／分かったよ」とそれぞれ別れた。

・  
・  
・

30分後二人とも布団を持って戻って来た。

ヒデヨシ「かつちゃん持ってきたよ！」

トシイエ「オイラはこれが良いぜ！」

ヒデヨシ「あれ？お館様は？」

トシイエ「そーいやオイラも見えてないや？」

と三人で話しているとノブナガが戻って来た。

ノブナガ「待たせたのうワシはこれにするのじゃ！」

と言って持ってきた布団はかなり派手な赤色がベースで金の刺繍  
が入った布団を持って来たのだ：家臣の二人は何とも言えない表情  
をしていた。

ヒデヨシ／トシイエ「お館様……」

和樹「三人ともそれで良いのか？」

三人「おう！」

そして家に着くように配達にしてもらった。

ノブナガは先ほど言った通りかなり派手な布団なのだが、対して家臣の二人は自分が好きな色の布団にしていた例えばヒデヨシは黄色が好きなのか黄色の布団を選んでいたしトシイエも茶色と白のストライプの布団を選んでいたちなみに俺が選んだ皆の布団は各自の色を思い浮かべながら選んだ。

和樹「さてとこれで買い物は終了だ！」

ノブナガ「なんじゃもう帰るのか？」

ヒデヨシ「そうだよ！もつと見て回ろうよ！」

ノブナガ「サルお主えらい元気だの何かあるのか？」

と言われて慌てて言葉を言う。

ヒデヨシ「えっ？そつそんなことありませんよ…アハハ」

和樹（ふーんなるほどね）俺はヒデヨシが焦っている理由が分かったそれは…ヒデヨシの後ろにある食べ物屋が先程から鼻先をくすぐる良い匂いが漂っているのだ。

するとトシイエも気付いたのか笑っている多分あの様子じゃノブナガも気付いているだろうそれを顔に出さず意地の悪い笑みを向けながらヒデヨシと話している。しかしこれではヒデヨシが可哀想だ助け船を出してやるか…

和樹「そこまでだノブナガあんまりヒデヨシをいじめてやるな」

ヒデヨシ「へっ？」

ノブナガ「くくつやはり和樹も分かっていたか！」

和樹「ああ因みにトシイエも気付いていたぞ」

ヒデヨシ「そっそうなんですか／＼／＼／＼／＼」

和樹「ヒデヨシ悪いけどもう少し我慢してくれるか？まだ買い物しなきゃいけないんだもし我慢出来たら飛びきり旨い夕食を食べてやるよ！」

ヒデヨシ「本当？やったねじゃあしつかり待つてるから早く帰りましょう」

ノブナガ「本当に現金な奴じゃ」

トシイエ「ヒデヨシは本当に食いしん坊だなー」

と先に行っているヒデヨシを三人で話しながらゆっくり後を追う。

次はヨシテル達だ、車に乗り込んで貰いまたショッピングモールに行くその途中にヨシテルが話してくる。

ヨシテル「すみません、私達全員の我が儘を聞いてもらってありがとうございます」

和樹「はは！構わないよ」

ソウリン「和樹さん今から向かうしよぴんぐもーるに南蛮の物がありますか？」

ドウセツ「ソウリン様しよびんぐもーるではなくショッピングモールで御座いますそれに南蛮の店には行きませんのでそこは悪しからず」

ソウリン「うう／＼／良いじゃ無いですか少しだけね、ね？」

ドウセツ「駄目で御座います、それに買うのは私ではなく和樹様になるのですから無駄な出費は避けねばなりません」

ソウリン「あつ…：そうですね私ったらつい調子の良いこと言ってますみませんドウセツもごめんね」

和樹「俺は大丈夫だよ！ソウリンが南蛮の物を好きなのは分かっているから、ドウセツも余り手厳しくしないでやってくれないか？」

ドウセツ「しかし…」

ヨシテル「よいではありませんか見るだけでもね」

ドウセツ「ヨシテル様…：分かりましたソウリン様見るだけですよ？」

ソウリン「はい！ありがとうドウセツ？ヨシテル様」

普通はソウリンが主君でドウセツが付き人の立場なのだかこうして見るとドウセツが母親でソウリンが娘みたいだ…：おつとこれは思うだけに留めておこう言えばソウリンから反感を買ってしまうな。

気付けばショッピングモールに着いていたさつそく入れれば四人は人の多さに圧倒されている俺はもうこの表情を三回も見ている…

ハアまだ後二回この表情見ることになるだろう嫌では無いのだがワ  
ンパターンになってきているような感じがする。

ミツヒデ「それで沢井よ我々は何を買うのだ？」

和樹「ああ！それは皆の茶碗やコップに箸を買おうと思うだから四  
人には自分の色の物を持ってきて欲しい」

ドウセツ「成る程それで識別するためですね」

和樹「その通り！俺は他の皆の分を選んでるから決まったら持って  
きてくれ」

・  
・  
・

10分後

和樹「各自持ってきたね！それじゃ買って帰ろうか」

四人「はい！」

そうして三回目の買い物が終わった。

## 6話

和樹「それじゃあマサムネ、モトナリ、ヒデアキ行こうか！」

三人「分かった（わ、りましたあー）」

そしてまた車に乗り込み、ショッピングモールを目指す。

ヒデアキ「ひゃーはっ速いですうモツモトナリ様々」

車に乗ってから5分も発たぬ内に既に涙目でモトナリにすがり付くヒデアキ。

モトナリ「全く…しょうがない子ね」

マサムネ「まあヒデアキ殿が怖がるのも無理は無いこのような物に乗るのは初めてなのだからな」

和樹「二人は全然怖くないのか？」

モトナリ「ええ…私はこのぐらいの乗り物なら自分で行く方が速いしね」

マサムネ「私も大丈夫だそれにこれを鍛練の一環だと思えばどうと  
言う事は無い」

和樹「凄いな…二人共…」

何だろ言うてることは分かるんだけど、今一つピンと来ない…と  
ここでショッピングモールに到着。

マサムネ「それで和樹私達は何を買うのだ？」

和樹「えっと皆の寝間着を買おうと思っとな」

ヒデアキ「この時代の寝間着ってどんなのだろ〜？」

和樹「そうだなあ上と下が別れてて…と言うか皆は浴衣の方がいいのか？」

マサムネ「いや…そう言うわけではないが浴衣の方が慣れてはいるな」

和樹「そうか…うーんどうしようか？モトナリとヒデアキはどっちが良い？」

ヒデアキ「わっわたしはーパツパジャマでしたっけ？それを着てみたいですよー」

モトナリ「私はどちらでも構わないわ…ただ個人的には浴衣の方が良いわね」

和樹「よし！それなら浴衣10着とパジャマ10着ずつ買おうか」

三人「!？」

いきなり俺がそんなこと言うものだから、三人ともかなり面白い顔をしている。

和樹「ぷっ！ あっはははは!! 三人とも面白い顔だな！」

二人「なっ／＼／＼／」

ヒデアキ「あうあう／＼／＼」

俺に顔を見られて笑われたのがショックだったのか、顔を赤くして下を向いている。

和樹（まっまずいかなり怒ってる!? 早く謝らないと!）

と思つて声にしようとした時、後ろから女の声が出た。

??? 「あれえーもしかして和樹君?」

その声に俺は頭が真っ白になって、体も固まった様に動かなくなつていた。

??? 「ねえ! 和樹君だよね 私だよ! 美紗だよ!! 久しぶりだねー」

俺は振り向けなかった、そのやり取りを見ていたマサムネ達は違和感を感じたのか声をかけてきた。

マサムネ 「大丈夫か? 和樹?」

ヒデアキ 「早く行きましょー和樹さん、マサムネ様、モトナリ様」

モトナリ「そうね…早く買ってゆっくりしたいわね…それとそこの

貴女はどちら様なの？」とモトナリは聞いた。

美紗「ハア？貴女達こそ何なの和樹君に寄って集って…止めてくれるかな？」

かなり捲し立てるそいつは元は彼女だった…少なくとも昔の俺はそう思っていた。

和樹（何で今…美紗がいるのかは分からないけど今はこの状況をどうにかしないと！）

モトナリ「ハア…訳が分からないいきなりそんなこと言われても、ただ私達は和樹のお世話になっているだけよ…」

と捲し立てる美紗と呆れる様に頭に手をついてため息を洩らすモトナリ。

そんな様子のモトナリに腹を立てたのか、美紗は右手を大きく振りかぶった。

美紗「貴女な n 「ガシツ！」 なっ !!」

モトナリ「悪いけど…貴女に叩かれる筋合いは無いわ」

モトナリは美紗の叩こうとした右手をあつさり掴んでしまった。

和樹（普通に考えれば、女性とは言え彼女らは歴とした戦国武将なのだ…バカ正直に叩かれる訳がないか）

和樹「悪いけど、モトナリもそこまでにしてくれないか？」

モトナリ「ふう…わかったわ」

美紗「くっ？痛いじゃない？手が赤くなっただんだから？」

和樹「美紗…今日はもう帰ってくれないか？」

美紗「何…言ってるの…和樹君」

和樹「別れる時に…「前を向いて行こう」って言ったじゃないか二人でだから…」

美紗「そんなの知らない！もう！和樹君なんか知らない？」

と言つて彼女は俺達に背を向け走って行ってしまった。その時の俺は知らなかった、美紗が背を向ける瞬間薄く笑っているのをそして俺達にこれから過酷な困難が待ち受けてるとも知らずに。

和樹（やっぱり俺はまだあの時の事を引きずっているのか…）

と考えていると「ビシイ!!」っと頭に小さな痛みを感じた、ふと視線を上げるとマサムネが多分チョップをしたのだろう俺の頭に手を置いている。

和樹「な、何を!?!」

マサムネ「先ほどの者と何が合ったかは分からぬが、私達は和樹が理由も無しに傷つけるとは思っていない」

モトナリ「そうね…貴方は無償で住まわしてくれてるもの」

ヒデアキ「はい! 和樹さんは良い人ですうー」

和樹「っ!?!」

俺は驚いた、まだマサムネ達は来て間もないのに俺の事を信じてくれているそれがとても嬉しかった。

和樹「ありがとう! そう言ってくれてとても嬉しいよ」

その時の三人は嬉しそうに笑っていた。

和樹「さて! 買い物続きと行こうか?」

三人「おう! / ええ… / はい!」

……1時間後

和樹「何とか買えたな」

マサムネ「そうだな…二人は寝てしまったな」

車で帰る途中モトナリとヒデアキはぐっすり寝ていた…しばらくして自宅についた。

四人「ただいま」

皆「おかえりなさい！」

マサムネ「和樹よ、寝間着は部屋に置いて置けば大丈夫か？」

和樹「ああ！頼むな！」

するとヒデオシが泣きそうな顔で近づいてきた。

和樹「うお?!どっどっどした？」

ヒデオシ「どうしたじゃあないよー!!もうお腹ペコペコだよー  
(泣)」

すでにヒデヨシは限界のようで他の皆も少なからずお腹が空いているようだ。

和樹「悪い？ヒデヨシ？これから夕食の材料買ってくるから何か食べたい物はあるか？皆も食べたい物があれば言ってくれ」

ヒデヨシ「えー!!何でも良いの？」

和樹「ああ…まあある程度は作れるぞ」

ヒデヨシ「やったー！何しようかな？トツシーはどうする？親方様も一緒に何食べるか考えましょ？」

トシイエ「オイラは食べれば何でも良いかな」

ノブナガ「ワシは、南蛮の料理を食うてみたいのう」

和樹「成る程！ならカレーで良いかな？」

皆「カレー？」

和樹（あーそうか…カレーとか戦国時代には無いわな）

ヨシテル「かれーとはどお言う料理なのですか？」

皆凄く気になっているようで代表でヨシテルが聞いてきた。

和樹「そうだな…スパイス、昔で言うところの香辛料を使った料理だな」

ミツヒデ「その南蛮料理は辛いと言う事か。」

ヒデヨシ／トシイエ／イエヤス／ ヒデアキ／ソウリン「えっ!!  
かつ辛いのだ!!」

ミツヒデの言葉を聞いていかにも辛いのが駄目ですと言う顔をしている「戦国乙女(笑)」そんな目に涙を溜めている五人に、俺から救いの言葉を言う。

和樹「クスツ…大丈夫!カレーは余り辛くない甘口にするから」すると五人は一斉に表情を明るくさせた。

和樹「よし!今から買いに行くからイエヤスとモトチカ一緒に行くか」

イエヤス／モトチカ「：分かりました／わかったわ？」

そうして5回目となるショッピングモールの買い物、もしかしたら俺が生きてきた中で一番面白い物をしたと思う。

二人「わあー?」とやはり初めて来る場所で興奮しているようだ、旗から見るとやっぱり可愛い普通の女の子にしか見えない。

和樹「さて：と材料はこんなものかな！」

周りを見ると二人の姿がなく、急いで探しているとお菓子コーナーにイエヤスの姿があった。

和樹「イエヤス！」

イエヤス「あっ：和樹さん：」

和樹「はあ：勝手に居なくならないでくれよ？心配するから」

イエヤス「ごめんなさい：」

和樹「いや!!大丈夫!次から気を付けてくれたら良いから、何か欲

しいものでもあったのか？」

するとイエヤスは金平糖が入った袋を前に出した。

和樹「これが欲しいのか？」

イエヤスはコクンと頭を縦にふった。

和樹「了解？後はモトチカだな」

二人でモトチカを探していたら案の定お酒コーナーにいた。

モトチカ「あつ？見てよ凄いいお酒の数知ってるお酒もあれば知らないお酒もある？ねえ！買って良い？」

和樹「お酒なあ…二人は飲んだのか？」

モトチカ「私はよくソウリン達と飲んでたわ？」

イエヤス「私は…お姉様と…ときどき飲んでいました」

和樹「じゃあ他の皆も飲んでたんだな…それなら何本か買っているか！」

モトチカ「やっりー？そうこなくちや」

そうして食材も無事買い終わって、やつとここさ買い物が全て終わった。

和樹（さあこれから腕に頼を掛けて作るとしますか？）（そうして俺は調理にかかった。）

## 7話

和樹「よし出来た！皆く取りに来いよー」

皆「はーい！」

ソウリン「んく？良い香りですね」

ドウセツ「なるほど…これがカレーと言う物ですか」

ミツヒデ「茶色だな…」

ノブナガ「やるのう、中々旨そうではないか」

皆でテーブルを囲みながら座る。

ヒデヨシ「ねえねえ！もう食べても良い？」

和樹「クスツわかったいただきまーす！」

と俺が言うと皆不思議そうな顔をしていた。

ヨシテル「あのー和樹さん今の「いただきまーす」という言葉は何ですか？」

ヨシテルの質問に皆は頷いていた。

和樹「あー皆の時代にはなかったのかな、この言葉は今食卓に並んでる料理や野菜とか動物とか後は作ってくれた人に感謝しながら言う言葉かな」

ヨシテル「なるほど？それは良い言葉ですね、私達も見習いましょうかミツヒデ」

ミツヒデ「そうですね皆に広めましょう」

ソウリン「私達もしましょうドウセツ！」

ドウセツ「そうでございますね、特にソウリン様はお子さまですの  
でしっかりとやってもらいましょう」

ソウリン「あー?!また私の事を子供扱いしましたねドウセツ！本当にもう？」

ドウセツ「申し訳ありませんソウリン様、肩車をしますので機嫌を  
なおしてください」

ソウリン「それを子供扱いしてるんです？」

ヒデアキ「私達もしましょうモトナリ様、マサムネ様、モトチカさ

ん！」

マサムネ「そうだな！ヒデアキ殿、これからは感謝の気持ちを忘れずにしないとな」

モトチカ「私hモトナリ「モトチカは特にしないとね…フフ」かな…つてちよつと言葉被せないでよ」

モトナリ「貴女は普段しないからよくソウリンに注意受けてるでしよ」

モトチカ「うつΣそつそれは〜(汗)」

ソウリン「絶対にやつてもらいますからね？モトチカ！」

モトチカ「うう〜(涙)わかったわよー」

和樹(何でそんなに嫌がるんだろう？よく分からん？)と1人頭の中で？を浮かべるとノブナガが腕をつついてきた。

和樹「どうした、ノブナガ？」

ノブナガ「前を覚えてみる」

と言われたので言葉通りに前を見たら、そこには!!

和樹「うおっ！」

何とヒデヨシが目前まで迫りまだかまだかと目で語っている、しかもその目がかなり血走っている。

ヒデヨシ「ねえかつちゃん食べて良い？」

和樹「ああ！勿論いいよ」

ヒデヨシ「いただきます？？」

皆「いただきます？？」

ヒデヨシ 「んー美味しい？私こんな料理初めて食べた!!」

トシイエ 「確かに旨い？やるな和樹？美味しいですねお館様！」

ノブナガ 「これはいけるのう…辛さがちとたりんがのう…」

ヨシモト 「流石和樹さんですわ〜？イエヤスさんも美味しいですよね？」

イエヤス 「はい…辛いのは…得意では無いのですが…これは甘さもあつて凄く美味しい…です」

リキユウ 「ふふつ茶人も唸らせる料理ですね」

ミツヒデ 「これは…お茶とも合うな？」

ヨシテル 「フフツ和樹さんには感謝しなくてはなりませんね」

ソウリン「やっぱり南蛮の食べ物は美味しいですね？この…かりえ  
くでしたっけ？」

ドウセツ「カレーでございます。ソウリン様」

ヒデアキ「あうく私の料理より…美味しいかも…うう」

マサムネ「フム…確かに美味だな？だが私はヒデアキ殿が作って  
くれた鍋料理も旨かったぞ！」

モトナリ「そうね…このカレーと言う料理も美味しいけれど…ヒデ  
アキの料理も美味しいわ」

ヒデアキ「あうくそっそんなにほめないで下さい…照れちやいま  
すうく／＼／＼」

モトチカ「あらかる照れちやって可愛い？でも和樹の料理凄い美味

しい？絶対鯨肉入れても美味しいわね」

と皆が俺の料理を絶賛してくれた。

和樹「皆…ありがとう！俺も作ったかいがあつたよ。」

この後、俺は今日一番の窮地に立たされる。それは…ノブナガの一言で始まった。

ノブナガ「さて…腹も膨れたことじゃし湯あみでもするかの？サル？イヌ？ワシの背中を流せい？」

ヒデヨシ／トシイエ「はっはい？」

と3人は急ぐように湯あみの準備をしようとした。

ミツヒデ「おっお待ち下さい？ノブナガ殿？」

ノブナガ「なんじゃ？ミツヒデ：ワシの湯あみの邪魔をする気か？」

ミツヒデ「ちつ違います？そう言う事ではなくて／＼／＼／＼」

えらく顔を赤くしてノブナガの道を拒むミツヒデに他の武将達は頭に？を浮かべている。そのやり取りを見た俺は何となく嫌な予感がして顔から冷や汗が出る。

そんな様子の俺を見ていたドウセツはピンときたらしく、ミツヒデの前に出てノブナガに言った。

ノブナガ「なにようじゃ？カラクリ人形？」

ミツヒデ「ドウセツ殿…？」

ドウセツ「ノブナガ様…因みにどの様に湯あみをされるつもりで

「？」

ノブナガ「何を聞くかと思えば……いつも通りにするだk……ヒデヨシ「あっそうか？」なんじゃ？サル？ワシの言葉を遮るではない！」

ヒデヨシ「すつすみません……お館様」

ドウセツ「ヒデヨシ様も気付かれたようですね……そうです湯あみする事はこちらの使い方もあると言う事です……つまり誰かが和樹さんに使い方を教わる必要があります。」

皆「っ／＼／＼／＼／＼」

ノブナガ「くっ／＼」

ドウセツの思いがけない言葉で皆は赤くなり、指摘されたノブナガも若干頬を赤くしている。

欠く言う俺も顔が暑くなっていた。

ミツヒデ「でっでは！私が沢井に使い方を教わろう…／／／／／」

和樹「!?」俺は驚きで声が出ない。和樹（ミツヒデ!?何を考えてるんだ!?）

そんな俺の混乱をよそに、ヨシモトが手を挙げた。

ヨシモト「だったら私が和樹さんに教えて頂きますわ?（和樹さんと二人きりになれるこの好機を逃す手はありませんわ／／／）」

ソウリン「わっ私も…和樹さんにおっ教わりたいですよ／／／／／／／／／（私…カミカミだよー恥ずかしい／／／／／）」

ドウセツ「ソウリン様はまだお子様ですので、私が和樹さんに手解  
きして頂きます。／＼」

気付いた時には4人に囲まれた。

和樹「ちよちよつと!!／／／／／」

流石に4人の美少女に上目遣いで見られると照れてしまう。

ミツヒデ／ヨシモト／ソウリン／ドウセツ「さあ?誰にするん(だ  
／ですの／です／ですか)」

と詰め寄られてしまい、俺はとっさに叫んだ。

和樹「んなに詰め寄られても決められませんし、俺は一緒に入って使  
い方教えるなんて無理です？」

では、皆はどうするんだろう?と言う顔をしている。

4人「じゃあ?どうするの!?!」

和樹「今からスケッチ…じゃない援軍を呼ぶから?ちよつと待って  
くれ?」

皆「援軍?」

和樹「そう！幼なじみの女の子を呼ぶから？その子に使い方を教えて貰う」

ヨシテル「しかし…この時間でその方は来ていただけなのですか？」

和樹「あーまあ来てくれるよ。（信じてくれるか非常に心配だけど）」

和樹「少し電話かけるから、皆居間で待ってほしい。」

皆「はい？」

俺は居間を少し離れ、自分の部屋で幼なじみに電話をかけた。プル

ルルルツプルルルルツプルルルルツプルルルツプルル…ガチャ

??? 「ほーい?もっしー?」

和樹 「もしもし?!相変わらずテンション高いな(笑)」

??? 「そりやそうだよー?久しぶりの和樹からのラブコールですから  
〜?出ないわけにはいかないよー(笑)」

和樹 「たくっ言ってる(笑)雛?」

雛 「そうだね?それでどったの?いきなり電話なんて珍しいじゃ  
ん」

和樹「まあ…なそれはそうと雛に頼み事があるんだけど…」

雛「頼み事？」

和樹「あ あ …… 実 は  
……… っ て 事 が あ っ  
て な。」

雛「………じで？」

和樹「雛？」

雛「マジで!？」

和樹「くくくっ 耳元で大声出すな?！」

雛「あはっごめんごめん(笑) って事はマサムネやヒデアキに会えるの!？」

和樹「ああ…二人ともいるからなまあ他の武将も皆居るよ雛「やったー?」 っておい?聞けよ?！」

和樹「ハア…んで来れるか今から?！」

雛「モチのロンだよー？すぐいくねー」ブチッ。

和樹「あっおい？切るの早いって…ハア〜」

俺は大きなため息をして、これから来る騒がしい幼なじみを待っために部屋を出た。

## 8話

そしてしばらくして……ピンポン!!

和樹「おっ?来たみたいだな…」ガチャ?

雛「ヤッホー!私のらつくえーん「ガシツ」ありや!」

和樹「いきなり飛び込むな!!たくつ皆驚いてるだろ?」

皆が急過ぎる展開についていけず、ポカーンと口を開けている。

雛「いやー?失敬失敬(笑)」

和樹「本当に雛は…汗」皆気が付いたように口を開く。

ヨシテル「和樹さん…そつそちらの方が先ほど仰っていた方ですか?」とヨシテルが代表して聞いてきた。

和樹「ああ…一応俺の幼なじみの皆本h…雛「雛だよー宜しくー?」  
だから 毎度毎度何で俺の言葉に被せるんだよ?」

雛「いやー(笑) やっぱりお約束ってやつ(笑)」

和樹「いらねえよ?」

ヨシテル「ふふっ仲がよろしいのですね。」

雛「誉められつつあった／＼／＼」

和樹「誉められてるのか？それ？」

雛「誉められてるよー？ねえーヨツちゃん？」

ヨシテル「ヨツヨツチャン!!」

ミツヒデ「貴様？馴れ馴れしくヨシテル様をあだ名で呼ぶとは許せん？」

雛「みーちゃん？何でそんなに怒ってるの??？」

ミツヒデ「誰がみーちゃんだー？」

トシイエ「何か…ヒデヨシに似てるな(笑)」

雛「えっ！本当？嬉しい？」

ノブナガ「サルが2匹になりよった」

ヒデヨシ「えっ?!私は1人ですよ…お館様！」

リキユウ「違いますよヒデヨシ殿?…ヒデヨシ「リキユウさん!」…サルは一匹でも二匹でも代わりませんyヒデヨシ「酷いですよー(涙)」ふふっそれはすみません」

雛「いやー良いなあーハーレムですなー(笑)」

俺の腕をつついてくる和樹「別に、ハーレムじゃないだろ！(端から見ればハーレム野郎なのか…俺は!)」俺はちよつぴり自己嫌悪に

落ちていた（笑）

和樹「ところで、雛??頼んだ事忘れてないだろうな」

雛「もちろん忘れてないよーちゃんと覚えてるよ。お風呂の使い方ですよ」

和樹「あっあああ…頼むな」

雛「了解?それじゃあお待たせく皆行こっか!」

ノブナガ「やつとか待ちわびたわ。」

雛「ごめんね。和樹??露天風呂の方借りるねー。」

皆「ええ!!?」

マサムネ「そんな物まであるのか!」

ヒデアキ「ほえーまるで旅館みたいですよー」

ドウセツ「ソウリン様…しっかり頭と身体を洗いましょう」

ソウリン「頭はいいですけど、身体は自分で洗いますから??」



リキユウ「そうですね！ヒデアキ殿…（ジー）」

ヒデアキ「どうしたんですか？」

リキユウ「顔の割に大きいですね…胸（ジトツ）」

ヒデアキ「へっ!?？そっそんなこと「ガシツ」ひゃあ！」

リキユウ「まあまあ、それだけあるのですから別にいらないので  
しょう?（ニコオ）」

ヒデアキ「ひゃー??／／（笑顔なのに顔が笑ってないよう）」

その横では、

ヒデヨシ「あたしが一番に入るんだー??」

トシイエ「させるかー！オイラが先だー！」

マサムネ「コラー??風呂場で走るなー??」

我先にと湯船に突っ走るサルとイヌを注意する保護者（笑）。

洗い場では…

ヨシモト「イエヤスさん本当に可愛いすぎますわー??」

イェヤス「恥ずかしいです…お姉様、首に息が当たってますひゃ／＼」

ドウセツ「さあ！ソウリン様洗いますよ！」

ソウリン「ちよ！ちよつと待つて、自分で洗うkひやわ??アハハハハ！くすぐつてアハハハハ！やつやめてく!!？」

ちよつぴり百合?になっていたり、そして湯船では…

モトナリ「はあー…気持ち良いわね」

ヨシテル「確かに」

ミツヒデ「これは癒される…」

ノブナガ「ここで酒の1つでもあれば言う事無しじゃがのう」

モトチカ「ほんとね」

モトナリ「でも、貴女達の場合1本では終わらないでしょう。」

ノブナガ「ワハハ??分かってるのう毛利…」

モトチカ「さっすが！モトナリくよく分かってる」

モトナリ／ミツヒデ「褒めてないわ／褒めてないだろ」

ヨシテル「まあ気持ちは分かります。」

ミツヒデ「ヨシテル様…（あまりお酒は強く無いのだがな）」

モトチカ「しっかし、この時代のお酒って本当に種類が多いのねー」

ヨシテル「そうなのですか？」

モトチカ「そうなのよ！私達の時代にもある日本酒やワインもある上に種類もいっぱいだし、後は…えーと和樹に教えて貰った…あっ?? 思い出した?? チューハイって言うお酒もあるんだって！」

ノブナガ／ミツヒデ／ヨシテル／モトナリ「**「**チューハイ?**」**」

モトチカ「そう！果実を使った甘いお酒なんだって??」

ミツヒデ「なるほど！そういったお酒もあるのだな…そのチューハイと言うお酒なら、ヨシテル様も飲めるのでは無いですか？」

ヨシテル 「そうですね！今度和樹さんに聞いてみましょう。」

ノブナガ 「ワシは甘いのは好かんのうお主はどうじゃ？毛利」

モトナリ 「そうね…お酒は辛い方が好ましいけど甘いのも興味はあるわ。」

ヨシテル 「そう言えば雛さんは？」

モトチカ 「えっ！雛なら私の横に…ってえー！！？」

何と！モトチカの横で雛がのぼせて倒れていた！！？

皆 「！！？！！？！！？」

ヨシテル 「大丈夫ですか！？雛さん??」

雛 「ふにや〜〜！！？」

ミツヒデ 「ヨシテル様直ぐに和樹殿を呼んだ方が宜しいかと」

ヨシテル 「そうですね！ソウリン??」

ソウリン「はい??ドウセツお願いします。」

ドウセツ「お任せ下さい」

そしてドウセツは身体にタオルを巻き和樹を呼びに行った。

和樹「えらく長いな…何か声が聞こえて気がしたけど、大丈夫か？  
あいつr「ドン！和樹さん！」ブハッ！なっ何っーカツコで出て来る  
んだよ??」

ドウセツ「こっこれは／＼／＼見ないで下さい！／＼／＼／＼／＼そんな  
ことより、雛さんがのぼせて倒れました??」

和樹「なっ!?？」

ドウセツ「ですから来てください！早く!!？」

和樹「分かった??」

急いで風呂場に向かい、そして無事に雛を救出しベッドに寝かせた。  
(もちろん雛の身体を拭いたり、服を着せたのは皆に任せた。)

リビングにもどると、皆心配な顔で聞いてきた。

皆「どうだった!?？」

和樹「ああ！大丈夫だよ！2〜30分すればじきに目を覚ますよ。」

ヨシテル「はあく良かったです。流石に申し訳ないですね私達が長風呂をしてしまいましたから……」

皆も悪い事をした……と口々に言っていた。

和樹「雛はそんな小さい事を気にする奴じゃないよ、だから起きてきたら一言声をかけてやってくれよ。」

皆「はい／ええ／うん／おう」

……………30分後……………

雛「う〜おはよu」雛さん！」「うおお!?？どっとうしたの?」「

ヨシテル「さつきはすみませんでした。」

皆「すみません／ごめんなさい」

雛「へっ!??大丈夫だよ!気にしないで昨日あまり寝れてなくてさ、少しボーっとしちやった!私のミスだね〜イヤ〜失敗!失敗!」

和樹「またネットサーフィンしてたのか?」

雛「あはは!??バレちった!??やめどきが見つかんなくてね〜」

和樹「ホドホドにしとけよ!」

雛「うん!そうするよ!」

ヨシテル「また来てくれますか?」

雛「モチのローン??だよヨツちゃん!」

ミツヒデ「帰ったら直ぐに寝るんだぞ。」

雛「了解!何か:みーちゃんお母さんみたい(笑)」

ミツヒデ「誰がお母さんだー??まったく…ふふっ」

雛「あは!」

和樹「んじや気を付けて帰れよ」

雛「うん!ありがとう!また明日ね!」

和樹「おっおお…?」

ソウリン「明日何かあるのですか?」

和樹「んー?何だろう?まあいつか!取りあえず寝ようぜ!」

皆「はい!」

明日、朝からドタバタする羽目になる事を知らないまま俺は夢の世界に旅立った。

## 9話

くAM6:00くジリリリリリ??バン!

和樹「んーもう朝か…ふあく眠いな…取り敢えず起きるか。」

そうして俺はベッドから起き上がり、朝食準備の為にリビングに向かった。

和樹「やっぱり朝は玉子焼きだよなあー」

朝食を作っていると、皆が起きてきた。

皆「おはよう(ございます)」

和樹「おはよう!そろそろ朝ご飯出来るから、顔でも洗ってきたらどうだ?」

皆「は〜い…」

和樹「ミツヒデ!」

ミツヒデ「どうした和樹殿?」

和樹「まだ何人が起きて来てないけど、何人寝てる?」

ミツヒデ「確か…ヒデヨシ殿、トシイエ殿、イエヤス殿、ソウリン殿、ヒデアキ殿、モトナリ殿がまだ起きて来てないな」

和樹「そうか…悪いけど起こしてきてくれないか?流石に男の俺が部屋に入るのは不味いからな。」

ミツヒデ「ああ分かった！」

そしてテーブルに朝食を並べてると、残りの組が眠そうに起きてきた。

6人「おはよ〜くふあ〜」

和樹「おはよう。かなり眠そうだな、大丈夫か？（笑）」

ミツヒデ「大丈夫だ！全く？戦国乙女なのだから、朝くらい早く起きろ？」

と小言を言いながら眠そうな6人を洗面所に連れていくミツヒデ。

和樹「何か…世話焼きの母親みたいだな（笑）」

しばらくして……………

和樹「よし？皆揃った事だし朝御飯食べようか？」

皆「頂きまーす!!」

ヒデヨシ「んー？こんな朝御飯食べたことないや!!美味しい」

和樹「そりゃ良かった？」

リキュウ「本当に美味しいですよ。やはり朝は和食ですね。」

マサムネ「うむ？味噌汁もいい味を出している？」

ドウセツ「魚も良く焼けております。」

と口々に誉められると流石に照れるわけで。

和樹「なっ何か恥ずかしいな／＼／。」

マサムネ「いや…誇っても良いと思うぞ。」

和樹「ありがとう??マサムネ。」

マサムネ「あ…ああ／／／」

和樹「(なんか…顔が赤いけど風邪か?)」

と俺がマサムネを心の中で心配していると、横からジー…と視線を感じたので視線を合わせるとドウセツが冷ややかな目で俺を見ていた。

和樹「どっどうかしたか？」

ドウセツ「いえ…何でも御座いません。」

和樹「そう…か、アハハ(汗)(何か…あの視線で見られると凄くあの人と重なるな…今頃どうしてるかな?)」

マサムネ「和樹?おい??和樹??」

和樹「わっ!!?なっ何だ。」

マサムネ「全く…先程から呼んでいたと言うのに、取り敢えずだ。ヒデヨシ殿とトシイエ殿が呼んでいるぞ。」

和樹「え？」

と声のする方を見ると向こうで、既に朝食を食べ終えていた。ヒデヨシとトシイエの2人が「ちよつときてー」と俺の事を呼んでいた。

和樹「んー？どうした？」

ヒデヨシ「えつとね、あたし達が来た時に気になってただけど…この黒くて大きい箱みたいなのかなーってトツシーと言ってたの、ね??」

トシイエ「ああ??しかもこの箱めちやくちや細いんだぜー。」

ずっと気になっていたのか、凄く興奮してテレビの事を聞いてきた。

和樹「あーそれな。」

と何て2人に説明しようかと考えてると、後ろから声が掛かる。

ノブナガ「和樹よワシにも教えい??それは南蛮の物じやろう?」

和樹「まあな」

ヨシモト「確かに、私達の時代では見慣れないですわね。大きな鏡にも見えなくてもいいですが…使い方がまるで分かりませんわー」

リキュウ「ソウリン殿なら、使い方が分かるかもしれませんね。」

ヨシテル「それは良い考えですね、お願いしても良いですか？」

ソウリン「……………??」

ミツヒデ「ソウリン殿？如何された？」

ヨシテルのお願いも、ミツヒデの心配する声もどうやら聞こえて無いらしい。するとソウリンが

ソウリン「素晴らしいですうー…!!?」

キーーーーー…!!?と部屋に物凄く響く音量で叫んだ。

モトチカ「うるさ??」

モトナリ「頭に響くから…本当に止めて。」

ドウセツ「五月蠅いで御座います。ソウリン様」

と3人が口々に文句を言っているが、ソウリンは聞く耳持たずでテレビを凝視してるので3人は呆れてため息をつく。

イエヤス「何だか、ソウリンさん…凄く嬉しそうです。」

モトナリ「そうね…嬉しいでしょうね…ハア」

モトチカ「あーあ、ソウリンのもう一つの迷惑モードに入っちゃたわね。」

ドウセツ「全く…ソウリン様には困ったものです。」

和樹「アハハ(汗)(正直…苦笑いしか出来ない。あっ??そうだ良い事思いついた。)」

俺は近くあるテレビのリモコンを取りそのままテレビに向けて電源を押した。そして突然暗かった所が急に光出し人が現れたのだからそれは驚くだろう。

ソウリン「きゃーーーーー!!?。」

と腰を抜かして涙目になりながら後ろにいたドウセツにしがみついた。

ドウセツ「大丈夫で御座いますか?ソウリン様。」

ソウリン「はっ箱の中に人がくっつきつと魂を抜かれたんですよー」

余りにもソウリンが驚いてしまい、皆も多少なりとも怖がってしまいいミツヒデやヒデアキに至ってはその場にうずくまってる。

和樹「えーと皆?言うタイミングが見つからなくて、言い出せ無かったんだけど…実はテレビn」

皆「えーーーーー!!?。」

と皆は驚いていた。特に怯えていた3人は、3人「「ひどーい??」」と言い俺に詰め寄った。

和樹「悪い??悪い??ちよつとした悪戯心d」3人はかなり苦しい言い訳している時に、丁度テレビでやっていたニュースの音が聞こえて俺の顔が段々と青く染まっていく。

和樹「あーーーーー????」

皆「!!?!!?!!?」

和樹「しまった??今日から大学だった。(雛の奴、昨日この事を言っていたのか。) ってそんな事を言っている場合じゃない。急いで用意しないと??」

と忙しなく自分の部屋に駆け上がって行った。

ヨシテル「あつ??和樹さん…行ってしまいました。」

ノブナガ「なんじゃ?忙しい奴じゃのう。」

ミツヒデ「しかし…大学とはどういった場所なのだろうか?」

ソウリン「そんなの決まっているじゃないですか??大聖キリシタン学院の事ですよ??きつと。」

ドウセツ 「また…南蛮の書物を読んで覚えたのですか。」

ソウリン 「そうですよ??」

ドウセツ 「左様で御座いますか。」

ノブナガ 「ワシも南蛮の物が好きじやが、ソウリン程では無いのう。」

トシイエ 「そっそうですね??お館様。だよなくヒデヨシ??」

ヒデヨシ 「うっうん??もちろんだよ、トツシー??」

トシイエ／ヒデヨシ (でもお館様もソウリンさんに負けてないよ…)

マサムネ 「しかし…大学と言うのは、私達の所で言うところ寺子屋みたいなものか?」

ミツヒデ 「まあその考えで間違いないだろう。」

すると、和樹が上の階から慌ただしく降りてきた。

和樹 「ヤバい??間に合うか?」

と色々身だしなみを確認していると、皆が連れて行けと言う視線が背中中にビシビシと刺さる。

和樹「ハア：連れては行けないからな。」

ノブナガ「なんじゃ：つまらん。」

イエヤス「私も：行ってみたかったですね。」

ヨシモト「そうですわね??私もこちらの教養と言う物を学んでみたいですわ??」

ソウリン「やっぱり、和樹さんが行かれている学舎はキリシタンの事もされているんですか?」

和樹「ん?まあ：一応さわりだけやる感じかな。うちの大学はどちらかと言うと、勉強よりはb：いや身体を動かす方が多い大学かな。」

モトナリ「(何だか今和樹の顔が一瞬曇ったような気がしたのだけど、気のせいかしらね?)ねえ：そろそろ行った方が良くないかしら?」

和樹「本当だ??そろそろ行くわな、昼御飯は用意してあるからその時に食べてくれよ。それじゃ行ってきます。」

皆「行ってらっしやい!!?」

俺は皆に見送られながら家を出た。

## 10話

あれから皆に見送られて家を出た俺は、暫く大学への道へと歩いて  
いた。

和樹「あれから久し振りに登校するな…少し変な感じだ。」

すると少し前の方に雛の後ろ姿が見え、俺は後ろから声を掛けた。

和樹「よっ？雛？」

雛「おっはー！和樹？」

和樹「おはよう！雛は何時もこの時間帯なのか？」

雛「そうだよー！（笑）て言うか和樹は何時もはずっと早く大学に  
行くのにね？」

和樹「誰のせいだ？誰の？」

雛「いたっ！いたたたた！アイアンクローは反則だつて！」

と雛の頭に手を置き力を強める。

雛は仕切りに俺の腕を叩きながら「ギブ？ギブ？」と言っているが俺は気にせず雛の頭を掴んでいると、ふと後ろから叫び声を上げながら突っ込んでくる人影が見えた。

???「この不屈き者め？雛ちゃんから手を離せ？俺が退治してやる!!  
くらえ！必殺？ハイパーリアアットー？」

和樹「ぐえっ！」

雛「きゃあ！」

和樹「痛って?!なんつー事しやがる!!雅晴?」

この男は雛と同じく俺の幼馴染みの1人の(九条雅晴)(くじょうまさはる)だ。しかも雅晴は小さい頃から雛に惚れているが、全くと言っているほど雛はその事に気が付いていない。

雅晴? 「ん?何って朝から雛ちゃんにアイアンクロー決めてやがるバク和樹「誰がバカだこら?」おめえーだよ!」

和樹「ああ?(怒)なn雛「おはよー?まーくん?」雅晴?「おつおはよー!雛ちゃん!／／／／」はあく何か朝から疲れたわ。て言う

か俺には挨拶無しかよ雅？」

雅晴？「んあ？悪りーな、おつす！和？」

和樹「まあ、いいけどな（笑）よっ！雅？」

雛「いいんかい（笑）」

と雛は笑いながら俺と雅晴の手を取り歩いていく。

和樹／雅晴「おっおい??／ひっ雛ちゃん／／／／」

雛「早くしないと遅れるよ??」

と慌てたり顔を赤くしたり急かしたりで、俺たちは忙しくなく大学へ向かった。

私立絢狼大学（しりつけんろうだいがく）この大学は主に武道が専門で有名なのだが、ここ最近では武道だけでは駄目だとかでPCの専門

学科やアニメや小説の専門学科に建築や自動車の専門学科もあり、かなり他の専門的知識を付ける事が出来る上に勿論一般的な教科もあつて更にスポーツにも力を入れているのでかなりデカイ大学になつている。

和樹「やつと着いた〜。」

雛「うん??何とか着いたね(笑)」

雅晴「間に合つて良かったぜ??」

和樹「だな??しかし何か、また新しい棟が増えてないか?」

雅晴「どうせ、俺たちが休みの間に建てたんだろうなくきつと校長が。」

雛「そうだよね…全くおじいちゃんは止めてつて言つても聞かないから…はあ〜」

と3人で話していると、ガヤガヤ…ガヤガヤ…ヒソヒソ…ヒソヒソと周りが騒がしくなる。

モブ女1 「見て見て??あれ沢井先輩だよ??」

モブ女2 「うわー??やっぱり近くで見るとカツコイイ??」

モブ女3 「本当ねー私声かけちやおうかなあ??」

モブ男1 「おい??あれって!?!?」

モブ男2 「嘘だろ!?!?あの人って確かあの時の件でここ暫く来な  
かった筈だよな。」

モブ男3 「ああ…確か名前は…漆紅の龍・沢井和樹先輩だ。」

和樹「……………」

雛「和樹…。」

雅晴「くそっ??おい??てmモプ先生「こら??お前達早く教室に向かわんか??」

と周りで騒いでいた生徒達を注意をして、一先ず騒ぎは収まりを見せた。

モプ先生「お前達も早く教室に向かえ…」

雅晴「ほら和樹行くぞ??」

雛「和樹行こう?」

和樹「…ああ」

2人に連れられて校舎に入って行った。

和樹「悪いな…2人とも俺のせいだ…」

すると2人は驚いた顔をしてから直ぐに呆れ顔になった。

雅晴／雛「「やれやれ全く、これだから和樹は…」」

和樹「全く同じセリフを言うんじゃない、流石にへこむから止めてくれ。」

雅晴「てか何で急に謝るんだよ?」

和樹「そりや…この状況になったのは俺の所為なんだ、謝るのは当然だろう。」

雅晴「お前n雛」和樹のバカー!?」ばつちーん!!?と雛が放ったビンタがかなりの音をたて廊下に響いた。

和樹「なっ何すんだ??」

雛「馬鹿馬鹿??本当に馬鹿なんだから??あの時和樹がなった状況は和樹1人の所為じゃ無いよ??あの時少なくとも、私や、まーくんにも責任があったんだから…だから??私達が気付けば和樹が苦r和樹「それは違う??…違うn雅晴「違わねーよ。」

和樹「雅…」

雅晴「雛ちゃんの言う通りだ…和お前の中で俺達にまだ後ろめたさがあるんじゃないのか?」

和樹「そっそれは…。」

雛「和樹…」

雅晴「それがあるからまだ、心の何処かで俺達に壁を作り他人と関わりを持たないんだろう?」

和樹「……………っ」

雅晴「ふう…だからって俺や雛ちゃんもこれ以上言うつもりもねえよ。」

和樹「えっ!?!?」

雅晴「これ以上言っても和、お前が自覚しない限りは意味無いからな、なっ雛ちゃん??」

雛「うん、だから待ってる和樹が私達に心開いてくれるまでね??」

和樹「ありがとう、2人共。」

雅晴「礼はいらねーよつと…時間結構経っちゃったな取り敢えず授業途中だけど参加するしかねえな、面倒いけど。」

雛「そうだねー??今から行こう??」

と2人の後を追おうとしたらふと、視線を感じ振り返ると誰も居ない。

和樹「気のせいか？まあ良いや、おい?? 2人共待てよ!!？」

と3人の行った方向を後ろの方から見つめる人影があつた。

## 11話

キーン!!…コーン!!…カーン!!…コーン!!?

モブ先生「よし、今日の講義はここまでだ。さっきやった所はレポートで提出するように!以上だ!」

モブ男1「えー!!?マジかよ!?!」

モブ女1「ページ数多いから、やる気起きない。」

モブ女2「ほらほら!!?気を落とさない。この後合コン何だから??」

モブ女1「マジ!?!それは行かなくちゃ??」

モブ女3「当たり前だよ、絶対に彼氏をゲットしに行くよ??」

モブ男2「あー腹へった?」

モブ男3「おい??早くしないと、学食のスペシャル定食無くなっちゃうぞ?」

と周りは講義が終われば直ぐ様学食に行く者も入れれば、合コンの予定の話で盛り上がっている者も居てかなり騒がしい。

和樹「ふう…（今日は、これで終わりか…今から帰ってもこの時間じゃ皆今頃、昼御飯食べてる頃かな。）俺はどうすつかなく。雅晴「おーい！和〜」ん？何だ雅か。」

雅晴「俺様が誘いに来てやったぜ？ありがたく思えよ！」

和樹「へいへい。どうせ飯の誘いだろ？」

雅晴「まあな（笑）所で…雛ちゃんの姿が見えねえが、何処に行っただ？」

和樹「ああ…雛ならさっきの講義の先生に質問しに行ったからもう直ぐに帰ってくるだろ。」

雅晴「そうか…俺様、雛ちゃん居なくて寂しいぜ（涙）」

和樹「時期に帰って来んだr雛「お待ち〜？」雅晴「雛ちゃん？／＼俺様待ってたぜ〜？」雅…うぜえ？」

雅晴「ハハハハ？嫉妬か？嫉妬なのか？和樹よ（笑）俺様の方が雛ちゃんへの愛が大きいからな…フツ」

和樹「おいコラ？そのドヤ顔止めろ？」

雛「私もまーくんへの愛は大きいよー？」

雅晴「ひっ雛ちゃん!!」

と雛のノリでの返しをそのまま信じる馬鹿（雅晴）はさっきの雛の言葉で感銘を受けたのか、身体を震わせ今にも雛に飛び掛かる変態（雅晴）を俺は無言で手元にあった教科書の角で雅の頭をどついた。

雅晴「ぐえっ？」

雛「うわ？だっ大丈夫？まーくん？」

雅晴「かつ和お前、親友の俺様に何と言う事を…俺様じゃ無かったら流血物だぞ!!しかも角は無いだろ？角は？」

和樹「いや、幼馴染みが変態に襲われてたら助けるだろ？普通に。」

雅晴「俺様も幼馴染みだろうが！」

和樹「変態を幼馴染みした覚えはねえよ？」

雛「やっぱり二人共面白いね！（笑）」

雅晴「雛ちゃんに言われるとすっごく嬉しいんだけど、何だk和樹「とりあえず、飯行くか？雛。」雛「うん？今日は何食べようかな？」ねえ！嘘でしょ？俺様今からちよつと良い事言おうとしたのに!!」

和樹／雛「行くぞ？変態。／早く行こう？まーくん？」

雅晴「あつうん？て言うか、何で俺様の扱いこんなに落差があるの？俺様すっごく不思議なんだけど？てか和？マジで変態は止めよう？俺様泣いちやうかr和樹「勝手に泣いてろ。」うわー和が辛辣だよー（涙）雛ちゃん慰めて〜。」

雛「よしよし?。」

和樹「ハア…早くしないと、置いていくぞ。雅?雛?。」

雅晴／雛「あいよ!／ほーい?。」と急いで俺達は学食に向かった。

・ ・ ・ ・ ・

く学食舎く

ガヤガヤ!! ガヤガヤ!!

やっと着いた俺達は目の前の光景に思わず顔が歪む。3人「「うわー(汗)」」何と学食に大行列が起きていて正直並ぶ気が起きないほど、混雑していたのだ。

雅晴 「最悪だなくこりや」

雛 「うーん…並びたくないけどお腹すいたろ。」

和樹 「まあでも、此所でうだうだ言ってもしょうが無いから、並ぶk!!!!!!雛 「どうしたの?」「いや…。」

その時、俺と雅晴は言い様の無い嫌な視線を感じていた。俺は直ぐ様、雅にアイコンタクトで話す。

和樹 《雅?気付いてるよな!》

雅晴 《ああ…この嫌な感じアイツしかいねえ!》

和樹 《雅?俺がアイツを探すから雛の事頼む?》

雅晴《分かった？雛ちゃんの事は俺様に任せろ？》

と同時に俺は視線のある方へと走り出した。後ろから「和樹!!」と雛が叫んでいるが、俺はそのまま部活棟の方へと向かった。

.....

↳部活棟↳

あれから、必死にアイツを探して色んな部室に入るが一向に見つかる気配すらしない上に学食舎で感じた視線の時より更に威圧感のある視線が俺に突き刺さる。

和樹「くそ?何で見つからねえんだ?アイツの視線を嫌つつーほど肌で感じるのに?」

と俺が苛ついていると、聞いたことのある声が俺を呼んでいた。

??? 「久し振りだな?沢井?」

和樹「矢倉先輩!! どうして?」

矢倉? 「おいおい…何いつてるんだよ? 此所はお前が所属してる部  
だろうが!」

和樹 「えっ?!」

矢倉先輩の言葉に俺は冷静になり、ゆつくりと辺りを見渡すとそこ  
には俺が去年の冬まで自分の武を磨いていた場所だ。

矢倉 「懐かしいだろ…」

和樹 「そうですね…って感傷に浸ってる暇は無いんだ!! アイツ  
を探さないと!」

矢倉 「ん? アイツって? 誰か探してんのか?」

和樹 「あっ…いえ! 何でもありませんよ! (矢倉先輩が声を掛けて来  
てから、アイツの視線を感じなくなった!?! どうゆうことなんだ?)」

矢倉 「まあいい、沢井は今日から大学復帰か?」

和樹 「はい…。」

矢倉「そうか…なあ沢井もう一度…和樹「すみませんが俺はもう戻る気は無いですよ。」どうしてだ!？」

和樹「先輩も知ってるでしょう?あの試合を…」

矢倉「勿論、知ってる俺も主将として一緒だったからな…でも俺は?もう一度お前といっ s 和樹「やめてくれ?」!?!さっ 沢井…」

和樹「分かるでしょ?あの試合で俺は化け物扱いされ、大会の主権者側の人間達や観客達にも恐怖感を与えて…他の学年や先生、更にはチームメイトにまで怖がられ拳げ句の果てに主将のあんたにまで見放された。」

矢倉「確かに…俺は、お前の事を見放した…庇えた筈だったんだ、けど俺はそれが怖かった!庇ってしまえば俺まで化け物扱いされてたからな。」

和樹「そう…です…よね。(ヤバい、声が震えるやっぱり俺は今でも化け物扱いか…)すみません、もう2度とこの場所には来ませんから。」

と俺は2人が待つ学食舎に戻ろうとしたら、矢倉先輩が俺の前に立ち塞がり両手を地面について頭を下げた。

矢倉「沢井？本当に申し訳なかった？」

和樹「止めてください？何で今更土下座何かするんですか？」

矢倉「分かってる！こんなことをしても意味が無いこと位、だが今の俺がお前にしてやれる事はこの位しか思い付かなかった…でもこれだけは分かって欲しい俺の事は恨んでも憎んでも構わない！だけど、チームメイトの奴らを恨まないでやって欲しい。」

和樹「どうして…そこまであいつらを庇うんですか？」

矢倉「確かに…お前の事を恐怖対象で見っていたあいつらにも責任はある。けどそれだけあの試合の出来事を受け止める事が出来なかったんだ。」

和樹「結局…あんたは分かって無いんですよ、用は化け物の俺よりチームメイトが大事って事でしょう？」

矢倉「それは?!和樹「違うんですか？」「違わないが…でもこの半年で俺もあいつらも変わったんだ！頼む？もう一度俺達と一緒に大会に出てくれないか？」

和樹「やっぱり俺からしたら変わってないと思います。結局あんたらは自分達の都合に俺を巻き込もうって事でしょ?」

矢倉「だが頼む?俺達にチャンスをくれないか?1回だけでいいんだ?」

和樹「ふう…(やっぱり俺は甘いな。)分かりました。矢倉「本当か!?」ただし条件があります。矢倉「条件?」はい…その条件は今年の冬の武道大会で優勝して下さい。」

矢倉「なっ!?」

和樹「それもそうでしょ?冬の大会で優勝も出来ないようじゃ…春も夏も勝てるわけないでしょ。」

矢倉「分かった。必ず冬の大会で優勝してみせる?」

和樹「これで交渉成立ですね…まあ期待せずに待っていますよ。それじゃ」と俺はその場を後にした。

一方で

雛「和樹、帰って来ないなー？どう見ても遅いよね、まーくん？」

雅晴「まあ、その内に帰って来るって？雛「いつ?!」えーと(汗)そっ  
そうだ？飲み物でも取つて雛「要らない？」アハハ(汗)：(何やつ  
てんだよ和？そろそろ限界だ?)雛「私、やっぱり和樹探しに行くか  
ら？」ちよ!!ちよつと雛ちゃん!!待つて和樹「何やってんだ？お前ら  
？」

雛／雅晴「和樹?!／和？」

雛「もう？遅いよー(怒)和樹が遅いからもうご飯先に食べちゃつ  
たよ！」

雅晴「本当に遅すぎるぜ、和：(時間掛かりすぎだろ、何やってた  
んだ！それでアイツは見つかったのか?)」

和樹「あー悪い？悪い？ちよつと見しいった顔が居たからな話が弾  
んじまってな(笑)：(すまん、途中で視線が無くなってな見つから  
なかった。)」

雅晴「へー！(まあ、そればかりはしょうがねえよ！和が探しに

行ってから、俺様もアイツの視線を感じなくなったからな。」

和樹「ああ：（そうか、アイツがまだ大学の中に居るから来た時は用心しとかねえとな。）」

雅晴「（そうだな!!）」

雛「ねえ?。」

和樹／雅晴「あ?／ん?。」

雛「そんなに2人で見つめあって、出来てるの!？」

2人「出来てるか?俺はホモじゃ無い?。」

雛「嘘?嘘?冗談だから（笑）ほら早く帰ろう?。」

そうして俺達3人は帰って行った。

その後2人と別れる時に雛がまた意味深な事を言つて、あるものを俺に手渡してから別れたので、その事が頭に離れずにいた。

## 回想

・  
・  
・  
・

雅晴「んじゃ俺様はこっちだから、また明日なく？」

和樹「あいつ：明日なつて、俺と雛は授業免除でまた暫く休みなんだけど、分かつてねえな絶対。」

雛「まあ？それがまーくんだから？」

和樹「明日の朝から電話とメールの嵐だろうな。」

雛「アハハ（汗）んじゃ私こっちだから待ったねー？」

和樹「おー！雛「あつ？そうそう？忘れるところだった？はいこれ？」  
何だこれ？手紙？雛「家に帰ってから開けてつてさ？んじやバイビー！」  
おい？雛!! つて行っちゃまった：たくつ誰からのだよ、とりあえず開けるのは言われた通り帰ってからにするか。」

そうして俺は小走りで家に向かった。

??? 「ふふっ！この町を離れて3年になりますが、あの子は元気にしてるかしら？………和樹。」

その佇まいだけで周りの雰囲気ガラリと変える和服美人が和樹達の家に向かっていた。

## 12話

沢井家・玄関……和樹「ただいま！」

皆「お帰り？（なさい）」

帰って来たら皆に出迎えられて俺は、内心かなり喜んでいた。和樹（やっぱり、帰って来た時に出迎えてもらえるのは嬉しいもんだな。）

ソウリン「そういえば、大学はもう終わったのですか？」

和樹「ああ…終わったよ」

ヨシモト「何だか顔色が優れませんわね？大丈夫ですか？」

和樹「勿論！体調は悪くないよ！」

ヨシモト「そうですか？良かったですわ？」

和樹「ありがとう、心配してくれて？所で皆はどうだった？今日は大丈夫だったか？」

ヨシテル「そうですね、特に問題はありませんでしたね。」

ノブナガ「おう？ワシらは修行していたしのう？サルにイヌよ？」

ヒデヨシ／トシイエ「はっはい？親館様？」

ヨシテル「私は、初めてマサムネと手合わせをしましたね。」

マサムネ「そうですね、まさかヨシテル様と手合わせをして頂けるとは…本当に感謝しています。」

ヨシテル「そう言って頂けると私も嬉しいですね。」

モトチカ「私はミツヒデと将棋をやってたわ？」

ミツヒデ「そうだな、久々に指したのだがやっていないとやはり勘が少し鈍るな。」

モトチカ「とか何とか言いながら負けたんだけど？」

ミツヒデ「まあ将棋と言っても勝負は勝負だ負けるつもりは無いな、しかし勝手に使ってしまう悪かったな和樹殿。」

和樹「えっ！ハハッ…別に気にしないよ！俺も長いことやってなかつたからさ（笑）」

ミツヒデ「そう言ってくれると有り難いな。」

モトチカ「和樹も将棋やるのね？今度私とやりましょ？」

和樹「了解だ！」

モトナリ「私達は、テレビ…？だったかしら？それを見ていたわ。」

和樹「へー！何か面白いのでもあったか？」

ヨシモト「そうですね…えーと…あっ！あれが面白かったですわ？さ？…さ？…ソウリン「サスペンションでsドウセツ」違います、サスペンスで御座います。」

ソウリン「あっ？あーそうでしたね／／／／」

ヨシモト「そうですね？サスペンスでしたわ？オホホホ／／／／」

和樹「なるほど、ドラマにハマったわけか？」

モトナリ「ドラマと言うのね、また見たいわ…科〇研の女」

ソウリン「楽しそうに見てましたものね？モトナリは？」

ドウセツ「ソウリン様はものの30分で飽きて仕舞いましたので。」

ソウリン「だっだって?!よく分かんなかったし!」

ドウセツ「やはりそういう所がお子様ですね。」

ソウリン「うっうわーん？モトナリ〜」

ドウセツの余りの辛口攻撃に耐えれず涙目でモトナリに抱き付くソウリン。

モトナリ「よしよし……ふふっ……あのドラマの良いところは……死体の解剖が出来ることね。」

とソウリンの頭上で物凄い事を言ったので、ソウリンは思わず顔を青くし抱き付いたモトナリから直ぐ様俺の後ろに隠れる。

和樹「おいおい…あんまりソウリンいじめてやるなよな。」

モトナリ「ふふ…勿論冗談よ…あんまりにもソウリンが驚くから。」

ドウセツ「私もソウリン様を別に泣かしたい訳では御座いません。  
(それも少しはありますが。)」

ソウリン「モトナリ？／ドウセツ？」

と二人の言葉を聞いて、ソウリンの顔が晴れやかな笑顔になろうとした瞬間！

…モトナリ／ドウセツ「だって泣かせてしまうと面白味が無いもの(ですから)」

何と哀れなソウリン、この二人に目を付けられた時点で可哀想とは思えない…ソウリンが四つん這いで落ち込んでるのが居たたまれなくなつて、思わず他の乙女に話をふつた。

和樹「リキユウ達は何をしていたんだ？」

リキユウ「私達は本を読んできましたね。イヤエス殿、ヒデアキ殿」

イヤエス／ヒデアキ」とつても美味しそうでした！／凄く綺麗でした？」

皆「「??？」」

和樹「えつと…どういう事だ？リキユウ達は本を読んでたんだよね？」

リキユウ「はい、と言っても私達が読んでいた物は活字がある物ではありませんが。」

と言いながらリキユウが本を俺達の前に出した。

和樹「あーなるほどな（笑）」

俺は思わず納得した。

出した本の題名が「世界のスイーツ集」と言う世界のお菓子の写真が載っている物だ。

和樹「これは、二人が興味を持つのも分かるな。」

リキュウ「それは私がお菓子と不釣り合いと言う事ですか…？」

和樹「そんなことないよ？アハハハ（何でだろう？笑顔なのにめちゃくちゃ威圧感がある…ヤバイかも）」

と愛想笑いしながらリキュウに対して思ってる事を心の中で呟いてると、ピンポーン！と家のチャイムがなった。

マサムネ「むっ？誰かが来たようだぞ？」

ヨシテル「雛さんでしょうか？」

和樹「いや…雛とはさつき別れたから違うと思うkピンポーン！はい今出ますよ！」

直ぐにモニターの場所に行き映像を写すとそこには和服美人が写っていた。

和樹「うそ…だろ…。」

と小声で言いながら顔が真っ青の和樹……の横では乙女達がモニターを食い入るように見ていた。

ヒデヨシ「うわー！すっごい美人さんだねー？」

トシイエ「へっ！親館様の方が美人だね？」

ソウリン「それならドウセツも負けてません？」

ヒデアキ「違いますう！一番はモトナリ様ですう〜？」

とチビツ子乙女四人が自分が憧れを抱いている乙女が一番だと言いつつ、い合いをしている。

すると…画面をみていたヨシモトが和樹に声をかける。

ヨシモト「あの？和樹さん？先程からこちらの画面の方が何か話してますわよ？」

和樹「えっ!!」

とヨシモトの言葉に顔を上げて画面を見たら

??? 「は・や・く・あ・け・な・さ・い」

と口で言っていた。

和樹「ひい？」

と更に和樹は幽霊でも見たかのような驚き方で体が震えていた。

ミツヒデ「大丈夫か？和樹殿？」

モトチカ「もうなにやってるのよ！早く開けてあげなきゃ？」

和樹「まつ待ってくれ？」

モトチカが玄関のドアを開けに行こうとしているのを直ぐ様和樹が制止の声を掛けるがモトチカは止まらずドアを開けた。ガチャ……？

??? 「ふう……やっと開きましたかももう遅いですよ和樹。」

とそこには何とも言い難い怒りのオーラを纏った武道の師匠がいた。

和樹「お久しぶりですね…先s…ガハツ？」

とそこで何かの下から打ち上げられたように俺の身体は宙に舞いそして意識を刈り取られた。

く和樹復活まで暫くお待ちくださいく

．．．．．

和樹「うつ!!くくつ?あーここは何処だ?何で俺は寝て…はっ!!  
そ  
ういや先生が来て…先生?」「はい。来てますよ。」「…えっ!!」

ギギギ…と油切れのブリキの人形のような音を立てながら声のする方に顔を向けると、先ほどまでとは打って代わって優しい笑みを浮かべている先生がいた。

先生? 「取り敢えずは起きたようですね。」

和樹「はっはい!」

先生? 「どうかしましたか? 久しぶりで緊張してますか?」

和樹「いえ? そんなことは無いです?」

先生? 「そうですか。ではリビングの方に向かいましょうか。」

和樹「は?」

先生? 「呆けている場合ではありませんよ。先ほどの女の子達を紹介していただかないといけませんから。」

と笑顔で言いながら部屋を出る先生の背中を見ていた俺の顔は何ともマヌケな顔をしていた事だろう。

これから起こることに偏頭痛が起きそうな予感をしながら頭に手を当て溜め息をつく。

和樹「はあーやれやれ、めんどくさ…」

と眩きながら先生の後を追って下に降りた。

くリビングく

・  
・  
・  
・

あれから1時間位がたった頃、何故か俺は先生を前にして正座をしていた。

先生？「はあく嘆かわしいです…私の居ない間に複数の女の子を家に上げているとは。」

和樹「いや？あの…違つて先生？「何か？」いえ…。」

さつきからこんな感じで反論の余地が一切なく、正座を余儀なくさせられている。

和樹（はあ、何でこんなことになったんだか…最初はいい感じだったんだけどなー）

回想く1時間前のリビングの様子く

・  
・  
・  
・

先生？「さてと、では始めに皆さん始めまして：私は一ノ宮桜華（いちのみやおうか）と言います。宜しくお願いいたします。」

皆「「よろしく（のう）（ね〜）お願いします（わ）」」

ヨシテル「あの：一ノ宮s桜華「桜華で構いませんよ。」あつはい！  
えーとその桜華さんは私達のことをご存じなのですか？」

桜華「はい。最初に玄関でお会いした時は、自身の目を疑いましたが、現に目の前で話しているのを見れば疑う余地はないでしょう？まあ最初はこのお馬鹿弟子（和樹）がどうとう自分の欲望に負けて他所の女の子にコスプレをさせてると思つて和樹「するか？そんなこと桜華「黙りなさい。」ピシツ？〜っ」

皆（（うあく痛そうだ（じゃのう）（ですわね）（ですうー）））

和樹「いついきなり何するんですか？」

桜華「はあ…全く五月蠅いですねえ発情した雄犬ですか？全く待ても満足に出来ないなんて、やれやれですね。」

和樹「だ・れ・が？犬ですか？誰が？」

桜華「えっ？何を言っているんですか？」

和樹「えっ?! まつまさか?! 先生? ようやく俺のことを…桜華「はい! 家畜として扱ってます!」ってそれじゃさっきの犬よりランク下がってますよ?!」

桜華「だって和樹に犬扱いをするのはやはり勿体無いかと。」

和樹「いやいや?そこは普通に人間扱いをしてくださいよ?てゆーか、さっきまで人のこと発情した犬とか言ってますでした?」

桜華「めんどくさいですね…仕方ありませんねこの時間だけは和樹を一時的に人間扱いにしましょう!」

和樹「今だけですk桜華「黙りなさい。」はい…。」

桜華「さてと!改めて皆さんをよく見ると、やはり、現代の服装も似合ってますね。」

皆「( )ありがとうございます( )ございます( )わ( )ますう( )」

桜華「ですが、もう少し此処を変えてみるのも宜しいですね。」

そう言うやいなや目の前に居るヒデヨシの服に手をかけたりや、ヒデヨシのトレードマークのお団子ヘアーをほどいてポニーテールにしたりで、まるで着せ替え人形の用に楽しんでいる。

ヒデヨシ「あつあのく？／＼／＼／＼」

桜華「ん？…あら！ごめんなさいね！どうしても素材が良いとつい…ね。」

和樹「つい…ね。じゃ無いですよ？いきなりでヒデヨシもびっくりしてますから！」

ヒデヨシ「あつ私は大丈夫だよ／＼／＼かっちゃん？」

和樹「そっか？ヒデヨシが良いなら良いけど、でも先生も大概にしてくださいよ女の子好きも？」

皆（（（えっ?!えー!!）））

桜華「別に良いじゃない？みんな可愛いし！もー!!これからの生活が楽しみだわ？」

和樹「はっ!!」

桜華「何かしら? その、何で住むのみたいな間抜けな顔は?」

和樹「いえ…ベツニソンナコトハナイデスヨ。」

桜華「何故片言なのかは、後で問い詰めるとして私もこれから此処で暫くお世話になるわ、これから宜しくね。」

と言いながら桜華は空き部屋に上がって行こうと背を向けた…その時?

桜華「一体どういうつもりですか? 第六天魔王織田ノブナガさん? からくり人形の立花ドウセツさん?」

3人「!!ノブナガ!! / 親館様!!」

ノブナガ「どうもこうもあるか! どうもさつきからお主の事が気に入らなくてのう。」

ドウセツ「私も同じで御座います。些かノブナガ様と同じなのは釈

然とは致しませんが」

ソウリン「ドウセツ!!」

モトチカ「ちよ?!ちよっと?!何でこんなに険悪になってるのよ?」

ヨシモト「おやめなさい?御二人とも?いきなり過ぎますわ?」

リキユウ「そうですよ。今はお茶を立て心を鎮めましょう。」

マサムネ「いや!それで解決出来る様な状況ではないと思うが?」

イエヤス「でもリキユウさんのお茶は…美味しい…です。」

ヒデアキ「私も一度で良いのでリキユウさんのお茶を飲んでみたい  
ですう」

イエヤス「では今度、ご一緒しましょう。」

ヒデアキ「嬉しいですう!モトナリ様も一緒に行きましょう!」

モトナリ「何で貴女達はそんなに和めるのかしら?」

ミツヒデ「知らん!それでどう致しますか?ヨシテル様」

ヨシテル「とりあえずまずは二人を止めませう和樹」待ってくれ!」和樹さん?」

和樹「俺が二人を止める?」

そう意気込んで険悪な雰囲気の中3人に声を掛けようとしていると……ガツ?ドン?和樹「うわ!!」ドウセツ「きゃあ!!」……むにゅ!!むにゅ!!

ドウセツ「あっ／＼／＼かつ和樹さん／＼／＼そこは……んう／＼／＼」

和樹「ん? (何だ?この柔らかい感触は?触り心地は良いし……いい香りがする。) うわ!!悪いドウセツ?」

ドウセツ「いえ……私は大丈夫ですので、おきになさらないで下さいませ／＼／＼／＼」

ヨシモト「ちよつと和樹さん何をしていますの!!」

ミツヒデ「なっ／＼／＼はっハレンチな!／＼／＼」

ソウリン「ふーんだ?ふーーんだ?（私だっっていうか大きくなるんだから!）」

さつき転けた拍子にドウセツを押し倒して更に胸まで鷲掴みにしてしまった。

ノブナガ「無事か?和樹よ?」

和樹「ああ!?!悪いノブナガ」

ノブナガ「いやワシは別に構わんが、この後が大変じゃの和樹。」

和樹「え?」

ノブナガにそう言われ顔を上げると、これでもかと思うほどの怒りのオーラが見える鬼神（先生）がいた。

・  
・

・ ・ ・  
回想終了

∴その事があり絶賛正座中で先生のありがたーいお話（説教）を受けている。

・ ・ ・  
∫30分後∫

桜華 「分かりましたね。 和樹」

和樹 「はい。 よく身に染みました」

桜華 「宜しい！では、ノブナガさんにドウセツさん何故、私に言い掛かりを付けてきたのですか？」

ノブナガ 「どお言う意味じゃ！」

ドウセツ 「取り敢えず落ち着いて下さいノブナガ様。」

ノブナガ 「ちっ？」

和樹「でも何で二人は急にそんなことを言い出したんだ？」

ドウセツ「確かに突然申し上げたので皆様が驚愕されるのは致し方ありませんが、この事については一宮桜華様がこの沢井家に入ってからほんのごく僅かの殺気を和樹さんに当てておりました。」

皆「[[[「?」]]]」

和樹「っ!？」

ノブナガ「そうじやカラクリ人形が言うようにワシとカラクリだけしか気付かん極僅かな物じや。」

皆「[[[「……………」]]]」

桜華「そうですね…何故私が和樹に少なからず殺気を当てたかと言うと…?？」

ドン？

和樹「っ!？」

突然の大きな音がすると和樹の後ろの壁が抉れていた。

モトチカ「なっ何よ!! 今の!」

トシイエ「分かんないですよ? いきなり後ろの壁が抉れたんだから?」

ヨシテル「かなりの早業ですね…マサムネは見えましたか?」

マサムネ「いえ…殆んど見えませんでした。」

ミツヒデ「あれは、一体なんなんd和樹「風掌（ふうてい）」「えっ?」

ソウリン「知っているんですか?」

和樹「ああ…知ってるも何もあの技は先生の一番得意な技だ。」

桜華「その通りです。」

和樹「何故、今になってこの技を俺に放つのですか?。」

桜華 「和樹、貴方はあれから少しは鍛練したのですか？」

和樹 「……………してます。」

桜華 「そうですか。3年前に和樹は言いましたよね？今より強くなると、ならば今見せて下さい。成長した貴方の武を。」

和樹 「わかりました。」

## 第13話

…あれから先生に自分の今の武道の成果を見せることになった。

桜華「久しいですね。こうして和樹と試合をするのは。」

和樹「はい。」

桜華「全力を持って今の貴方を私にぶつけてきなさい！」

和樹「行きます?」

と声を上げると同時に地面を蹴り桜華に攻撃を仕掛ける和樹、

しかし桜華は和樹の初撃を簡単に避けながらカウンターに掌底を浴びせるが、

和樹も負けじとカウンターで来た掌底を左腕でガードする。

さらに和樹は回し蹴りを桜華に放つが、桜華は身体を低くしゃがみ込ませ、

回し蹴りを難なく避けその体制のまま和樹の軸足に狙いを澄ませ蹴りを放つが、

和樹は軸足に力を入れて上に飛び上がったまま体制を変え踵落としを桜華に放つも、

桜華は迫る踵落としを自身の腕をクロスさせて受け止めた。

桜華「ふう…大分やるようになりましたね。」

和樹「余裕で受け止めといて、皮肉にしか聞こえませんがね。」

桜華「フフツ…そうですね。では構えなさい和樹。」

和樹「…。」

そう言と桜華の雰囲気は鋭くなり和樹もまた自身の雰囲気を変え、二人共全く同じ構えをとった。

二人はそのまま動かず、辺りは静寂とし全ての時が止まったような感覚に陥る。

和樹「ふう。」

突如としてその静寂を破るかの様に和樹の吐き出す息によって互いの均衡が崩れた瞬間？

…バアアン？と大きな音と衝撃が鳴り響いた。

それを皮切りに何度もお互いに【風掌】を繰り返し続け、辺り一辺を轟音と衝撃が響き合う。

その様子を見ていた乙女達は…驚愕する者・尊敬する者・焦る者…そして和樹の姿を見て熱の籠った視線を送る者と様々な反応をしていた。

その間にも二人の攻防は熾烈（しれつ）を極めた。

ガツ？

ドツ？

ゴツ？

ガキツ？

和樹がこれでもかと連続で奥義を放つも、桜華はその技全てに對して同威力で相殺しつつ自分の得意な間合いを保ち確実に和樹を追い込む。

和樹「くっ?!（ちっ?このままじゃジリ貧だ?）」

桜華「はっ?（このままではジリ貧は必死ですよ。どうしますか?和樹。）」

和樹「（不味い、反撃の隙が無い!）しまった?」

桜華「（後手に回り過ぎましたね。）これで終わりです?」

和樹「っ?!（この身体運びは【孤月】?!…一か八かやるしかない?正直投げ技は苦手だが、決めるしかない?）うおおおおお?」

桜華「なっ?! (まさか?!この技は【浮き雲】?ならば?) はあああ  
あ?」

……ズドン?

和樹「ぐあ?!」

両者最後の投げ技の一騎打ちは、桜華に軍配が上がった。

ヨシモト／ソウリン／ミツヒデ「和樹さん(殿)?」

桜華の投げ技を諸に食らってしまい、倒れた和樹の元に駆け付ける  
三人。

ヒデヨシ「大丈夫かな…かつちゃん。」

トシイエ「大丈夫だって!そんなに柔じゃ無いだろ!」

ノブナガ「…ちっ。」

ヒデヨシ／トシイエ「??」

リキユウ「中々素晴らしい物を見させて頂きました！」

イエヤス「そうですね…。」

リキユウ「どうかされましたか？」

イエヤス「っ!!いえ…何でもありません。」

リキユウ「……………そうですか。」

ヒデアキ「本当に凄かったですう？私興奮しました？」

マサムネ「そうだな！私も心が熱くなったよ？これからも精進しなければな？」

ヒデアキ「はい？私も早くマサムネ様やモトナリ様や和樹さんみたいに強くなりたいです？」

モトナリ「大丈夫よ…貴女は必ず強くなるわ。」

マサムネ「そうだな！」

ヒデアキ「はい？／＼／」

モトチカ「あー？もう？こんなの見せられたら我慢できないわよ？  
ヒデアキ？私と1試合しましょうよ？」

ヒデアキ「ふえっ！！」

モトナリ「駄目よ。」

モトチカ「何でよー？ケチねー？」

モトナリ「貴女みたいな馬鹿力と試合したらヒデアキの手が折れる  
わ。」

ヒデアキ「えっ！！」

モトチカ「折れないわよ？」

マサムネ「まあまあ。」

モトチカ「全く？私の事を何だと思ってるのよ？」

マサムネ「とりあえず落ち着くんだモトチカ殿。」

モトチカ「でも？」

マサムネ「先に和樹の様子を見に行こう。その後でなら私が手合わせをしよう。」

モトチカ「…分かったわ。」

ヨシテル「これが、和樹さんの強さですか。」

ドウセツ「ヨシテル様…私達も和樹さんの元へと行きましょう。」

ヨシテル「そうですね。」

和樹「痛っ!…はあー負けも三人」「大丈夫ですか?」「ん?おお!大丈夫だやガシ?...えっ?ちよっ!?!」

と最初に駆け付けた乙女三人は、和樹の肩を掴んで思いっきり揺すった。

和樹「や・め・ろー?」

ヨシテル「お止めなさい?」

三人「「はっ?!」」

ドウセツ「やり過ぎで御座います。ソウリン様。」

ソウリン「だっだっ?／＼／＼／」

イエヤス「お姉様…。」

リキュウ「ヨシモト様。」

ヨシモト「イエヤスさん?!リキュウさん?!やめて下さい?そんな目で私を見ないで下さい?」

ヨシテル「駄目ですよ?ミツヒデ、そんな風にしては。」

ミツヒデ「ちっ違います?／＼／＼ヨシテル様?」

桜華「フフツ。」

和樹「先生？」

桜華「いえ…只単純に皆さんが和樹を心配してくれていることが嬉しく思つて。…それと和樹貴方はまだまだですね。」

和樹「うっ!？」

グサ?…つと言葉の矢が和樹の背中に刺さつた。

桜華「はあ…あれだけ力強く返事をした割には余り良い所は無かつたですね。」

和樹「ぐっ!？」

桜華「最初は互角の様な感じで期待をしていたのですが…期待外れもいいところですよ。」

和樹「うぐ!？」

桜華「全く！師匠として恥ずかしいです。もう一度最初からやり直しなさい…良いですね？」

和樹「いつ?!いやd桜華「い・い・で・す・ね」……。」

桜華「返事は? (ニコツ)」

和樹「はい?!」

桜華「では、私は先にお風呂に入ってきますね。和樹、道場の修復と夕御飯頼みましたよ?」

和樹「え?!いやいや夕御飯は良いですけど、道場は俺一人でやるんですか?!」

桜華「何を当たり前な事を…。それとも、こんなか弱い乙女達や私に手伝ってもらおう気ですか?」

和樹「いやそんなことは無いですけど、できれば先生には手伝って欲しいなーって(てか、三十路手前で武道日本一の人がか弱い乙女って…。)っ?!あぶな?!」

桜華「余計な事を考えてると、次は当てますよ。(ニコツ)」

和樹「はっはい？(汗)(余計な事は考えないようにしないと殺される?)」

桜華「後は、頼みましたよ？和樹。では皆さんは私と一緒に風呂に行きましよう！」

皆「「えっ?!」」

ソウリン「でも？和樹さんを手伝ってあげない？」

桜華「大丈夫ですよ！これも特訓(雑用)ですから。」

ヨシモト「そっそうなんですの!?!」

と皆が俺の手伝うと桜華に伝えるが、桜華はどこ吹く風のように大丈夫と皆に言い聞かせ風呂場へと向かった。

皆は俺の方に視線を向けていたので俺は気にしないで行ってこいと伝えた。

そして俺は一人残った道場の中で修繕をしながら先程の試合について考えていた。

和樹「ふう。(あの時どうして投げ技を戸惑ったんだ…どうして? 「ソナナコトハジメカラワカリキツテルダロウ?」グツ!!) ハア!…ハア!…ハア。」

試合の事を考えれば考えるほどに理由なんて分かりきっていたんだ。

和樹「あれは…戸惑ったんじゃない、嬉しかったんだ技を相手に打てる高揚感が…俺は何を考えてんだ!!) くそっ?」

今、俺の中にあるこの感情がとてつもなくドス黒く醜いものが渦巻いている。

そして俺はこの感情が自身にどう影響するかも知っている。

和樹「俺は?…どうすればいい?」

その問いかけには誰にも…自身でさえも答えを出せない。

和樹「こうしても仕方無いな…戻るか。」

そうして道場を後にした。

〜リビング〜

リビングの扉を開けた俺は思わず目を疑った。

和樹「は？」

何とそこには仲良さげに酒を酌み交わしている先生と（主にノブナガとモトチカ）乙女達がいた。

桜華「ほらー何突っ立ってるの？早くつまみを作りなさい？」

かなり酔った先生がそうやってきて、それに続いて乙女達も俺の事を呼んでくる。

和樹「フツ！（これじゃ俺が思い詰めてたのが馬鹿らしいな。）はい？今、作りますよ？後先生は飲み過ぎないでくださいよ？」

こうして俺の師匠一ノ宮桜華を入れての楽しい宴は続いた。

## 14話

く沢井家く

午前6:00時頃

ピピピ?ピピピ?ピピツ…カチ?

桜華「和樹。起きなさい。」

和樹「zzzz」

桜華「ふうく仕方無いわね…あのやり方で起こすしか無いようね。  
ニヤツ!」

そう言いながら桜華は自身の服を脱ぎ下着姿で和樹の布団に潜り  
込んだ。

．．．．．  
一方リビングでは、朝食の準備をしている乙女達がいた。

マサムネ「よし!こんなものかな!」

ヒデアキ「美味しそうです?」

ヒデヨシ「流石!伊達つちだね?」

マサムネ「ありがとう。ヒデアキ殿が手伝ってくれたお陰だ。…それとヒデヨシ殿、つまみ食いは感心せんな。」

ヒデヨシ「うっ?!…そっそう言えば、お館様や他の皆は?」

ヒデアキ「本当ですねえ?モトナリ様も起きてきてませんし?」

マサムネ「(あつ、話を強引に変えたな。)ああ…皆n」「おはよう…。」「来たみたいだな。」

ヒデヨシ／ヒデアキ「(うわー…顔がどんよりしてるよ。(ますうす。))」

ミツヒデ「ほら?早く湯網をしてこい?」

モトチカ「くっつ?!分かったから、そんなに大きな声を出さないですよ(涙)頭に響くから(涙)」

ソウリン「ううく気持ち悪いく（涙）」

ドウセツ「自業自得で御座います。」

モトナリ「もうだめ…吐きそう…うっ!!」

ヨシテル「ええ!!ちよちよつと!!ここで吐かないで下さい?取り合えずトイレまで頑張つて?」

ヨシモト「ああ…もう私駄目ですわ。」

イエヤス「お姉様…私も気分が優れないです。」

リキユウ「お二人共かなり飲まれましたからねく二日酔いならぬ、日本酒酔いくみたいな?（笑）」ヨシモト／イエヤス「……………」（いや、そのまま二日酔いですわ…。（…です。）」「」

ノブナガ「ふあく?うむ?いい朝じや?」

ヒデヨシ「あつおはようございませす？お館様？」

ノブナガ「おう？サル？おはようじや。二人ものう。」

マサムネ／ヒデアキ「おはよう（ございませすう）ノブナガ殿（ノブナガさん）」

ノブナガ「所でサルよ、イヌを知らぬか？起きてから見かけんのじやが？」

ヒデヨシ「えーと…確かトツシーならさつき鍛錬しに行くつて言つてました？」

ノブナガ「ふむ…。朝から精が出るのう。」

ヒデヨシ「本当ですな？」

ノブナガ「所でお主は何をしておる？」

ヒデヨシ「へ？」

ノブナガ「イヌは朝から鍛錬しておるといふのに？」

ヒデヨシ「いいいや、あたしは……あれですよ？伊達っち達の手伝いをしてましたし？」

ノブナガ「ほーそれは関心じやな。」

マサムネ「確かに？あれは見事な食べっぷり……もといつまみ食いだったな（笑）」

ヒデアキ「そうですね？」

ヒデヨシ「だっ伊達っち?!ヒデアキちゃんまで?」

ノブナガ「な・る・ほ・ど（怒）」

ヒデヨシ「っ!!（苦笑）」

ノブナガの目の前でつまみ食いの事を二人に暴露され顔を真っ青

になりながら、ひきつった顔を見せるヒデヨシ。

ノブナガ「この…大ばk和樹「ギャー………!?!?」  
なんじゃ!?!」

ヒデアキ「いつ今のとって和樹さんの部屋からですよ。」

マサムネ「まさか!?! 闇者か?」

ヒデヨシ「ええ? 早く助けにいかないと?」

ノブナガ「まで、サルよワシが見てくる。」

ヒデヨシ「お館様!?!」

マサムネ「ノブナガ殿…危険ではないか?」

ヒデアキ「そうですよ?」

ノブナガ「何、そんなに大層な事では無かろう。」



ノブナガ「和樹よ！無事……か？……何をしとるんじやお主らは？」

和樹「ノツノブナガ？たつたすよ桜華「あらあら……朝から不粋ですよノブナガさん、男女間の営みを邪魔するのは。」ってちよつと!!」

ノブナガ「あー。それはすまん事をしたの、ごゆつくりのう……和樹「さて？そんな気遣いいらねー？」わっはっは？冗談じゃ冗談？」

桜華「ふふ、イタズラ成功ね！和樹「くそ／＼。」それより和樹、今日はお出掛けるから早く支度しなさいな。」

和樹「えっ？ちよつと!!」

ノブナガ「ワシも先に下に行つとるからの。」

和樹「ああ……直ぐ行くから？」

（青年着替え中）

・ ・ ・ ・ ・

全員 「「「「いただきます。」「」」」」

和樹 「それはそうと、大丈夫……ではねえな5人共。」

5人 「「「「うっうー。」「」」」」

ミツヒデ／ドウセツ 「自業自得だ（です）。」「

ヨシテル 「あはは（汗）（余り飲まなくて良かった。）」

和樹 「所で先生、さつき出掛けたか行ってましたけど何処に行くんですか？」

桜華 「ああ…ちよつと私用でね、和樹と皆に付いてきてもらおうと思つて？」

和樹 「俺はまあ分かりましたけど、皆もですか？」

桜華 「ええ、ですが二日酔いの5人は今日は留守番ですね！」

5人 「「「「ええー。」「」」」」

和樹「しょうがないよこればかりは…（苦笑）。」

ミツヒデ「全く仕方がない？私が留守番組の面倒をみよう？」

5人「！！「えっ！！」！！」

ミツヒデ「何だ？私では不満か？」

5人「！！「…いえ。」！！」

ドウセツ「それでは私も残りましょう。」

ミツヒデ「別に私一人でも構わないが？」

ドウセツ「いえいえ、流石にソウリン様がこのような状態では気が気では無いので。」

ミツヒデ「そうか…ドウセツ「それに」ん？」

ドウセツ「ソウリン様達には常日頃から…あ・れ・ほ・ど飲みすぎはいけませんと口辛く言っていたつもりでしたが、ご理解頂けてない

ようで。」

ソウリン／モトチカ／モトナリ「「ひい?」「」」

ドウセツの余りの冷やかな目線に西国乙女三人衆肩を寄せあいながら顔は真っ青になっている（笑）

ミツヒデ「因みにヨシモト殿とイエヤス殿はどちらに行かれるおつもりで?」

ヨシモト／イエヤス「「キヤー?」「」

と二人の肩に手を置き清々しい程の笑みを浮かべているミツヒデ。

和樹「（こりや怖えーわ。）」

皆「（確かに。）」

ヨシモト「ちっ違うんですのよ?! ミツヒデさん? こっこれは、えっえーと…そっそのですね」

イエヤス「あ…（お姉様…バレバレ…です。）」

ヨシモト「かつ和樹さん（涙）？」

しどろもどろになりながら言い訳を考えていたが、結局思い浮かばず俺の所に詰め寄ってきた。

和樹「ちよ？／＼／＼（柔らかい…て早く離れないと）」「ヨシモトが和樹に抱き付いた時にその豊満な胸が形を変えていく。

その光景を見たミツヒデとドウセツは…

プツン？

それは切れてはいけない糸が切れた音だった。

ミツヒデ／＼ドウセツ「和樹殿？／＼和樹さん？」

二人の怒りが一気に最高潮になり出てはいけない黒いオーラを出しながら和樹達に一步一步近づいて来る。

和樹「っ!!（ヤバイ？このままじゃ俺がお陀仏になる…かくなる上

は？（ごめん？ヨシモト？」

和樹が取った行動は。

ヨシモト「えっ？」

それは鬼神状態の二人の前にヨシモト（生け贄）を差し出す事だった。

ヨシモト「和樹さん!?!?!」

ミツヒデ「流石和樹殿だな。」

ドウセツ「ええ、これで聞きたいことがしつかりと聞けます。」

さつきと打って変わって黒いオーラは綺麗さっぱり無くなっていた。

そしてヨシモトに二人はこう言った。

ミツヒデ／ドウセツ「では逝きましょうか。」

皆「(何か…いくの字がちがう?)」

ヨシモト「あ…(終わりましたわ。)」

ドウセツ「それより桜華さん?行かなくて良いんですか?」

桜華「あっそうですね!では、ドウセツさん、ミツヒデさん、後は  
お願いしますね?」

ドウセツ／ミツヒデ「お任せ下さい／任された!」

皆「行ってきます。(きまゝす)」

5人「[[[[ああ(涙)]]]]」

………ボタン。

そして無情にドアは閉められた。

ミツヒデ／ドウセツ「さあ…お・は・な・しをしようか(致しましよ  
うか)。」

・ ・ ・ ・ ・  
5人 「「「「「イツイヤー——————」」」」」」  
「!!?!?!?!」

後ろ手に聞こえる悲鳴に皆（桜華は除く）は静かに心の奥で決心した。

皆「あの二人は絶対に怒らせてはいけない？（ですね）（のう）（ですう〜）」

と皆心なしか冷や汗を掻きながら桜華の目的の場所に向かうのだった。

## 15話

〜某電気街〜

桜華 「いやー久しぶりに着いたわ〜 (笑)」

「マサムネ／ノブナガ／ヨシテル」  
「何か…凄いうきうきしてるな  
(のう) (ますね) …。」  
「」

桜華 「我が整地よ〜 (涙)」

和樹 「まあ…この人に取っては仕方ないことなんだけど…。 (苦笑)」

リキユウ 「あの一…和樹さん？」

和樹 「どうした？」

リキユウ 「あれはー良いですかね (笑) 道のど真ん中で美人が四つ  
ん這いで涙…流してますけど。 (笑)」

和樹 「ギャー!? 何してんだ〜あの人は〜!」

リキユウに言われた所に目を向けると、何とも言いがたい光景を見

て俺は思わず、頭を抱えながら叫んでしまった。

取り敢えずそのまま置いて置くわけにもいかず、直ぐ様手を差し伸べる。

和樹「ほら！そんな所で座っていたら他の人が迷惑しますから。」

桜華「いや？」

ペシッ？つと手を叩かれる。

和樹「ちよつと!!何するんですか？」

桜華「何で和樹の手なんか握らないといけないの!!和樹より数倍可愛い乙女達が良いの？」

和樹「な!!(こんのく大馬鹿(先生)がー?(怒)はあ。」

桜華「良いでしょ?別に?フンだ？」

和樹「んくあつ?そうだ?ヒデヨシー少し良いかー？」

ヒデヨシ「何々？かつちゃん？」

和樹「ゴニヨゴニヨ…。」

ヒデヨシ「えっ?!それって私がするの?!」

和樹「頼む？」

ヒデヨシ「んー? やつてもいいけど…やっぱり少し恥ずかしいかな

／／／

和樹「やってくれたらーっただけ何でもお願い聞くから…な？」

ヒデヨシ「ホッホントに?!何でも?!」

和樹「おっおう?俺に出来ることならな。」

ヒデヨシ「やったね?それじゃ直ぐにやって来るね?」

和樹「おう?頼んだ。」

タツタツタ！つと桜華に小走りで近付き、真正面に座り桜華に満面の笑みで言った。

ヒデヨシ「そんな所に座ってないで、早く行こうよ？桜華お姉ちゃん？」

桜華「ぐはっ？（この…破壊力は…私の…想像を…遙か…に…超え……る。）」

バタツ？

ヒデヨシの近距離での、微笑みの爆弾＋「お姉ちゃん」呼びのハイコンボは桜華に大ダメージを与えた（笑）。

桜華「……っ。」

ヒデヨシ「あのくだった大丈夫ですか？桜華さん？」

桜華「…か。」

ヒデヨシ「か？」

桜華「可愛い〜?」

ヒデヨシ「ひゃあ?!」

急に立ち上がった 桜華にこれでもかと抱き締められるヒデヨシ。

ヒデヨシ「おっ桜華…さん／＼／＼苦しいよ／＼／＼」

桜華「はあく可愛い過ぎるわ〜♥最高〜♥」

余りに突然の事でヒデヨシの顔を真っ赤つか状態の上に桜華はその事に全然気付いていない。

しかも、道行く人達がチラチラと様子を見ていたので直ぐに二人を連れ戻しに行く。

和樹「ほらほら?皆見てるから、行きますよ二人共?」

桜華「はいはい。」

ヒデヨシ「うん／＼／＼」

ヒデアキ「あつ？3人共戻ってきましたよ？」

ノブナガ「遅い？（怒）」

ヨシテル「まあまあ、そんなに目くじらを立てなくても（苦笑）」

リキユウ「そうですよ（笑）面白い物も見れたのですし。」

桜華「フフン？そうでしょう？流石私ね？」

和樹「全く？その自信は何処から出てくるのですか？ホントに…後、そのドヤ顔止めて下さい何か腹立つんで？」

ヒデアキ「あれ？ヒデヨシちゃんは？何処にいるんですか？」

桜華「勿論？私が抱き締めてるわよ？」

和樹「何、当たり前前の様に言ってるんですか？早く離してあげて下さいよ。」

桜華「えー!?!和樹「えーじゃ無いです。」分かったわよ。」

ヒデヨシ「……………」

桜華に離されたヒデヨシは顔を下に向けたまま声を出さない。

ヨシテル「ヒデヨシさん？」

マサムネ「ヒデヨシ殿？大丈夫か？」

顔を上げないヒデヨシを心配して声を掛けるが返事が無い。

トシイエ「おい？ヒデヨシ？返事しろよ？」

痺れを切らしたトシイエがヒデヨシの顔を無理矢理上げた…すると？今にも顔が爆発するかもしれないほど顔を赤くさせ湯気が立ち上っていた。

トシイエ「おいおい？どうしたんだよ？その顔？」

ヒデヨシ「ふえ!?!」

そして…ボン?…と音を立て、倒れかけの所をすかさずヨシテルが抱き抱える。

ヨシテル「ヒデヨシさん?!ヒデヨシ」きゅくゅ!!」気絶している様ですね。」

トシイエ「マツマサムネさん?ヒデヨシが? (涙)」

マサムネ「おっおち落ち着くんだ?!こっこういう時は…えつと…だな (汗)」

リキユウ「マサムネさんが一番落ち着いて下さいな。」

マサムネ「わっ私はいつも落ち着いているぞ?。」

桜華「酷い?…一体誰がこんな事を…和樹ノブナガ「先生(お主)のせいでしょうが(だろうが)??」「…テヘペロ?。」

和樹「可愛くn桜華「何ですって(怒)」いふあいであんなにふあなせー(涙)?。」

リキユウ「おやおや。」

ノブナガ「取り敢えずサルを何処かに休ませんどの。」

ヨシテル「そうですね…和樹さん、因みにこの辺りにゆっくり休める事が出来る場所がありますか？」

和樹「いてて？そうだな桜華「ありますよ？取って置き場所が（ニツコリ）」そこ大丈夫ですか？」

桜華「何か？（黒笑）」

和樹「いえ？何にも問題ありません？（ビシッ）」

桜華「宜しい？それでは行きましようか？」

皆「ノブナガ／トシイエ／リキュウ／マサムネ／ヒデアキ／ヨシテル」  
「「「「「はーい？（おう）」」」」」

（青年十乙女達移動中（一人除く））

・  
・  
・  
・



桜華「ノブナガさん、百聞は一見に如かずですよ？では入りましよう？」

メイド達「!!!!!!!!!!!!お帰りなさいませ！ご主人様！お嬢様！  
!!!!!!!!!!!!」

皆「ノブナガ／トシイエ／ヒデヨシ／マサムネ／ヒデアキ／リキユウ／ヨシテル」  
「!!!!!!!!!!!!おお？」  
「!!!!!!!!!!!!」

店に入った瞬間に大勢のミニスカメイド達がお出迎えをされ乙女達も驚きを隠せない。

メイドさん「一条様お久しぶりで御座います？本日は何名様でしょうか？」

桜華「9名です。それと部屋はいつもの所で。」

メイドさん「かしこまりました？では、プレミアム席の方にご案内致します。」

そうして俺達は席に案内される。

メイドさん「こちらがメニューになっております。ご注文の時はこちらのベルでお呼び出し下さい。では一時のお時間をごゆつくりと。」

桜華「では皆さん好きな飲み物を選んで下さい。」

ノブナガ「なんじゃ？酒は無いのか？」

和樹「いや？無いから一応此処は喫茶店だから？」

ノブナガ「つまらんのか？仕方ないワシはこれにするかの。」

リキュウ「では、私はこれを。」

という風に皆メニューを見ながら気になる物を選んでいった。

桜華「決まった様なので頼みますね。」

・  
・  
・  
メイドさん「はい！かしこまりました！失礼致します。」

そう言つてメイドさんが見えなくなると、ヨシテルが話し出す。

ヨシテル「しかし、あのように脚をあんなに出して恥ずかしく無いのでしょうか？殆んど男性の方が多い様ですし。」

皆「「「確かに？」」」」

和樹「まあ…そういう服装出しな。(いや、皆の戦国衣装も大差ないけど。)後は男性客が多いのはそういう客層狙いなだけだと思うよ(苦笑)」

皆「「「なるほど？へー？」」」」

和樹「それにあんまり女性客には馴染みが無いから、俺の横にいる人を覗いて…な。」

桜華「何を当たり前の事を？メイド服はあの短いスカートが良いんじゃない？黒のミニスカから伸びる白く細い脚を眺めるのが私の元気の源よ？」

和樹「そんな事を皆の前で熱弁しないで下さい？恥ずかしい？」

桜華「何よ？決して恥ずかしく何か無いわ？これこそ…？」

俺の横で椅子から立ち上がり拳を掲げ言った。

桜華／雅晴 「メイドこそ至高そして私／俺様のオアシスだ??」

桜華／雅晴 「へ!?!」

和樹 「げっ!?!」

何とそこには先生と全く同じく椅子から立ち上がり拳を掲げ恥ずかしいセリフを惜し気もなく言っている俺の悪友がいた。

## 16話

桜華／雅晴「……………」

暫くお互いに無言のまま見つめあっていると。

雅晴「(汗)あれ?良く見たら和じゃねえか?何やってんだよ?」

桜華「……………(怒)ピキッ?」

和樹「いつ?!そっそれはこっちのセリフだったの? (こいつ…先生を見なかった事にしやがった(汗)) お前こそ何やってんだよ?」

雅晴「俺様はもちr和樹「あつ、やつぱ言わなくていいわ。」「おい?最後まで言わせろ?」

和樹「はいはい。」

雅晴「くうく?俺様は悲しい…ぜ。所でよ和、その後ろにいるめっちゃや美人な人達は誰だ?!」

和樹「今頃かい!」

プルプル?プルプル?雅晴「……………いぞ。」突然に雅晴が震えだし小さな声で何かを話したので思わず聞き取りに行ったのが間違いだった。

和樹「はっ？今、何て言っつて雅晴「ズルいぞー??」うっせ？」雅晴「お・ま・え・は（怒）何時からそんな甲斐性無しに成りやがったく（血涙）」

和樹「知るか？（怒）」

雅晴「ぐぞく？俺にもじようがいじろー？（涙）」

和樹「だー？んなぐしやぐしやな顔で近寄るんじやねえ？紹介はちゃんとしてやる？それよりお前…何か大事な事を忘れてないか？（汗）」

雅晴「何がだよ？それより早く紹介しろっつて和樹「うっ後ろ？（ガタガタ!!）」んだよく後ろが何だっ……て」

桜華「何か…申し開きはあ・り・ま・す・か？（怒）」

ゴゴゴゴゴゴ？

雅晴「ひい？おっ桜華先生!!」

和樹「あーあ。俺…しーらね？」

雅晴 「おいコラ？ふざけんな？和？親友の俺様を見捨てる気か!!」

和樹 「当たり前だ？俺には関係ないしな（笑）」

雅晴 「この裏切り者く（涙）」

ガシツ？

桜華 「では少しだけ…O・H・A・N・A・S・H・I…しましうか？（黒笑）」

雅晴 「ひっ?!いつ嫌だあああああ（涙）」

涙目の雅晴はズルズルと桜華に引きずられ奥の部屋に入っ  
た。

キイイイイ…バタン？

「ノブナガ／ヒデヨシ／トシイエ／リキュウ／ヨシテル／マサムネ  
／ヒデアキ」「……………」

ズズツ？和樹「ふうく。紅茶が上手いな。もう一杯貰えますか？」

メイド「畏まりました。それに勿体無いお言葉ですわ。」

「マサムネ／ヨシテル／ノブナガ」「いやいやいや？何を呑気に和  
んでいる？（ですか？）（のじゃ？）」

和樹「ん？ああ…まあ大丈夫だろうアイツなら…多分。」

「ヒデヨシ／トシイエ／ヒデアキ」「多分!？」

和樹「それに雅は昔から先生の折檻は慣れてるしな。」

リキュウ「あまり大丈夫に聞こえないですが（苦笑）…それに先程  
の御仁を信頼されているんですね。」

和樹「別に／／まあアイツとは腐れ縁だしな。」

ヒデアキ「でも何か少し可哀想ですねえ」

ヒデヨシ「そうだね（苦笑）」

トシイエ「そっかー？おっ？これ凄く甘くてうめー？／＼／＼」

ヒデヨシ「もう？トツシー？」

マサムネ「まあまあヒデヨシ殿。」

和樹「別に気にする必要はねえよ。」

ヒデヨシ「でも心配だし。」

和樹「アイツはよく先生にちよっかい掛けてるし」

リキュウ「和樹殿がそう言うのであれば私達はゆっくりと待ちましよう。」

ノブナガ「まあそれしかないかのう。」

マサムネ「そうだな。」

ヒデオシ「本当に大丈夫かな？」

ヨシテル「取り合えず、お二人の話が終わるまで先程の方の事を教えて下さいませんか？」

和樹「んじや時間潰しで話すか…。それじゃアイツの名前k桜華「戻ったわよー？」話す前に帰ってきたな…!？」

そこにはとても良い笑顔の桜華と桜華の右手にボロ雑巾のようになった雅晴がいた。

和樹「はっ話し合いは終わったんですよね？」

桜華「勿論？終わったわよ？ニコツ★（黒笑）」

ヒデオシ／トシイエ「ひい？」

ヒデアキ「まっマサムネ様く（涙）」

マサムネ「大丈夫だ？ヒデアキ殿？私が付いているから。」

桜華「もう？心外ね？そんなに怖がらないですよ？普段は優しく素敵なお姉さんなんだから？」

和樹（どの口がそれを言うんだか。）

すると桜華が急に自分の方に振り返り

桜華「か・ず・き……？今直ぐ夢の中に旅立ちたいかしら（黒笑）」

和樹「心の底からすみません!!」

桜華「まあ……別に良いわ所でさつきは何を話していたの？」

和樹「雅晴の事を皆に教えようと。」

桜華「そう、分かったわ。」

和樹「えっ!!ちよ?」

桜華「い・い・か・げ・ん・に・お・き・な・さ・い?」



和樹「はあ!!んなもんあるかよ?。そんだけ無駄口叩けるなら十分だろうが。」

雅晴「あいからわず俺様には冷てーなー?。」

和樹「それよりほら。」

雅晴「んあ?。」

桜華「ふふっ?。」

雅晴「ビクッ?お久しぶりです?桜華姉さん(ビシッ)」

桜花「はい?お久しぶりですね。元気にしていましたか?。」

雅晴「勿論ですよ?桜華姉さん帰って来たなら言ってくれば、いの一番に俺様が迎えにいきましたの?。」

桜華「それはありがとうね。実は紹介したい方がいるから挨拶してくれる?。」

雅晴「任せて下さい?俺様が完璧n和樹「早くしろよ。」わーてます

よつと?」

そしてノブナガ達の前に出て、自己紹介をし始めた。

雅晴「俺様は九条雅晴?そこの悪友とは小さい頃からの付き合いだ?好きな食べ物は肉で、好きな女の子は皆本雛ちゃん?だから俺様の事を好きになつても駄目だぜ?…そして俺様の好きなフエチh和樹「誰もテメーの好きな女子とフエチはしりたくねえし完全に要らねえ情報だろうが(怒)ガン?」痛つてーな?今、ちゃんと自己紹介してるだろうが?」

和樹「その自己紹介がまともじゃ無いんだろうが?」

雅晴／和樹「「ギャイ?ギャイ?ギャイ?」」

ノブナガ「こやつも雛と同様で騒がしい奴じゃのう。」

ヨシテル「でも凄く楽しい方ですね?」

桜華「ご免なさいね、騒がしくて。」

リキユウ「喧嘩するほど仲が良いと言うことですか。」

桜華「そんな所ね。」

ヒデヨシ「でも、こんなに騒いでお店に迷惑じゃ無いの?」

桜華「ふふ?大丈夫よヒデヨシちゃん?ここのお店は私が建てた様なものだしね(笑)」

ヒデアキ「ぴゃあ?すつ凄いですう〜!!」

マサムネ「大したものだ?」

桜華「ありがとう?さて…と…ここでのイベントはメイド喫茶だけでは無いわよ?」

ヨシテル「メイド喫茶だけでは無いと言うのは?」

リキュウ「どお言う事でしょうか?」

乙女達が首を傾げていると、桜華がテーブルの上にある鈴を鳴らす。

メイド「一条様御呼びでしょうか？」

桜華「ちよつと今からいつもの奴をやりたいのだけど、大丈夫かしら？」

メイド「勿論大丈夫で御座います。」

桜華「それじゃあお願いするわ？」

メイド「畏まりました。それでは少々御待ち下さい。」

・ ・ ・ ・ ・

♪メイド準備中♪

メイド「ご準備完了致しました。」

桜華「ありがとうございます？それでは始めましょう？」

皆「ノブナガ／ヒデヨシ／トシイエ／ヒデアキ／マサムネ／リキユ  
ウ／ヨシテル」「」「」「始めるって?」「」「」

桜華「決まってるでしょう?・コスプレよー?」

皆「ノブナガ／ヒデヨシ／トシイエ／ヒデアキ／マサムネ／リキユ  
ウ／ヨシテル」「」「」「コスプレー?」「」「」

桜華「そうよ?・色々あるから皆に合うのを私が探してあげるわ?ほ  
ら、まずはヒデヨシちゃんから?」

ヒデヨシ「えっあたしから!」

次々に乙女達を試着室に連れていく。

ノブナガ／マサムネ「……(汗)。」

ソローリ?ソローリ?ガシツ?ノブナガ／マサムネ「ひっ!」

桜華「何処に行くのかしら?」

マサムネ「いや?!あのその(汗)」

ノブナガ「あれじゃ用を思い出したのじゃ？」

マサムネ「そうそう?」

桜華「ふーん。何の用事?今、急がなくちゃいけない用事なのかしら?」

ノブナガ「ぐっそっそれは…(汗)」

マサムネ「えーと(汗)」

桜華「本当はコスプレしたくないから逃げるじゃ無いの(黒笑)」

ノブナガ／マサムネ「いや?その(もうお嬢ので懲り懲りじゃ／出来ればやりたくない)」

桜華「無いなら出来るわよね?」

ノブナガ／マサムネ「えっ!」

桜華「で・き・る・で・しょ？」

ノブナガ／マサムネ「……はい。」

桜華「それじゃレッツゴー？」

それから10分後……色んなコスプレ衣装を着た乙女達がいた。

ヒデヨシ「うう／／／恥ずかしい／／」

トシイエ「本当だぜ／／／」

ヒデアキ「あんまり見ないで欲しいですう／／／／／（涙目）」

ヨシテル「こういうった服装は初めてですが、中々良いものですね／／」。

リキュウ「確かにそうですね。些か照れ臭いですけど／／／」。

ノブナガ「くっ何て窮屈なんじゃ？／／／／／／／／／」

マサムネ「私には似合わないのに／＼／＼／＼／＼／＼」

「それぞれ着た服は皆さんのご想像にお任せいたします」

桜華「キヤー？／＼／＼良いわあ？本当に良いわあ？」

雅晴「なあ和。」

和樹「何だよ。」

雅晴「何か俺様達のやってた事が凄く不毛に思えてきたぜ。」

和樹「奇遇だな、俺もだよ。」

雅晴「しっかし…桜華姉さんは相変わらずだけどよ、あの子達って戦国乙女のキャラだろ？」

和樹「気付いてたのか!？」

雅晴「そりゃ気付くだろう？普通いくら現代の服着てるからって知ってたら分かるしな。」

和樹「じゃあ他人に気付かれるのも時間の問題か?!」

雅晴「いやいや?普通に生活してる分には問題無いと思うぜ?」

和樹「そうか。」

雅晴「まあでも驚いたぜ流石にな?」

和樹「悪い∴別に隠してるつもりは無くて。」

雅晴「あー?皆まで言うなって分かってるから?」

和樹「雅晴。」

雅晴「他にもいるんだろ?!紹介頼むぜ?」

和樹「たくっそう言う所に勘を鋭くするなよな(苦笑)」

桜華「何やってんのよ?!早く来なさいあんた達にもコスプレしてもらうんだから?」

和樹／雅晴 「はいはい？／任しといて下さい？」

和樹（そーいや…家にいるソウリン達は大丈夫だったのかな？）

なんて事を思いながら、桜華の元に向かうのであった。

17話

・ ・ ・ ・ ・

↳その頃留守番組は↳

二日酔いによる頭痛を我慢しつつ正座をしながら2時間程…ミツヒデとドウセツのお説教を受けていた。

皆「ヨシモト／イエヤス／ソウリン／モトナリ／モトチカ」  
((( ))) なっ長い (汗) ((( )))

ミツヒデ／ドウセツ 「くどくどくど…?」

↳乙女達アイコンタクト中↳

モトチカ 「《ちよつと?・いくら何でも長すぎない!?》」

モトナリ 「《そんなこと…私に言われても知らないわよ!?》」

ソウリン 「《……………》」

イエヤス「《お姉さま…足が痺れ…て…痛い…です。》」

ヨシモト「《ああ…痺れてるのを我慢するイエヤスさんも可愛いですわー／＼／》」

ソウリン「《……………。》」

モトナリ「《ねえ？さつきからソウリンが一言も話して無いけど？》」

モトチカ「《ソウリン？ねえ!!ちよつとソウリンってば？》」

ソウリン「《はっ?!わっ私は何を？》」

ヨシモト「《お説教の途中でドウセツさんにごつてりと絞られてからは放心状態でしたわよ。》」

↳遡ること1時間前↳

ミツヒデ「しかし…やれやれだな。」

ドウセツ「全くで御座います。それと一つ宜しいですか？ミツヒデ様？」

ミツヒデ「如何した？ドウセツ？」

ドウセツ「いえただ…特にソウリン様にはきつめのお灸をと思いまして。(ニツコリ★)」

ソウリン「ひっ!! (涙目)」

ミツヒデ「ああ…そうか。では、しっかりと頼むぞ?。」

ドウセツ「勿論で御座います。」

ガタガタ？

ガタガタ？

まるで…この世の終わり様に自分の身体を抱きすくめ震えるソウリンがいた。

「モトチカ／モトナリ／ヨシモト／イエヤス」「……………」

ヨシモト「《あの？ちよつと？これ尋常な震え方では無いですわよ！?》」

モトチカ「《あー…まあほら…昨日の酔い方は酷かったからね？（苦笑）》」

モトナリ「《そうね…私が言うのも筋違いだけど、自業自得よ。》」

ソウリン「《うっ？うわー？（涙）もう嫌ですー？（涙）ドウセツのお仕置きは嫌ー？!》」

イエヤス「《そつソウリンさん!》」

ヨシモト「《かなり来てますわね…それよりモトチカさん？モトナリさん？何とかソウリンさんを庇って差し上げられませんの!》」

モトチカ／モトナリ「《うゝん??》」

モトナリ「《はあ…仕方無いわね…モトチカ。》」

モトチカ「《うん?…っ?!そうよね?モトナリ?》」

その時、モトナリとモトチカが顔を見合わせ…にやりと薄ら笑いを浮かべた。

ヨシモト／イエヤス「「??」」

先程の二人のにやけ笑いの意味が分からず思わず首を傾げるヨシモトとイエヤス。

顔を青くさせて見るからに落ち込んでいるソウリンにモトナリとモトチカがソウリンの両肩に手を置き一言。

モトナリ／モトチカ「「しつかりと絞られて来なさい（来てねー?）」」

ソウリン「ちょ?!嘘でしょう?!私の事庇ってくれないんですか?（涙目）」

モトチカ「元々はソウリンが加減せずに飲むからよ?。」

モトナリ「それに…私達はしつかりと貴女を止めたわよ。」

ソウリン「うぐ?! だっだったら…モトチカはどうなんですか? モトチカも加減せずに飲んでたじゃないですか?」

モトチカ「いや…それは…あつ? あれよ? 私は別にドウセツみたいに従者みたいな子とかは居ないしね?」

ソウリン「狡いです? 横暴ですよ?」

ヨシモト「それは、横暴では無いような気が致しますわ。」

イエヤス「その…ソウリンさん…頑張つて…下さい。」

ソウリン「何をですか?!」

★  
ドウセツ「では、行きましようか? ソ・ウ・リ・ン・様 (ニッコリ)」

ソウリン「いやいや?! その…まっ先ずは深呼吸して落ち着きましよう? ……ね? (汗)」

ドウセツ「大丈夫で御座います。ソウリン様…私は到って冷静ですの。」

ソウリン「そつそれなら？お茶にしませんか？あれから1時間位たってますし、皆さんや…それにドウセツも喉が乾いたでしょ？  
(汗)」

ドウセツ「そちらも大丈夫で御座います。私は機械ですのでご心配なく。」

ソウリン「(ダラダラ(汗)ダラダラ(汗)どっどーしよー？本格的に不味い!!…色々ドウセツに注意されたりとかはあるけど、これは…ほっ本気で怒ってる!!普段の数十…いや数百倍怖い(涙)」

ドウセツ「もう…いい加減宜しいですか？(怒)」

ソウリン「ひえ!!(かつ考えるのよ？大友ソウリン？この圧倒的に不利な状況を…変えられる策を？何か…：…何か無いの!!…：…ハッ？そうですよ？こう言う時の仲間ではありませんか？正直…モトチカとモトナリでは宛になりませんか？先程、私の事を見捨てましたし？ヨシモトさんとイエヤスさんなら助けて頂けるかも知れませんか？ちよつとだけ待って下さい？ドウセツ？」

チラツと期待の眼差しを込めてアイコンタクトを送るソウリン、それに気付いたヨシモト達は一斉にソウリンから目をそらした。

ソウリン「(なっ!? そんな!?)」

ヨシモト「(ごめんなさい? ソウリンさん? 流石の私達でもとても  
じやありませんが助けてあげれませんわ?!)」

イエヤス「(…お姉様。)」

モトチカ「(うわ? あれめっちゃ怒ってるじゃん?)」

モトナリ「(それはそうなるわよ…酔った勢いで…ふっふふ…あ  
んな…事を…ドウセツのふふふ…顔に…落書きなんて…ふ  
ふっ。)」

モトチカ「(ええー? そんな事をしたの!?)」

イエヤス「(ソウリン…さん…それ…は。)」

ヨシモト「(弁明の余地は有りませんわね。)」

そんな4人「ヨシモト／イエヤス／モトチカ／モトナリ」の助けを  
貰えずのソウリンはと言うと、何処か悟った様に上の空で物思いに  
耽っていた。

ドウセツ「それでは、特に何も言い分が無いようなので参りましようか？」

ソウリン「アハハ：ハハ（ああ：この世に私の救いの神は居ないのですね…。）……………はい。」

そう言いながら二人して奥の和室に入ってしまった。

くそして冒頭のやり取りに戻るく

ソウリン「《思い出すだけで：また気分が悪くなります。》」

イエヤス「《怖かった：です。》」

モトチカ「《もう：ドウセツを怒らせない様にしないとね？》」

モトナリ／ヨシモト「《そうね／ですわね》」

ミツヒデ「ガミガミ？ガミガミ？……………つて事だ？分かったなお前達？」

5人「ヨシモト／イエヤス／ソウリン／モトチカ／モトナリ」  
「二二」はーい。((( ))) (8割位ミツヒデの話聞いてなかった(ですわ) (です  
すね) (わね) ((( ))) 「二二」

ドウセツ「もうこれくらいで十分でしょうか？」

ミツヒデ「そうだな…これだけ言って置けば大丈夫だろう。」

モトチカ「はあー？ やつと終わった〜？」

ソウリン「そうですね？ 疲れました？」

モトナリ「私達が疲れるのも変な話だけど。」

イエヤス「それよりも…お腹が空きました。」

ヨシモト「あら？ もう、御昼ではありませんか？ そう言えば昼食は  
どう致しますの？..」

ミツヒデ「ん？ ああ…確かドウセツが和樹殿から御昼代を頂いてな  
かったか？」

ドウセツ「いえ…私はてつきりミツヒデ様が受け取っている物かと…。」

ミツヒデ／ドウセツ「……………えっ!」

7人「ヨシモト／イエヤス／ミツヒデ／ソウリン／ドウセツ／モトナリ／モトチカ」「……………ええ……………?」「……………?」「……………?」

モトチカ「ちよつと?…どうするのよ?…ミツヒデ!」

ミツヒデ「そんなこと、私に言われても分からん?」

イエヤス「ご飯…無し……………パタツ。」

ヨシモト／ソウリン「イエヤスさん!」

モトナリ「参ったわね。」

ドウセツ「それで御座いますね。」

ミツヒデ「誰か?…この中で料理出来る者は居ないのか!」

ヨシモト「私とイエヤスさんは料理は殆んどしたことはありませんわ。」

モトナリ「私も無いわ。」

モトチカ「私はたまくに自分でするけど、正直お勧めはしないわよ？」

ソウリン「では？僭越ながら私が作りますドウセツ「止めて下さい。」ってどうして止めるのですか？ドウセツ!？」

ドウセツ「ソウリン様が台所に立つと暗黒物を生み出しますので。」

ソウリン「酷い!？」

ヨシモト「あつ暗黒物って何ですの!？」

モトチカ「何か：聞くだけで胃が痛くなりそうね。」

ソウリン「そんな事ありませんよ？あの時はちよつと失敗しドウセツ「米を洗剤で洗ったり：炒めるだけで悪臭が出て、更にはどういう調味料を入れれば鍋に紫色の物が出来るのか教えて頂きたいので

すが?」うつ?それは……。」

ドウセツ「はあ…因みにミツヒデ様の料理の程は?」

ミツヒデ「いや、出来ないことは無いがこの世界の料理器具が分からないのでな手が出ない状況だな。」

ドウセツ「困りました…せめて誰かが此方の料理器具の使い方を教えて頂ければ…私とミツヒデ様で何とか出来るのですが。」

ミツヒデ「そうだな…生憎と和樹殿も桜華殿も他の皆と出掛けているからな。」

7人「ヨシモト／イエヤス／ミツヒデ／ソウリン／ドウセツ／モトチカ／モトナリ」「」「」「うーん??」「」「」

皆がどうするかと悩んでいると…突然にドアが開き向こうからこの窮地から救ってくれそうな人物が入ってきた。

雛「おっはよー?つてもう昼か?んじやこんにちはー?皆、元気?」

7人「ヨシモト／イエヤス／ミツヒデ／ソウリン／ドウセツ／モト

チカ／モトナリ」「」「」「居たー！?!?!お願いします助けて下さい  
???'」

雛「へっ?!何これ?!どういう状況なの〜?!」

突然に沢井家に来た雛に頭を下げてる乙女達……さてさて無事に  
乙女達は雛に料理を教えて貰い昼食を乗りきる事は出来るのか!?

## 18話

雛 「えっと…いまいちよく状況が分からないんだけど？」

ドウセツ 「申し訳ありません？少し動転してしまい？」

雛 「それで…何でいきなり料理なの？」

ミツヒデ 「それが……………と言う事なのだ。」

雛 「なるほどね？了解？了解？私に任せて？」

ヨシモト／イエヤス／ミツヒデ／ドウセツ／ソウリン／モトナリ  
／モトチカ「「「「いいの!!（ですの）（か）（で御座いますか）「「「「」

雛 「もっちらーん？大船に乗ったつもりでいてよー（笑）」

ソウリン 「はあく？良かった？これでご飯が食べれます？」

モトチカ「そうよね〜!!ほんと一時はどうなるかと思っただけこれ  
で安心ね？」

雛「んじゃ今から作るね？」

ドウセツ「待って下さい？」

雛「およ？…どうしたの？」

ドウセツ「私も一緒にお手伝いをして宜しいですか？」

雛「それは、構わないけど？…どうしたの急に？」

ドウセツ「いえ…ただその何時も和樹さんや桜華さんに作って頂いてますので、こちらの調理器具の使い方とかを教えて頂ければ自分達で作ってしまえば負担は少しは減るかと思ひまして。」

雛「分かった？大歓迎だよ？なら一緒に作ろうか？」

ドウセツ「ありがとうございます。」

ミツヒデ「私も良いか？」

雛「うん？良いよ？」

ミツヒデ「すまないな。」

雛「ううん？気にしないで？」

く乙女達料理中く

雛「皆くお待ちせく？出来たよ。」

ヨシモト／イエヤス／ソウリン／モトナリ／モトチカ「「「「「おお  
？」「」」「」」」」

イエヤス「んく美味しそうな香りです。」

ヨシモト「雛さんこれは何と言う料理ですか？」

雛「オムライスだよ？」

モトチカ「へえーこれも南蛮の料理？」

ソウリン「多分…：そうだと思いますけど？…何だか今度は全体的に黄色ですね。」

モトナリ「大丈夫なのかしら？」

雛「まあまあ？取り合えず食べてみてよ？味は保証するからさ？」

ミツヒデ「そうだな。」

ドウセツ「では、頂きましょう。」

雛／ヨシモト／イエヤス／ミツヒデ／ドウセツ／ソウリン／モト  
ナリ／モトチカ「「「「「頂きます？」「「「「「」

．．．．．  
ソウリン／イエヤス「おっ美味し〜い（です）??」

雛「良かった〜？久々に作ったから腕が落ちてるかもって思ったけどね（笑）」

ドウセツ「そんな事は御座いません。」

ミツヒデ「ああ…それにとっても美味だな？」

雛「ありがとう？」

・  
・  
・

↳20分後↳

モトチカ「あー？食べた？食べた？」

モトナリ「少し食べ過ぎたかしら？」

ソウリン「もう動けないですよー？」

イエヤス「確かに…私も少し苦しいです。」

ヨシモト「ですわね…和樹さんが帰ったら道場をお借りして身体を動かしませんと。」

ソウリン「えー？何だかもうこのまま寝ていたい〜？」

ドウセツ「宜しいのですか？ソウリン様…このままではブ・タになりますか？ああ…いえ違いますねソウリン様の場合…子ブタで御座いますね。」

ソウリン「ムキー？（怒）乙女に対して何て事言うの〜？（怒）」

ドウセツ「申し訳ありません、戯れが過ぎました…ですがこのままだらけるのも宜しくは無いかと。」

ソウリン「はあくそうですね〜何か…気分が変わるような…こ…と…あ？だったら恋のお話でもどうですか？」

ヨシモト「あら？それは良いですわね？」

モトナリ／モトチカ／ミツヒデ「「えっ」「」」

ソウリン「えっ？って何ですか？全く？」

ヨシモト「私はイエヤスさんの事を隅々まで言えますわ〜？それこそ頭の上から脚の爪先まで…す・べ・て（ニコツ★）」

イエヤス「(ぶる?) おっお姉様…(少し怖いです)」

ドウセツ「私も言えますよ…ソウリン様の恥ずかしい事を一から百まで言えます。」

モトナリ／モトチカ「それは良いわね?」

ソウリン「そうですね?私の恥ずかしい事は一杯ありますから話が尽きませんよね?…って何で私の羞恥の話になるんですか?」

雛「ふっふふふ?あはははは?」

ミツヒデ「ひっ雛殿?」

雛「あーおっかしー?もう笑いすぎてお腹が痛いよ?皆ってば何時もこんな感じなの?(笑)」

ミツヒデ「違うぞ?普段からこう言う感じではない?」

モトナリ「そうね…元々私達は敵同士よ。」

ヨシモト「まあ…否定は致しませんわ。」

モトナリ「私は自分の目的さえ果たせば他の事は構いはしないわ。」

ヨシモト「私もイエヤスさんと自身の国や民を守ればそれで良いのですから。」

イエヤス「……………っ。」

モトチカ「それでも？今は比較的には平和なんだし？何より将軍さんやソウリン達も頑張ってくれてるんでしょ？」

ソウリン「はい？これからもヨシテル様達ともっと頑張って行きませんか？ね？」

ミツヒデ「無論だ。」

ドウセツ「私も微力ながらお力添えを致します。」

雛「そっか？やっぱり皆…色々あるんだよね…羨ましいな…私はその言うさ敵と戦って自分の大事な物を守るとか天下統一とか自分のこれって言った目標みたいなのがなくて…正直皆が羨ましい



ドウセツ「では机の上の物を片しませんと。」

ヨシモト「では、私とイエヤスさんは雛さんのお手伝いを致しましょう?。」

イエヤス「分かりました。」

ソウリン「ほら?。早く準備しましょう?。モトチカ?。モトナリ?。そんな所に立っていないで此方に来てください?。」

モトチカ／モトナリ「はいはい。」

ソウリン「何でそんなにやる気が無いんですか?。全くもう?。つてこれは?。」

ミツヒデ「どうかしたのかソウリン殿?。」

ソウリン「いえ?。ただこの写真和樹さん達だと思っんですけど?。一人知らない方が写っています。」

ミツヒデ「どれどれ?。つ／／／」

モトチカ「何、見てるの？」

モトナリ「小さい頃の和樹達ね。」

ドウセツ「ソウリン様。私にも見せて下さい。」

ソウリン「えっ？ああ…うんどうぞ。」

ドウセツ「ありがとうございます。………これは!!／／／／」

イエヤス「皆さん？どうしたんですか？」

ヨシモト「イエヤスさん？止まってどうしました…の…ってまだ片付けしていませんでしたの？」

ソウリン「ごっごめんなさい？少し写真を見ていて」

ヨシモト／イエヤス「写真ですの？（ですか）」

雛「ヨシモー？いつちゃん？何見てrヨシモト「可愛い過ぎます

わー／／／／??「うわ?ちよ?びつくりした!」

イエヤス「お姉様…声が大きいです。」

モトナリ「まるで迷惑モードのソウリンと一緒にね。」

モトチカ「確かに(笑)」

ソウリン「どー言う意味ですか?」

ヨシモト「この可愛いさはイエヤスさんの可愛いさと同一いえもしかしたら越えますわ!」

ミツヒデ／ドウセツ「(確かに?可愛い過ぎる／／／／)」

雛「何何?気になる…うわ?懐かしいー?この写真?!桜華さんまだ持ってたんだ?」

モトチカ「この写真雛も写ってるよね?」

雛「そうそう?この時は丁度和樹とまーくんが初めて武道の大会で優勝と準優勝した時の写真だね?」

ヨシモト／イエヤス／ミツヒデ／モトナリ／モトチカ／ソウリン  
／ドウセツ「「「「「まーくん??」「」「」」」」

雛「うん？私と和樹のもう一人の幼馴染みの男の子？」

ドウセツ「では、この方も桜華さんに教えを受けていた…と言う事  
ですね。」

雛「……………そう…だねあの頃は二人共が楽しそうに日が暮れるまで  
ずっと武道に励んでたんだ。」

ミツヒデ「今は…？」

雛「どうかな…今は二人共前の頃に比べたら余りしなくなったか  
な。」

モトナリ「……………」。モトチカ「モトナリ？」…いえ少し考え事を  
してただけよ。」

ピンポーン？

ヨシモト「誰か来られたみたいですね。」

ドウセツ「私が出ます。」

雛「あつ?ちよつと?セツちゃん?私が出るから?」

ガチャ?

ドウセツ「どちら様で御座いますか?」

美沙「どーも?あらあら残念…和樹君では無くてこんな美人さんが出てくるなんて。」

雛「もう?セツちゃんてば?速い…よ…貴女は。」

美沙「お久し振りね、皆本雛さん?」

雛「何で貴女が和樹の家に?」

美沙「失礼ね、彼女が彼氏の家に遊びに来て何か問題でも?」

ドウセツ「彼女？貴女は和樹さんn雛「何が彼女なの？！どの面下げて来れたの？！あんな事しておいて？」雛さん。」

美沙「別に？私は彼とまだ別れた積もりはないし、あの件なら私は被害者よ？」

雛「よくもぬけぬけと？言えたものね？」

美沙「それより、和樹は居ないの？彼に会いたいんだけど？」

雛「居ないわ…例え居たとしても貴女は会わせる気は無い。」

美沙「ハア、本当にあんたって面倒だわ？ちよつと痛い目に合わないと分からないようね？」

パチン？

スーツを来た男達「「……………」」

雛「どう言うつもり？」

美沙「見て分かるでしょう？」

ドタドタ？

ドタドタ？

ヨシモト「どうされましたの?! 物凄い怒鳴り声でしたけど?」

モトナリ「騒々しいわね。」

ミツヒデ「これは一体どういう状況だ!」

モトチカ「何よ? この男達!」

イエヤス／ソウリン「お姉様…?。／ドウセツ?」

ヨシモト／ドウセツ「来ては行けませんわ?／ソウリン様? 私の後ろに?」

スーツを来た男A「お嬢、コイツらですか?」

美沙「ええ…そうよ?特に皆本雛を徹底的にね。後は子達はあんな

達の好きにきなさい？」

スーツを来た男C「へへっ？可愛いなく久々の女でテンション上がりますね兄貴？」

スーツを来た男B「確かに…な？俺はあのピンクのポニテが良いな。」

スーツを来た男A「おい？お前らそい言う話はやることをやってからだ？」

スーツを来た男B／C「へい？」

ミツヒデ「くっ？やるしか無いか？」

ドウセツ「致し方ありません？」

モトチカ「それじゃ私達も行くわよモトナリ？」

モトナリ「そうね…冥土への橋渡しになってあげるわ。」

ソウリン「殺しては駄目ですよ？」

モトナリ「分かっているわよ。」

ヨシモト「不安ですわね。」

雛「……………」

スーツを来た男達「「行くぞ?ゴラツ?」「」

乙女達に殴り掛かろうと向かって来る男達の急所を素早く的確に  
決めたのは何と?!雛だった。

ゴツ?

ガン?

ドゴツ?

スーツ来た男達「「ガハッ!!」「」

ドサツ?

雛「弱っわ？こんなもの？」

美沙「まさか？そんな!？」

ヨシモト／イエヤス／ミツヒデ／モトナリ／モトチカ／ドウセツ  
／ソウリン「「「「「「!?!?!」「」」」」」」

美沙「何ですよ？あんたは戦えない筈よ？」

雛「それはそうよ…誰にも私が戦えるの見せてないもの。」

美沙「くっ？調子に乗るんじゃないわよ？今、あんたが倒したコイツらはね所詮下っぱ何だから？」

雛「だったら次は貴女がやる？私は構わないけど？（ギロツ）」

美沙「チツ？仕方無いわ…今日の所は引いてあげる。けど私は諦めないわ…和樹を私の物にして皆本雛？あんたを絶望の言う名の地獄に叩き落としてやるわ？」

雛「……。」

美沙「ほら行くわよ？あんだ達？何時まで其処でのたうち回ってるのよ？」

スーツを来た男達「「へっへい？お嬢？」」

ガクツ？

ミツヒデ／ドウセツ「「雛!!／雛さん!!」」

雛「ハア？ハア？ハア？……だっ大丈夫……だから。」

イエヤス「でも…凄い汗の量です。」

ソウリン「私水を持ってきます？」

ヨシモト「取り敢えず家の中に入りましょう？」

く乙女達移動中く

雛「んく？んく？ぷはあー？上手い？生き返るく？」

モトチカ「それにしても雛って戦えたのね？びっくりしたわよ？」

雛「あはは（苦笑）一応は…ね。」

ソウリン「驚きましたよ？」

モトナリ「でも…さっきの様子を見ると長くは戦えないみたいね。」

ヨシモト「そうなのですか？」

雛「うん…元々は身体の方が昔から強くないから、激しい動きをしてしまうとさっきみたいにその場から動けないの。良くて10分が限界かな？」

ミツヒデ「そうか…無理を差せてすまない。」

雛「ううん？気にしないで？みっちゃん達が気にする事じゃ無いしね？」

ドウセツ「しかし先程の女性と男達は何者なのですか？」

雛「それは……。」

モトナリ「言えないと言う事かしら?」

雛「うん…言えない。」

ソウリン「どうしてですか!?!」

イエヤス／ドウセツ「ソウリンさん?／ソウリン様?」

ソウリン「でも?」

モトチカ「仕方無いわよ…雛にも事情があるんだし。」

ヨシモト「でもこの事は和樹さんに報告しておいた方が良いのでは?」

ミツヒデ「そうだな雛「やめて?」雛!」

雛「お願い?この事はだけは和樹には言わないであげて?」

ミツヒデ「しかしだな？」

モトナリ「別に良いんじゃない。」

モトチカ「ちよつと何でよモトナリ!？」

モトナリ「雛がどうしてそこまで、和樹に言いたくないかは私達には分からないわ」

雛「…。」

モトナリ「それに追いついたのは雛だから雛が決めたのならそれで構わないと思うわ。」

雛「……ありがとうナリちゃん。」

ソウリン「お昼から色々あったからもう夕方ですよ？」

ドウセツ「そろそろ和樹さん達も帰られると思いますし。」

イエヤス「何だか…とても疲れました。」

ヨシモト「そうですね。」

ガチャ?

モトチカ「とか言っていたら帰ってきたみたいね?」

和樹／雅晴／桜華「「ただいま?」」

ヒデヨシ／トシイエ／ノブナガ／リキユウ／ヨシテル／マサムネ  
／ヒデアキ「「「「ただいま?」」」」

雛／ヨシモト／イエヤス／ミツヒデ／モトナリ／モトチカ／ソウ  
リン／ドウセツ「「「「お帰りなさい?」」」」

和樹「あれ?雛?来てたのかよ?」

雛「うん?暇だったからね(笑)」

雅晴「おっ?雛ちゃんだ?俺様感激?」

雛「まーくんも一緒だったんだ?」

和樹「ああ…まるで狙ったように…な」

雅晴「な別けないだろ？」

モトチカ「貴方がまーくん？」

雅晴「ん？ああ他の乙女の皆だな？」

雛「そうだ？そうだ？まーくんを紹介しないとね？」

ノブナガ「一気に騒がしいのう」

ヨシテル「楽しいじゃ有りませんか？」

ガヤガヤ？

ガヤガヤ？

雛「ふふっ？何か良いな？」

桜華「…雛。」

雛「あつ？桜華さん？」

桜華「ボソボソ。（余り自分の身体に無理はしないように。）」

雛「!?!（……気付いてたんですね……分かりました。）」

桜華「宜しい？」

雛「はい？（笑）」

和樹「何の話だ？」

雛「何でもなくいよ？（笑）」

和樹「ん??？」

・ ・ ・

・  
・  
　　〳某高級レストラン内〵

??? 「珍しいですね…貴女が時間に遅れるなんて。」

美沙「少し用事が御座いまして。それに…レディは時間が掛かる物  
のですよ…：…篠原教頭？」

篠原「ふっ…それもそうだ。」

美沙「それでこんな夜遅くに呼び出すなんてどう言った御用件で  
しょうか？」

篠原「いえ…ただこの夜景を見ながら貴女と食事でも…と思いまし  
てね。」

美沙「それはそれは…とても嬉しく思いますわ。ですがそんな見え  
透いた嘘が私に通用するとも？」

篠原「…：…。全く…これは手厳しい、では単刀直入に…：どうでし  
たか？沢井の家は？」

美沙 「仰ってる意味が分かりかねますが？」

篠原 「居たのでしょうか？皆本のご令嬢が。」

美沙 「さあ？存じ上げませんが？それに私が沢井君の家に行ったのは事実ですがその時には誰も居ませぬ篠原「嘘はいけませんね。嘘は…。」チツ…居たわよ。」

篠原 「そうですか。良かった。(ニコツ)」

美沙 「あいからわず食えない男ね。」

篠原 「その言葉そのまま貴女に返しますよ。それにしても今回は珍しく貴女が手痛い痛手を負いましたね。」

美沙 「別に？あの3人は組の中じゃ下っぱの方だしね？私の側近には相応しくないわ。後ね…篠原教頭には聞きたい事が一つあるのよ…まさかあの皆本雛が戦えるなんて私は聞いてないのだけど？」

篠原 「それが何か？」

美沙 「…本当に屑ね。まあ良いわ。(もしその情報があってもあの

人数的に此方が勝てるわけないし。(ふう…もう帰るわ。)

篠原「おや？食べていかれないので？」

美沙「あんたと食事なんで此方から願い下げよ。」

篠原「そうですか。」

美沙「ええ…それじゃあね…篠原教頭。」

篠原「はい…ではまた学校でお会いしましょう金本さん。」

・ ・ ・ ・ ・

高層ビルの展望台で篠原は一人ワインを片手に呷く。

篠原「ああ…これからが長年に渡り夢見た計画の第一歩だ…精々私の手の平の上で踊ってくれたまえ…沢井和樹君。」

## 19話

〽  
???

ピチヨン…。

ピチヨン…。

和樹「うっ！ 痛えこっここは？ 何処だ？ ……俺は… 一体…!?」

和樹が目を覚ますと辺りが一面真っ暗な場所に居た。

和樹「何にも見えないな（確か… 昨日は雛と雅が乙女達に会って… 駄目だ。所々頭に靄が掛かっているみたいだ。） 此処で考えても仕方無いな… 取り敢えず歩くか。」

〽10分後〽

和樹「おーい！ 誰か居ないかー！ ……つてこんだけ歩きながら声を出しても人の気配も声もしないし… どーするかな？」

此処から出る方法も分からずじまいで立ち往生していたその時!? ビシッ！ と突如として真っ暗な空間に一筋の亀裂が入りその亀裂は空間の隅々まで広がり割れた。

和樹「なっ?!?何なんだよ…これ。」

割れた空間には大きな青空が広がり、下一面は湖の様に広がっていた。だがしかしその大空にはいくつもの巨大な鎖が所狭しと繋がれそして和樹の真正面に大きな玉座が一つだけ不自然に置かれていた。

ズキン！ 和樹「ぐあ！あつ頭がわ…割れる…。」

??? (黒)「ヨオ…マサカ…テメエがコンナトコロにクルなんてナア」

和樹「だっ誰だ!?!」

??? (黒)「オマエにコタエルギリはナイナ。」

和樹「何だとテメエ…!?!お前は一体…?」

声のした方に顔を上げると、姿形が全身真っ黒な謎の生き物?が立っていた。

??? (黒)「ハッ！何…アホヅラをサラシテイヤガる…テメエミタイなクズがナニをシにココにキタ?」

和樹「俺は?……一体何しに? (こいつの声を俺は知っている筈なのに……思い出せない。) うっ!」

ガクツと膝から崩れ落ち頭を抱え蹲る和樹。

??? (黒) 「チツ! シカタネエナ……オイ! カワレ!」

そお言うとその様子を眺めていた黒い生き物は一つ溜め息を吐くと黒かった体がみるみると白に染まっっていく。

その空白の玉座に座り、陽気に和樹に声を掛けた。

??? (白) 「ハハハ! ブサマダナーギャハハ!」

和樹「うっ! ぐう……ハア……何なんだよ……ハア……これは!」

??? (白) 「マダ……ワカンナイノー? イイヨーギャハ! ダツタラ……オシエテ……ア・ゲ・ル……ギャハハハ! ココハネアナタサマノ……キ・オ・ク・ノナカナノサ!」

和樹「記憶?」

??? (白)「ソウダヨーアタサマノネ…セイシンノ…オクソコニネム  
ルキオクサ！ギャハハ！」

和樹「その精神の記憶が何だっただよ?!早く此処から出しやがれ  
！」

??? (白)「アハハ！カッテニシブンカラ、コノセカイニキテオイテダ  
セナンテ…サ?…ズイブンミガツテダヨネ?ギャハハハ！」

和樹「煩い！俺だつて来たくて来たんじゃない！だったらテメエを  
ぶっ飛ばしてでも此処から出てやる！」

ふらつきながらも構えを取り戦う姿勢を見せる。

??? (白)「ワオ！イキナリダネエー！イイヨー！」

和樹「馬鹿にしてんじゃねえ！」

小馬鹿にされ、その生き物に向かって殴りかかった。しかし！

ドゴオ！

和樹「かはっ！」

腹に鮮烈な痛みが走り下の方に目を向けると、和樹「なっ!？」そこには黒い生き物：あの時黒から白に変わった筈の黒い生き物が和樹の腹部に拳をめり込ませていた。

和樹「ぐっ！くそっ…が…。」

ドサツと前のめりに倒れ込み、意識は闇へと沈みそして和樹の体は泡のようにその場から消えた。

??? (白)「アリヤリヤ？ヨカッタノ？」

??? (黒)「ナンのコトだ？」

??? (白)「マタマタ〜アレハ…ボクたちノウツワデシヨ〜！サツキノ  
デ…コ・ロ・セ・バヨカッタジャナイノ〜？ギャハ！」

??? (黒)「フン…！イマのアイツデはオレたちのウツワニはホドトオ  
イ……。」

??? (白)「フーン？ボクニハヨクワカラナイナーギャハ！」

??? (黒) 「ダツタら…スコシはキョウリヨクをシタラドウダ？」

??? (白) 「アツハハハ！ボクハコレデモキョウリヨクヲシテイルヨ  
？」

??? (黒) 「…ソウカ。」

??? (白) 「マア…キミホドノクロウハナイサーギャハ！…オツト!?  
ソロソロジカンダネー？ボクハコレデシツレイスルヨーマダスルコ  
トガアルカラネ〜！ギャハハ！ジャーネー！」

とその白い生き物は高笑いしながらその場をから消えた。

??? (黒) 「フツ…ヤツがココまでキタとイウコトは…オレもホンカ  
クテキにウゴクとシヨウ…オレタチのネガイ…そして…オ  
モイがジヨウジユスルコトを。」

その生き物は誰も居なくなった空間でただ一人玉座に座り、その口  
を歪ませ笑う。

………和樹「はっ  
!?!?!?」

その頃、精神世界から意識が戻った和樹は夢から醒めたように飛び起きた。

和樹「はあ！はあ！はあ！………ふう…スゲー嫌な夢？を見た気がす…る？って何でこんな布団に盛り上がってんだ？」

丁度足元の布団に異様な膨らみがあり、不審に思い布団をめくつた。

和樹「うわあ!?!」

ヨシテル「すうすう Z Z Z」

そこには何故かヨシテルが丁度和樹の腰あたりで寝ていた。

和樹「いや！何だよ!?!…はあ……取り敢えず起こすか。おーいヨシテルー起きろー？」

寝てるヨシテルの肩を揺らし起こそうとした時。

ヨシテル「んう！」 プルン！

和樹「ヤバツ／＼／!?」

意識がまだ浮上して無く無意識に寝返りをうったヨシテルの豊満な胸が揺れて思わず目を逸らす和樹。

和樹「うわあ……これは流石に目の毒過ぎる／＼／＼てか早く起こして、俺も直ぐにシャワー浴びて大学に行かねえとな。」

コンコン!

ガチャ!

ミツヒデ「沢井よ起きているか?少し尋ねたい事があるのだ……が  
…和樹「!?」ヨシテル「くうすうzzz」なっなに／＼……を／＼  
…和樹「まつ待てミツヒデ!?話せば分かる」何をしているんだ  
……!!!」

シャキン!

と懐から自身の武器のクナイを取り出すミツヒデ。

ミツヒデ「最近……マサムネ殿の様に私は身体を動かす事をあまりして無かったな……フッフッフ……丁度良い……技の練習台にさせ

て貰おう！」

和樹「おっおい!？」

ミツヒデ「喰らえ!朱雀剛爆碎!!!」

ドツツカーカーン

!!!!!!!

ミツヒデの必殺技を放った部屋は半壊し処々、焼け焦げていてその横では部屋と同じく焦げた和樹が転がっていた。

桜華「もう!朝から煩いわ!……よっ……て?!?!?!? 何…これ?」

ヨシテル「ふあゝ…んー!よく寝ました!あれっ?私の寝てる部屋じゃn 桜華「此処は和樹の部屋よ。」へっ?!?おっ桜華さん!?!おはようございます! 桜華「ええ…おはよう。」此処…和樹さんのお部屋…:…と言う事は／／／ ミツヒデ「ヨシテル様!?!ご無事ですか!沢井に純潔を散らされてませんか!?!もしそうなのでしたら、御命令とあらば直ぐにでも沢井の息の根を止めます!」ひゃん!／／／ミツミツヒデ!ちっ違いますよ?別にそういった行為はしてません!! ミツヒデ「ほんつー!どうにですか? (疑惑の目)」本当ですってば／／／もう!信じて下さい!…ミツヒデ(うるうる) ミツヒデ「ぐはっ!?(可愛い…可愛い…可愛い過ぎますヨシテル様／／流石!義昭様の姉君!簡単に私の心を貫いてくる!ああ…:ヨシテル様、義昭様、ミツヒデは今…幸せで御座います!) あゝもう…だ…め。」

パタッ

ヨシテル「えっ！嘘!?ミツヒデ!」

ミツヒデ「えへへ〜ヨシテルしま〜／＼／＼。」

ヨシテル「ミツヒデ!?起きて下さい!ミツヒデ!!」

桜華「はあ（片付けは後で考えるとして。）……えーと先ずは気絶してる2人を起こして朝御飯食べましょうか。」

ヨシテル「あっはい!」

・ ・ ・ ・ ・

ヨシテル「と言う事がありました…あはは／＼／＼。」

ソウリン「だから和樹さんとミツヒデ殿は正座していると言う事です  
すね!」

ノブナガ「何とまあしょうもない事じゃのう。」

モトナリ「全くね。」

リキユウ「それは、是非ともその現場に居合わせたかったものですね。」

ミツヒデ／和樹「止めてください！／やめてくれ！」

桜華「それにしても、もう少しミツヒデちゃんは落ち着くことね分かった？」

ミツヒデ「うっ！めっ面目次第も無いです。」

桜華「後、和樹はそういった事は夜にしないで…分かりました？」

ミツヒデ／ヨシテル「なっ／／／」

トシイエ「そういう事ってどう言う事だ？ヒデヨシ！」

ヒデヨシ「うええ!? わつ私も分かんないよー! …あつ! ねえねえイ  
エヤスちゃんなら分かるんじゃないかな!」

イエヤス「ごめんなさい… 私も… そういった知識は… あまり／  
… えと… 和樹… さん。」

和樹「大丈夫だからイエヤス達は気にしないでいいから、てか桜華  
さん! あんたは何の心配をしてるんだ!」

桜華「えー? それはやっぱり和樹もお年頃だし… ね?」

和樹「たくつ／／知りませんよ! そんな事! それよりもう行きます  
から。」

桜華「はいはい! 気を付けてねー!」

和樹「さて行く(カ)(目の色が一瞬変わる)。」

ズズツ! リキュウ／モトナリ「!!!」

桜華「!!! ちよつと待ちなさい! 和樹!」

和樹「はい？早く行かないと遅れs（ガシッ！）うわっ！なっ何で  
すか？急に！」

桜華「あんた少し顔色悪くない？（一瞬だけど和樹の目の色が変  
わった!?!: : : ような？） : : : 何か変な出来事でも : : : いやそれは無い : :  
か？（それだともっと早く兆候が出るはず : : : まさか!?! 私が知らな  
い内に封印に綻びが!?!） ねえ : : : もしかしてだけど今日起きる時に嫌  
な夢でも見た？」

和樹「っ!?!（確かに : : : 見た : : : があれは本当に  
夢だったのか？やけに現実味のある様な不思議な感覚だった。で  
もあの空間にいたアイツ等 : : : 駄目だな、今の段階じゃ何にも分かん  
ねえな : : : 自分の事だったのに。） いえ : : : まあ夢なら確かに見まし  
たけど、悪い夢なのかも曖昧で。」

桜華「そう : : : （嘘ね : : : 和樹自身がまだ確証を得てない時点で無理  
に追求は出来ないし : : : あの嫌な感覚はモトナリちゃんとりキュウ  
ちゃん辺りは気付いたかもね : : : : : : それともあるいは。） 分かった  
わ！取り敢えず無理はしない事、しんどかったら途中で帰って来ても  
いいから。それと : : : これ！持つきなさい！」

和樹「これは？」

桜華「私が作った御守よ！大切に使いなさい！」

和樹「ありがとうございます。桜華さん。」

ヨシモト「良かったですわね！」

和樹「ああ…それじゃ行ってきます。」

乙女達＋桜華「「「「「行ってらっしやい！」」」」」」

・ ・ ・ ・ ・

〜青年通学中〜

ズキ！

ズキ！

和樹「痛え、何なんだよ！この頭の痛みは起きた時はこんな痛み無かったのに」「ホントウにソウオモウか？」「だっ誰だ！」

雅晴「うおっ！びっくりした！」

和樹「!?まつ…雅晴…か。」

雛「おつおはよ！和樹！いきなり凄い剣幕で振り返ったから驚いて声が出なかったよ！」

和樹「あつ…ああ…悪い。それとおはよう。」

雅晴「まあ良いけどよ。それより何か調子悪そうだな？」

和樹「べつ別に…なんて事ねえよ。」

雛「でも、かなり顔色も悪いよ？」

和樹「だから…大丈夫d（ズキン！）ぐあつ！」

雛／雅晴「和樹！／和！」

和樹「ぐつ…ああ…いつ痛い（ズキン！）（ズキン！）うっ…  
ううう。」

雅晴「おいおい！これヤバいんじゃない！」

雛「はっ早く救急車呼ばない」 和樹「呼ぶな!!」 えっ!?でも!」  
和樹「良いから…ハア…ハア…呼ばなく…ハア…ても…ハア…いい  
(ギロツ)」

雛「(ビクツ!) わっ分かった。」

雅晴「おい!何もそこまで睨みつける事は無いだろうが!雛ちゃん  
はお前を心配し」 雛「やめて!」 ひっ雛ちゃん!

雛「良いの!まーくん!…私が余計な心配したから…だからごめん  
ね和樹!」

雅晴「あつちよっ…雛ちゃん!…おい和!いくら心配掛けたく  
なくてもあれは… 和樹「…」 …はあ全く世話の焼ける幼馴染だな  
(笑)」

和樹「雅…その…すまな 雅晴「あー!みなまで言うなって!わー  
てつるからよ!ちゃんと雛ちゃんには俺様から話しとくし、お前は暫  
く頭冷やして来い。んでもってしっかりと謝れよ!」 あっああ…  
分かった。サンキューな。」

雅晴「おうよ!んじやまあ俺様も先に行くわ!」

和樹「(ありがとうな雅) 少しゆつくり行くか。」

〈青年移動中〉

・ ・ ・ ・ ・

〈とある路地裏〉

モブヤンキー「オイオイ！それは無えだろうよ！あああん！！」

モブヤンキー2「そうそう、此処を通りたいなら通行料を払って貰わないとね」

モブ男子高校生「ひっひい！すすみません！でつでも通して欲しいです。がっ学校におっ遅れるので。」

モブヤンキー「だあーかあーらあー此処はkill・the・skullのヘッド飯島さんのナアバリ何だよ！良いから通行料1万円払えや！」

モブ男子高校生「そつそんな事を言われても1万円何てありません！」

モブヤンキー2「ふーん？それじゃ2択から選ばせてあげる。モブ男子高校生「へっ!？」 先ず1つ目は素直に1万払って進むか。もう1つは…そうねえ…大体後、10分位で飯島さんも来られるだろうし貴方をボロ雑巾にしてから通行料を頂くわ。」

モブ男子高校生「いつ嫌だ！」

モブヤンキー「待てよ！逃げてんじやねえよ！」

ドン！ モブ男子高校生「ぐあ！…うっうう…だっ誰か助けてくれ。」

モブヤンキー2「残く念誰も助けには来ないよ。」

ドッ！

モブヤンキー2「んもう！誰よ！」

和樹「ああ……悪いな。」

モブヤンキー「何…そのままシカトして行こうとしてんじやねえ！」

和樹「別にシカトして無いだろうが、謝ったんだからよ。」

モブヤンキー2「巫山戯てるの？あんた？」

モブヤンキー「ああもういいや！コイツも次いでにボコれば良いだろうが！鬱陶しいしよ！」

和樹「チツ！（面倒事になったな）おい…そここのあんた逃げろ。」

モブ男子高校生「えっでも！」

和樹「良いから行けつての…其処にいられる方が邪魔なんだよ。」

モブ男子高校生「わっ分かりました！何方か知りませんがありがとうございます！」

タツタツタ！

モブヤンキー2 「ふうん？偉くカッコいい事するんだね。」

和樹「そんなつもりは毛頭ねえな、テメエらをぶっ飛ばすのを赤の他人に見られたくないんでな。」

モブヤンキー「調子に乗んなよこのクソが!!」 そう言い拳を振り被つて来るのをいなしてその勢いを利用して背負い投げをし、もう一人が蹴りを放つ前に手で抑えて飛び蹴りを放つ。

ガッ!

パシッ!

バコッ!

モブヤンキー／モブヤンキー2 「ぐあー!／くっ!」

和樹「悪いが、これ以上無駄に時間を潰す気はねえんだわ。」

モブヤンキー2 「つつ強い!」

モブヤンキー「糞が!!!」

和樹「……通してもらいな。」

???「おいおい！楽しいそうな事してんじやないの！俺も混ぜてよ。」

和樹「!!!」

ドゴツ!!

和樹「カハツ！何だ…お前？」

???「俺？あー！自己紹介しないとなー！俺は飯島ってんだ！」

和樹「飯島？」

飯島「ああ其処の座り込んでる馬鹿共の居るチームのヘッドを務めてるもんだ。」

モブヤンキー／モブヤンキー2「いつ飯島さん！」

飯島「チツ！情けねえ真似しやがって。」

モブヤンキー「すつすいません！」

飯島「取り敢えずだ、お前らの制裁は後で決めるとしてだ。まずは客人にお礼をしないと…なあ?。」

和樹「あなたの客人になった覚えが無いし、礼をされる覚えも無い。」

飯島「まあそお言うなよー俺の舎弟を可愛いがってくれた礼だよ。」

和樹「…タダで返す気は無いってか?。」

飯島「その通りさ! だから…全力で相手してくれよオオ!! ……漆紅の龍!。」

ドゴン! 和樹「ぐつつつ!! 俺の事を知っていたのか!?!」

飯島「まあな! 一度は戦ってみたいと思っただんだよ! オラツ!」

和樹「うわっ! (コイツ強え)」

飯島「まだまだ行くぞオ！」

直ぐ様ラツシユを叩き込んでくる飯島。すかさず体制を立て直し月影流の構えを取る和樹。和樹「壺ノ型・翡翠！」飯島のラツシユを弾きながら懐に入り込み両手を十字に合わせ撃ち込む。

飯島「ぐああああ  
!!!!!!」

技を食らった飯島は後方に大きく吹っ飛ばされた。

和樹「はっ！（ヤバい!?咄嗟に力を込めちまった。）おっおい！  
飯島「いい感じだ…。」なっ…!?!」

飯島「まだ…終わるには早いだろうがあ！ハア…ここからだろう？  
楽しい時間はよー!!!」

和樹「うっ！（ズキン！）まっまた…かよ！飯島「オツ  
ラツツツツ!!」ブハッ!…ゲツホ!…ゴホッ!…ゴホッ！（ズキ  
ン！）（ズキン！）ぐあ！」

飯島「おい！お前らも参加しな！やられた分を返してやれ！モブ  
ヤンキー／モブヤンキー2「はっはい!!」漆紅の龍さんよ！この  
程度でくたばるんじゃねえぞ！」

モブヤンキー「へへッさつき良くもやつてくれたな…死ねや！コラ  
！」

バキッ！モブヤンキー2「存分にいたぶつてあげるよ！」

バコッ！

和樹「ウエツ！…カハツ！…ハア…ハア…ハア。」

飯島「もう少し骨のある奴だと思ったんだがな…つまんねえな。  
…ちと物足りないが、まあいい…オイ！後はコイツから取れる物  
取っておけよ！」

モブヤンキー2「分かりました。ごめんね？悪く思わないでね。」

モブヤンキー「さて俺はっ…と（和樹の携帯を弄る）おっ！こい  
っは！」

モブヤンキー2「どうかした？」

モブヤンキー「ああ…良いもんだぜ！飯島さんこれを見て下さい  
！」

飯島「何だ?……ほう。(ニヤツ)」

モブヤンキー2「あら!ヤダ!可愛いわね!これはもう呼び出しかしら?。」

モブヤンキー「名前は皆本雛…私立絢狼大学理事長の孫娘らしいっす!」

飯島「くくっそうだな…呼び出してコイツの目の前で傷物にしてやるか…。(ゲスな笑い)」

和樹「!!」

モブヤンキー「良いっすねー!最近ご無沙汰だったんで!」

モブヤンキー2「でも、それは良いとしてももう1人連絡先にあるわよ?九条雅晴…名前からして男だね。」

飯島「ソイツも呼ぶとしようか。」

モブヤンキー「呼ぶんですか?」

飯島「ああ…男の方は来たらサンドバッグにすれば良いだろう？」

モブヤンキー2「確かに、もう少しストレス発散したいわね！」

和樹「……………。「オモエ」（こいつ等…好き勝手に言いやがって「ホンノウノママニ」…雛を傷付けるだど？「ウラメ」…雅晴をサンドバッグにするだど？「ニクメ」…絶対に許さねえ「イカレ」…俺の大切な幼馴染達を傷付ける奴等を「コロス」…ろす…殺…「コロセ」…殺して「コロセ」…殺してやる！「コロシテヤル！」（目の色が金色に変わる）」

モブヤンキー「んあ？何だあ急に立ち上がりやがって…まだ殴られ足りないのか？まあ喜べ次はお前の友達も呼んで一緒にボロ雑巾にしてやるかr「メキヤ！」…ブバア!!」

立ち上がった和樹に近付いたモブヤンキーが顔面を全力で殴り飛ばされ壁にめり込んだ。

モブヤンキー2／飯島「そんなっ！／何だと!!」

和樹？「……………」

飯島「いきなり起き上がって一発くれてやるとはな…恐れ入るぜ！  
まだそんな力を残していやがったか！だったらまた眠らしてやるよ  
!!」

顔を上げないまま地面を見つめる和樹に痺れを切らした飯島が和樹目掛けて左拳を打つが、瞬時に身体を捻り伸びきった所を肘と膝で挟み込み飯島の腕をへし折った。

バキツツツ!!!

飯島「ぎいいやあああああ  
!!!!!!!」

折られた腕を抑えながらのたうち回る飯島。

ドゴツ!

バコツ!

ドカツ!

和樹? 「……………」

転げ回る飯島にさらなる追討ちを掛ける。

飯島「やめっ！ゴホッツ！」

顔を腫らした飯島の頭を掴み持ち上げ、空いてる方の手で首を絞め始める和樹。

飯島「オエエエ！じっじめ！ぐっぐるじいいいい！！！！」

等々白目を向いて泡を吹いてしまった飯島に飽きてしまったのか、興味を無くした子供の様に投げ捨てた。そして最後の標的に視線を向け歩みを止めない。

和樹？「……。」

ガタガタガタガタ！モブヤンキー2「ひい！（ビクッ！）ゆっ許して！おっお願いします！」

和樹？「…死ネ。」

グシヤ！

バタツ！

その場は一瞬にして四面楚歌となり、1人となった和樹？は独り言のように話し始める。

和樹? 「……………マサカコウイウホウホウでオレとドウチヨウスルトは。(イゼンはコイツジシンのセイシンがヨワツタトキにムシバ  
ンでノツトルカタチダツタがコンカイのホウホウでアレバオレのチ  
カラをソコマデヒツヨウとシナクナルナ。) フツ: コレはイイジヨ  
ウホウをエタ。」

(キイイーン!) 足元に魔法陣が現る。

和樹? 「コレハ!?!グツ!?!チカラがヌケル!?!アノミコのマツエ  
イのチカラがハタライテイルノか!?!マダ!?!コイツのイシキを  
ノツトルジカンもケツシテナガクはナい!?!ハア!?!シカタナイ!?!コン  
カイはコレでヒキアゲルとしよう。(目の色が元に戻る)」

ドサツ!

糸の切れた人形のようにその場で崩れ落ちた。

〜30分後〜

和樹「っ!」何? 「俺は?…どうしたんだっけ? (何か頭が  
ぼーとする)「?!?!コレもっもしかして俺!?!うっ嘘だろ!?!うっう  
わああああ!?!?!」

思わず蹲り震える自身の身体を抱き締める。

和樹「ハア……ハア……ハア……ハア（落ち着け！落ち着け！冷静に！冷静になれ！）ハア……ハア……俺が……やったん……だな。」

（携帯の着信音）　　く♪く♪

和樹「（ビクッ！） なっ何だ……雅晴からか、もしもし？」

雅晴（携帯）「おー！やっとうたか！てか何処をほつつき歩いてんだよ！和樹「わっ悪い！」頭冷やして来いとは行つたが1時間以上も来ないとは思わねえよ！雛ちゃんも和が来ないからまた心配してオロオロしてんだからはよ来いよ……じゃあな。」

和樹「……早く行かないとな。」

和樹が去った後

黒服を着た男？「これが漆紅の龍と言われる沢井和樹の真の力か……厄介だな、とにかくあの御方に報告をしなければ。」

・ ・ ・ ・  
私立絢狼大学前

ヨシモト「何とか、着きましたわね！」

ソウリン「ふぁー大っきいですねー！」

ドウセツ「落ち着いて下さい。ソウリン様。」

マサムネ「因みにどう入れれば良いのだ？」

ヨシモト／ソウリン／ドウセツ「「あっ!!!」」

正に前途多難はてさて乙女達は無事に大学に入れるのか？

## 20話

く市立絢狼学園正門前く

ヨシモト「どっ!?!どう致しますの!!私達此処の入り方なんて知りませんわ!」

マサムネ「そうだな、一見する所外見と細部はかなり違うが私達の時代にもある門に間違いは無いだろう。」

ドウセツ「では、門番の方を見つければ事情を説明出来ますね。」

ヨシモト「そうは言っても…それらしき方なんて見当たりませんわよ?」

マサムネ「仕方ない、余り動き回るのは良くは無いが探すしかないだろう?」

ドウセツ「それで御座いますね。…ソウリン様はそれで宜しいですか?…ソウリン様?」

マサムネ「ソウリン殿なら門の前だぞ。」

ソウリン「ハア~~~~♥」

門前でウツトリとした表情で祈りを捧げるソウリン。傍から見ればそれはまるで：神に祈りを捧げる儂げな聖女その者……と言いたいがこの時のソウリンの心の中はというと。

ソウリン「(どうしよー!!私が知らない南蛮の物が所狭しと来るま  
でにいっっぱいありました!!それに!この門の装飾も南蛮も物で  
すよね!?!……あー触れてみたい!でも勝手に触るのは良くないで  
すし!でもでもやっぱり触りたい!!……と言うかこれだけあるのな  
ら1つ位……いや!駄目ですよ私!!神に背く行為など断じてしてはい  
けません!……でも……う〜)」

ドウセツ「またですか。(呆)」

ヨシモト「私達が話をしてる間あそこから微動だにしていませんわ  
(呆)」

ドウセツ「全く……仕方がありませんね。……はあ。」

そう言いながら微動だにしないソウリンに近づくとドウセツ。

ドウセツ「何時までそこで呆けているのですか?早く門番の方を見  
つけなければなりませんので、早急に復活して頂きましょう。(黒笑)」

…では、失礼いたします。」

そう言うやいなやドウセツは片膝を地面に付けて、右腕を伸ばし、左腕で固定し指をデコピンの形にする。未だに祈っている（雑念）フリをしているソウリンのおでこの前で構える。

ドウセツ「ハア！」

バチコン!!!!

ソウリン「つつつつ?!?!? いったああああい!!!!!!」

突然の衝撃に堪らずおでこを抑えながらスカートの中身を気にせず足をバタつかせるソウリン。

そんな状態の主を見ながら「大袈裟過ぎで御座います」と一溜息をつくドウセツ。

マサムネ「いや、今のは誰が受けても痛いだろ…。」

ヨシモト「ですわね…もう少し手加減して指し上げれば宜しかったのでは?。」

苦笑いしながら離れていた二人が、痛がって起き上がらないソウリンを心配する。

マサムネ 「大丈夫か？ソウリン殿？」

ソウリン 「大丈夫じゃあ……ないですよ。（涙目）」

ヨシモト 「ほらほら！そんな所で寝ていたら品位を疑われますわよ？」

ソウリン 「うゝ！（涙目）」

未だに起きようとしないうソウリン見てドウセツはおもむろに呟いた。

ドウセツ 「ソウリン様……その状態のままですと……下着が丸見えで御座いますソウリン「もう！／＼／＼ドウセツ！！／＼／＼……」。

いきなりそんな事を言われておでこの痛みなどすっかり忘れる程に、顔を真っ赤にしたソウリンがスカートを抑えながら起き上がった。

ソウリン「全く：／＼／＼ドウセツってば／＼。(ジト目)」

ドウセツ「元はと言えば、ソウリン様が話を聞いていないのが悪いのですよ?。」

ソウリン「うっ!?それを言われると…。」

マサムネ「コホン!…まあそれ位で良いではないか?。」

ドウセツ「マサムネ様?…ですが。」

ヨシモト「それよりも先にやるべき事がありますわよ?。」

ソウリン「そっそうですよ!ヨシモト殿の言う通り!!」

マサムネ「くくっ!…そうだな…それではさつき話していた門番の人を探す方向で行こうか。」

ドウセツ「はあ…：致し方ありませんね…取り敢えず今は時間も限られていますから…後程、二人でゆっくりお話致しましょうか…：ソウリン様(黒笑)」

ソウリン「ハ…ハハツ…ハイ。」

???「あー済まないが少し良いかな？」

突然背の低い小太りのおじさんが声を掛けてきた。

マサムネ／ヨシモト／ドウセツ／ソウリン「「はい？」」

???「私は足立と言うんだ、其処の門の管理をしている者だが…まだ中で講義を受けている子達が居るから門前で騒ぐのは少し控えて貰えないかな?…済まないねえ。」

ソウリン「あー！居ましたよ!!」

足立「!?何か僕に用なのかな？」

マサムネ「はい…実は…。」

く乙女説明中く

足立「うーん…なるほど、詰まる所君達は沢井君の知り合いで彼の忘れ物を届けに来たという事…でいいのかな？」

ドウセツ「その通りで御座います。」

足立「そうか…。」

ソウリン「どうにか通して頂けませんか？」

足立「いや、僕としては通してあげたいんだけどね。」

ヨシモト「何か理由でもあるんですの？」

足立「ああ…そもそもこの学園の敷地内に一般の方が入る為には、誰か教職員一人の許可と理事長…もしくは教頭の承認があつて初めて入れるんだよ。」

ソウリン「そんな！」

足立「今日は来賓方や生徒の家族さんが来られる連絡は来てないからね、申し訳ないけどこれも決まりなんだ。」

ドウセツ「決まりではどうしようも御座いませんね。」

マサムネ「これでは、和樹に弁当を届けられないな」

足立「ん？弁当？…って事は君達は彼のファンか何かかい？」

ソウリン「ふあん??？」

足立「あっあれ？違うのかい？てつきりファン子達かと思ったんだけど…。」

ドウセツ「いえ多分勘違いdヨシモト「いえ!!ふあんですわ!!!」なっ!？」

マサムネ(ヨシモト殿!?!いったい何を考えているんだ!そんな嘘を言って!)

ヨシモト(嘘ではありませんわ!!実際に和樹さんは素晴らしい方ですし:ファンの意味は良く分かってませんけど、ただ…この場を好転出来ればと思ひまして…:咄嗟に。)

マサムネ(はあ…:私達ではこちらの言葉は分からない物も多い、無闇に聞いたことない言葉は口にするべきでは無いだろう。)

ヨシモト（うつ…申し訳ありませんわ。）

足立「!!やっぱりそうなのかい！」

ソウリン「…やっぱりってどう言う事ですか？」

足立「あーその…本人が居ない所で余り言いふらす事じゃあ無いんだけど…これから言う事は爺の独り言だと思っておくれ…：…：彼がとある大会に出ていた事があってね、試合の最中そこで事件が起きたんだ。」

ドウセツ「事件…ですか？」

足立「ああ…流石に事件の事を全部伝えられないけど、その事件がきつかけで彼は周囲から化け物と呼ばれ忌み嫌われる様になってしまってるね。」

マサムネ／ヨシモト／ドウセツ／ソウリン「「「「「  
!?!?!?」」」」」

ソウリン「そんな…そんなのってあんまりですよ!!」

ヨシモト「酷すぎますわ！和樹さんがその様に言われる理由が分かりませんわ！」

足立「ああ…僕もそう思うよ…あの時の彼には何か異変があったのは確かだったんだ、ただその試合がとても凄惨で僕達もその場から動けずどうしていいか分からなかったんだ。」

ドウセツ「ですがその時に和樹さんを救うと言うのは難しいと思いますが、その後で何か手を打てれば批難を受けるのを回避出来たのではありませんか？」

足立「勿論、彼を守ろうとしたさ…けども試合内容だけを見れば100人中100人が彼を悪だと言う中で彼の異変に気付けたのは僕や彼の幼馴染位だろう。更に…その会場にいた観客や選手に審判それに主催者側の人間達が一斉に彼に罵声を浴びせ孤立させる様に全ての罪を彼一人に押し付けてね。」

マサムネ「罪を？と言う事は他に原因があったと言う事ですか？」

足立「ある…とは思うけど、証拠をどれだけ探して提示してもその要因や確証を得ない物ばかりでね主催者側には聞き入れられなかったよ…だから僕達に出来た事は理事長に相談して彼の学園内での居場所を守る事と心の支えになってあげるしか出来なかった。」

ソウリン「そうだったんですか…。」

マサムネ「和樹……。 (化け物…か…昔の私と似ている。)」

足立「いやはや…済まなかったね！学園内にも入れられ無いのになんな話をしてしまつて。」

ヨシモト「でもどうして私達にそのお話をされたのですか？」

足立「…何だろうね…君達を見ていたら、ついつい話したくなつたんだと思う…君達が彼の…沢井君の知り合いで彼のファンと言つてくれた事が不思議と僕も嬉しくてね…いつか彼の抱えている物が無くなつて、本当の笑顔になるつてそんな気がするよ。」

ヨシモト「私も微力ながら和樹さんの力になりますわ。」

ソウリン「勿論!!私も神に誓います!絶対に!和樹さんの力になります!」

ヨシモト「私の方が確実に力になつてあげられますわ!!」

ソウリン「いーえ!私の方が!」

ヨシモト「私ですわ!」

ソウリン「私です！」

ヨシモト／ソウリン「ムムム!!!」

マサムネ「私達も居るんだがな。」

ドウセツ「完全に蚊帳の外で御座います。」

足立「アツハツハツハ!!そうか!そうか!…暫く学園に顔を出さない間に良い出会いがあったんだね。」

ドウセツ「では私達はこの辺で失礼致します。」

マサムネ「そうだな、これ以上長居してしまうと足立さんにも迷惑が掛かる。」

ヨシモト「そうですね。」

ソウリン「ですね…足立さんも仕事頑張ってください!神の御加護があらんことを。」

足立「ハハッありがとう！次に来る時は正式に手続きしてくれれば中には入れるからまた来ると良いよ！…あつそれと代わりと言っては何だけど、お弁当渡しておこうか？」

マサムネ「良いんですか？」

足立「ああ構わないよ！それと君達が来た事も伝えておくよ。…えーとまだ名前を聞いてなかったね、教えてもらえるかな？」

マサムネ／ヨシモト／ドウセツ／ソウリン「「「あつ!?!」」」

足立「ん？どうかしたのかい？」

ヨシモト「いえ！何でもありませんわ！ねえ！（どうしますの!?!? 実名何て言えませんかよ!?!）」

マサムネ「そうだ!!何でもない！（そんな事は分かっている！偽名を使うしか無いだろう!）」

ソウリン「そうそう!!（偽名って言われても直ぐには思い付きませんよ!?!私達の時代じゃあ偽名なんて使いませんし!?!）」

ドウセツ「!?!…名前は…マサムネ／ヨシモト／ソウリン（まさ

か?!?言う気!?) (橘刹那(たちばなせつな)と言います。隣の青い長髪の方が伊達音夢(いだてねむ)さんです。次に黒い長髪の方が弓川友葉(ゆみかわともよ)さんです。最後に背が低い金髪幼女が大巴羽梨(おおともうりん)さんです。)

マサムネ／ヨシモト (おー!!流石だ／ですわ!)

ソウリン (誰が背が低い幼女だー!!!  
!!!)

マサムネ (まあまあ。)

ヨシモト「では、こちらのお弁当を渡して頂けますか? 足立「分かったよ! しっかりと渡しよ???」足立さん。「ん? ああ! これは教頭先生! :何か自分にご用でしょうか?」きょう…:とう???

足立「この学園で2番目に偉い先生だよ。」

???'「フフツ! :別に私自身偉くはありませんよ。只々今の地位に立たせて頂いてるだけですよ。まだまだ成長しなくては理事長にも学園にも貢献出来ませんから。」

足立「そのご意思は毎度の事ながら感服しますよ。」

??? 「いえその様は事は…もしかしてお取り込み中でしたか？」

足立「いいえ…その…少し世間話をしてまして、すみません仕事をほったらかしにしてしまいまい。」

??? 「構いませんよ。今は丁度休憩時間ですからね。…ああそちらのお嬢さん方にはご挨拶が遅れてしまい申し訳ありません。私は私立絢狼学園教頭の篠原と言う者です。以後、お見知りおきを。」

ドウセツ（刹那）「始めまして、私は橘刹那と言います。隣から順に伊達音夢さん、弓川友葉さん、大巴羽梨さんです。」

篠原「これは…御丁寧にどうも。しかしまさか足立さんにこんな素敵な知り合いの方達がいらっしやるとは存じ上げませんでしたよ。」

足立「あつ！、いやこの子達はですね…僕の知り合いと言うより沢井君の知り合いでして。今日来たのも彼にお弁当を届けに来られた用で。」

篠原「なるほど、沢井君も以外と偶に置けませんね。では何故此処で立ち話を？直接渡せば沢井君も喜ぶと思えますが？」

足立「その…彼女達は許可証を持っていなくてですね…来た時にその事を説明したんですけど、知らなかったみたいで。」

篠原「そう……ですか……沢井君からは聞いてなかったのですか？」

ドウセツ（刹那）「聞いていません。」

ヨシモト（友葉）「お恥ずかしい話……私達は片田舎の方から来まして和樹さんと出会うまでは余りこちらの大学の事は詳しくありませんの。」

マサムネ（音夢）「和樹……さんには学園に来るのは出来るだけ止めて欲しいと言われていて、けど私達の我が侘で来たんです。弁当は足立さんが預かって渡してくれるそうなので……もう帰る所でした。」

篠原「分かりました……それでは足立さん、彼女達を学園内に通してあげてください。」

足立「宜しいんですか？」

篠原「ええ……承認は私がします。」

足立「分かりました。門を開けてきます。」

そう言うと足立は門を開けた。

ゴゴゴゴゴ  
!!!!!!

ガシャン！

ソウリン（羽梨）「本当に！ありがとうございます！御座います！」

篠原「礼には及びませんよ。但し今回だけです。今後は、しっかりと手続きをしてから入って下さい。」

ドウセツ（刹那）「分かりました。」

足立「それではこの許可証を首から掛けて下さい。」

マサムネ（音夢） ヨシモト（友葉） ソウリン（羽梨） ドウセツ（刹那）  
「はい！」「はい！」

篠原「では、案内します。…それと足立さんにこれを持って行って欲しいのですが…。」

すると篠原は手に持っていた茶封筒を足立に渡した。

足立「これは…?」

篠原「もう直ぐ武道の冬季大会の県予選が始まるのでね…その登録申請用紙ですよ。」

足立「あーもうそんな時期ですか…。」

篠原「今年こそは去年の雪辱を果たしていただきたいものです。」

その言葉を聞いた瞬間、足立の表情に陰りが差した事に気付かない篠原はその後話続ける。

篠原「去年の出来事で暫く出場停止になったにも関わらず主将の矢倉君を中心に皆努力し研鑽し合ったからこそ今の結果に繋がった！  
…沢井君の件に関しては本当に残念でならないですが。」

足立「……………はい。」

篠原「その書類を日本鬪武神協会に今日中に届けて欲しい。」

足立「わっ分かり…ました。」

ソウリン（羽梨）「足立さん？大丈夫ですか？」

足立「ありがとう心配してくれて！大丈夫だよ！羽梨ちゃん達も気を付けて行ってくるんだよ？」

おもむろにソウリンの頭を撫でる足立。

ソウリン（羽梨）「もう！足立さんまで子供扱いしないで下さい！」

足立「それは済まないね！では、改めてお気を付けてお入り下さい。」

篠原「それだけ宜しくお願いします。」

そう言うとき篠原はソウリン達を連れて学園内に入っていくときそれを見送った足立は「つたため息を吐いて」一言零した。

足立「はあ……やれやれだよ。」

〈私立絢狼学園内〉

ソウリン（羽梨）「ほあああああ!!! 凄い!!」

マサムネ（音夢）「ソウ r…違う…羽梨！少し静かにしたらどうだ！」

ヨシモト（友葉）「まあでもソ u…羽梨さんがはしゃぐのも無理ありませんわね。此れだけ広い敷地は見た事ありませんもの！」

篠原「そう言っ頂けると嬉しい限りですね。この近辺でも1、2を争う程の広さですよ。右手に見える建物が日々の講義行う所です。そして目の前にある建物が寮ですね。」

ドウセツ（刹那）「寮と言うのは？」

篠原「寮と言うのは寄宿舎と言う意味ですね。この学園は特にスポーツと武道に力を入れてましてね…推薦来る特待生の方や部活生に必ず寮に入って頂いて貰って自身の目標や大会に向けて集中出来る環境を作っています。」

ドウセツ（刹那）「なるほど。では、あちらの広場で集まっているのは先程言っていた部活というもので御座いますか？」

篠原「そうです。左手に見えるのが部活棟と呼ばれる所ですそして

その棟の前にグラウンドがありそこで行ってるのが今、橘さんに言った部活動です。…少し見学していきますか?」

ドウセツ（刹那）「良いのですか?」

篠原「まあ皆さんが良ければ構いませんよ。」

ソウリン（羽梨）「わあ!行ってみたいです!」

マサムネ（音夢）「確かに気になるな。」

篠原「それでは向かいましょうか。」

く学園内グラウンドく

ソウリン（羽梨）「これって!!」

ドウセツ（刹那）「蹴鞠…に似てるような気はします。」

篠原「これはサッカーと呼ばれるスポーツの1つです。しかし…蹴鞠とは、よく昔の球技の事を御存知で。」

ソウリン(羽梨)「え〜とそのドウs…じゃなくて刹那と良くしていたんです！」

篠原「なるほどそうでしたか。」

マサムネ(音夢)「皆良い笑顔だな…。」

ヨシモト(友葉)「そうですね。」

各々フェンスからサッカーをしている様子を見ると、篠原に声を掛ける生徒が1人。

サッカー好きのモブ生徒「教頭先生！こんにちは!!」

篠原「こんにちは。頑張っている様ですね。」

サッカー好きのモブ生徒「はい!…所で今日はどうしてこちらに？監督に用事ですか？」

篠原「いや、そう言う訳では無いんだよ。彼女達を学園に案内していてねその途中で君達を見掛けて見学をしていた訳なんだ。」

サッカー好きのモブ生徒「そうだったんですね！」

ソウリン（羽梨）「もしかしてお邪魔でしたか？」サッカー好きのモブ生徒「いやいや!!そんな事ありません！（うわ／＼／＼／＼全員美人だなー／＼／＼惚れそう！／＼）全然見学して下さい！皆もやる気出ると思います！」

マサムネ（音夢）「ありがとう。」

プルルルッ！

プルルルッ！

篠原「!…少し電話に出て来ますので失礼します。」

ヨシモト（友葉）「あっ…はい。」

く部活棟裏く

篠原「もしもし。私だ…ああ…そうだ…その手筈で頼むぞ。4人の写真はそっちにあるな?…ああ…くれぐれもしくじるなよ? 監禁部屋も用意済みだ…分かったな。…まさかこんな早くに探し

ていた餌が向こうから来るとは、後は奴等に任せて高みの見物とさせて貰おうか。」

くとある廃墟？」

??? 1 「さあ、お偉いさんからの仕事だ。」

??? 2 「今回の仕事内容は…？」

??? 1 「この写真の女共を捕えてある部屋で監禁しろとさ。」

??? 3 「なんじゃあ…その糞みたいな依頼はワシ等を舐めとんのか？」

そいつはよお？」

??? 1 「さあな…お偉いさんがどう思っていようが依頼がある以上、俺達は完璧に仕事を完遂するだけだ。」

??? 2 「ふう…当たり前前の事デシヨ。それよりも場所は何処なの？」

??? 1 「私立絢狼学園だそうだ。」

??? 3 「おっ!!そこは聞いた事あるなあー。確かどえらく強え奴が居

るらしいじゃあねえか!!!」

??? 2 「漆紅の龍だっけ?…確かそんな感じだよね。」

ゴキツ!

ゴキツ!

??? 3 「ほう…えらく大層な異名だなあ!久々に腕がなりそう  
だあああああ!!!!」

??? 2 「…五月蠅い。」

??? 1 「それじゃあ…部隊八咫烏行動開始。」

シユン!

その言葉と共に3人はその場から消えた。